異世界のかけら -断片集-

滝底

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界のかけら　―断片集―

【Ｎコード】
Ｎ６０１７Ｓ

【作者名】
滝底

【あらすじ】
ネタ帳的な断片集です。
長編異世界トリップファンタジーの一部を切り取ったものがほとんどになると思います。
◆『人違い』…トリップ・騎士・追いかけっこ・ヤンデレ
◆『糧召喚』…召喚・魔族・食糧・歌
◆『危険な特技』…召喚（失敗）・騎士・全身鎧・隠れ美形
◆『異世界人だらけ』…トリップ（強制就職）・巨大図書館・眼鏡・ブルーハワイ

◆『復讐劇？』…召喚・魔族・鳥・もふもふ・結婚・裏切り
◆『刺青師？』…迷い込み・タトゥ・魔道具・色んな美形・マッチョも出るかも
／／／／キーワードを参考に、興味が引かれるものがあったら覗いてみてやってください。各話の前書きにそれぞれのキーワードも載せてあります。

◆異世界で人違い？　前編　（トリップ）（前書き）

【キーワード】

異世界・トリップ・女主人公・騎士・追いかけっこ

◆異世界で人違い？　前編　（トリップ）

「――……何故、逃げるのですか」

――こっちが聞きたい。

何故、追い掛けるんですか……。

目の前に迫る月色の瞳に、淡い碧の虹彩が熱く燃えるようにちらちらと踊っている。

その瞳を見つめながら、私の胸は高らかに鼓動を打っていた。

――散々走り回った所為だ。

この、目の前の息も乱さぬ精悍な顔つきの青年に、追い掛け回されて。

◆◆◆◆

今日は街で少し大きめのお祭りがあった。

何でも、『神水祭』というらしい。

文字通り、水の神による恵みに感謝し、またこれから先も豊水であるようにと祈願するお祭りらしい。

元々、この街を含むブリュエス国は豊富な水脈があることで有名で、街にも至るところに水路が張り巡らされ、また綺麗な噴水もたくさん設置されている。森に入れば幻想的な泉や湖がある。

そうした水の恩恵は、水の神の加護によるものだと信じられていて、国自体も水神によって守られているとされている。

その水神による加護に謝意を表して、国内の主要な都市や大きめの街には小神殿と呼ばれる水神を祀る神殿が建てられていて、年に一度、水神の神子がその各地の神殿を回る、国を挙げての大々的なお祭りが催されることになっていた。

大々的とは言っても、国全体で見たらという話で、城下と主要三都市以外の各地方の街では大袈裟なものになるわけじゃないみたい。

小神殿のある地方の街では、神子が滞在する二日間だけ祭りは開かれ、小さなイベントがいくつか催され、皆で水神への祈りを捧げて終わる。

二日目には『神水祭』の一番メインのイベントである『泡花流し』というものが行なわれる。

これも読んで字の如しで、街にある噴水や水路に、ある特別な植物から作れる天然の泡と色とりどりの花の花弁を流すものだ。

水神に感謝するのに、噴水や水路を汚すようなことをしていいのかと疑問に思ったけれど、流す泡には汚れを吸着する力があるらしくて、流石に水中までとはいかないけれど水面の汚れを掃除できるから理には適っているということで納得した。とは言えもちろん、祭りの最後には花弁なども回収することになっているのだけど。

澄んだ水面に真っ白な泡と、色とりどり大小の花弁が散る様は、それはそれは綺麗なんだそうだ。

そして、今日はその二日目なのだ。
私はこの祭りで“花弁売り”をしていた。
お世話になっている人が“泡売り”をするということで、私もお手伝いをさせて欲しいと頼んだんだけど、初めてのお祭りなのだから『泡花流し』を見た方がいいと言われてしまった。
なんでも泡売りは一定の場所で、予め用意した植物を只管(ひたすら)泡立てて売るという地味な作業だから、若い娘がする仕事じゃないらしい。
私は別に気にしないんだけどな。
そう思って、普段お世話になっている人が働いているのに暢気にお祭り見物をしているのも気が退けるからと粘ったら、じゃあ花弁売りの仕事なら移動しながら出来るから、合間に水路などを眺めながら売るといい、と苦笑しながら言って、花籠を手渡してくれた。
そりゃあお祭りを楽しみたいと思う気持ちもあったけど、それよりもその人には本当にお世話になっているから、その恩を少しでも返したかったのだ。
花弁売りも泡売りも単価が安く、ほとんど儲かることはない。それでも、塵も積もれば、だ。

街の通りには私の他にも花弁売りの娘さんはたくさんいて、皆目立つように声を上げている。
私も負けないように声を出した。

「泡花流しの花びらどうぞー！」

正直何の捻りも無い呼びかけだけど、花弁売りは声を出さなくても売れるんじゃないかと思えるほどに盛況で、何か特別なことをする必要も、他の娘さんたちと競う必要も無いみたいだった。
だから割とのんびりと売り子が出来る。
私は花弁を売る合間に、澄んだ水路にまるで綿飴のようなふわふわの白い泡と、ピンクや黄色、赤や紫の花弁が散る美しさに目を奪

われていた。

驚いた。本当に、なんて綺麗なんだろう。

水路の水はゆっくりと流れ、浮かぶ泡と花弁はゆらりゆらりと揺れながらゆったりと流れていく。流れる水はもちろんだけれど、真っ白な泡も角度によって日の光を弾いて宝石みたいに煌いていた。大小の花弁はまるで万華鏡のように鮮やかな模様を描いては離れを繰り返している。

本当にこれは見ないと損をしていたところだ。

お世話になっている人に後できちんとお礼を言わなければ、と思いながら、少しだけその幻想的な雰囲気に見入った。

小休憩を挟みながら売り子を続け、花籠の中の花弁もあと少しとなった頃、小波（さざなみ）が押し寄せるように周囲が騒がしくなって、私は花籠に落としていた視線を上げた。

風に吹かれて小さな泡と花弁が舞う中、ざわめきの中心と思われる場所に目を向ける。

思わず口をぽかんと開けて惚けてしまった。

大通りを白い集団が横切っていく。

その中心には、薄水色のロングドレスに身を包み、頭には花冠とベールを乗せた美しい女の人がいた。

大通りをパレード用の馬車に乗ってゆっくりと進んでいく。

横に立つ他とは違う騎士服を身に付けた男性に支えられながら、街の人たちに手を振るその人はきっと水神の神子様だ。

華やかな微笑みを浮かべた神子様は可憐で、神子というよりも妖精や女神と言った方が正しいんじゃないかと思った。

宙に舞う小さな泡と花びらも、その艶(あで)やかな立ち姿に彩りを添えている。
水神の神子は、もっと控えめで静々としたイメージを何故か抱いていた私は少なからず驚いたけれど、これはこれで綺麗だからいいのかもしれない。

華麗なパレードは緩やかに小神殿へ向かって行く。
前には馬車を守るように騎士がいて、先頭には徒歩の、次いで馬に騎乗した騎士、馬車と続く。後方にも動揺に白い騎士服を着た青年たちが続いていた。
心なしか、街の女性たちは神子様よりも、その周りを固める騎士たちに目を奪われている気がする。
でもそれは仕方ないと思う。だって、皆すごく男らしく格好いいのだ。
白地に水色や青の刺繍が施された、かっちりとした騎士服には銀と金のエンブレムが輝いている。ともすれば下品にも成りかねないはずの金色だけど、実に上品に青い刺繍と共に襟元や袖口をも彩っていた。
腰に佩いた剣は騎士服と同じような配色で、鞘には小さな宝石が飾られている。
背には真っ白なマントを流し、視線を真っ直ぐ前へ向けている精悍な様は、誰もが憧れる騎士像そのままに見えた。
大きくはないこの街では、騎士にお目にかかるなんて滅多にないことだろうし、決して手の届かない存在だけれど、憧憬を向けるには最高の対象なんだろう。
うん、すごく、眼福。

しばらく陶然と華やかな神子様と凛々しい騎士たちを眺めていた私だけど、近くから花弁をくださいという声が聞こえ、我に返った。
街の人はほぼ全員がパレードに見惚れていると思っていたけれど、

改めて見渡すとそうでない人も結構いる。
どこか冷めた様にパレード見つめる人もいるのは何故だろうと思ったけれど、泡花流しの美しさの方が身近だと感じる人も多いのかもしれないと思って、緩んだ顔を引き締めた。
あと少しだけど、仕事をしなくちゃ。
私はまた声を上げた。

「どうぞー！　泡花流しの花弁、こちらにありまーす！」

ユーモアの欠片もない文句で売り子を続け、最後の花籠の中の花弁もあと一握り、と思ったときだった。
ぞくりと何かが背筋を這って、私は思わず振り返った。
殺気？とか本気で思うほどに、背中がピリピリした。
まあ、殺したいと思われるほど人との接触なんてほとんどしていなかったから、有り得ないな、と思い直す。
でも凄く強い視線を感じるのは確かだ。そこまで人の気配に敏感なわけじゃない私が感じるほどに、鋭い視線。
小さな恐怖を抱きつつも視線を彷徨わせて、その正体はすぐに判明した。

――心臓が止まるかと思った。

パレードの後方、神子様が乗る馬車の後ろに、その人は居た。

パレードに合わせ豪奢な装飾を付けられた真っ白な馬に乗る、白い騎士服に身を包んだ人。

日を弾く白金の髪。健康的に焼けた褐色の肌。何よりも、目が合って大きく見開かれた月色の瞳が印象的だった。
直ぐに見極めるように細められた月色の瞳に、碧の虹彩が燃えている。
虹彩まで見える距離でもないのに、何故かそれが分かった。

――なんでそんなところに。

貴方はもっと前に居るべき人なのに。

どうしてそう思ったのかはわからないけど、突然心に降って湧いた言葉だった。
たぶん、その人が、他の騎士よりも随分と立派に見えたからだ。
少なくとも、その他大勢の騎士に紛れるような人じゃない。
騎士服は他の人と変わりはないし、年齢だって同じくらいだと思う。だけど、雰囲気が全然違った。
背筋を伸ばし馬に跨るその人が纏う空気は固く、一切の甘さを削ぎ落とし他人を寄せ付けない排他的な居住まいだった。自らを厳格に律し、己を磨き上げてきたと想像できるような厳然とした姿。
端整な顔は艶っぽく見えるのに、引き締められた薄い唇やきりりと上がった眉が全体の雰囲気を禁欲的なものに押さえていて、その両極性が、彼の魅力を更に引き出しているようだった。

神子様の馬車が大通りの奥へと流れ、その後方に続き、白毛の馬に乗って泰然と歩むその人。
彼は暗く燃える瞳でじっとこちらを見据えたまま近くの騎士へ何かを告げ、ゆっくりとパレードから離脱していく。
視線は逸れない。
それを見つめ返しながら私は、妙な焦りが胸に込み上げてきていた。

全然、知らない人だ。

それは確かなのに、彼が私に向かってきているのもまた確かだった。

強い視線は少しも力を失わないまま、白馬を操る彼が人混みを掻き分け、こちらに向かってくる。

喧騒は遠く、私と彼以外が色を失ったように感じる。

足は地面に縫い付けられ、瞳は彼に引き寄せられている。

徐々に近づく彼を見つめながら立ち尽くしていた私は、動き続けていた街の人と軽く肩が触れ。

――弾かれたように走り出した。

◆異世界で人違い？　中編

正直なところ、私も何故あのときその場から逃げ出したのかはわからない。
ただ、捕まったら終わりだ！　と心の中で誰かが叫んだ声に従ったのだ。
たぶん、何も悪いことをしていないのに、お巡りさんに声を掛けられるとどこか居心地が悪くて逃げ出したいような気持ちになるのと一緒だ。たぶん。

でも。

出来心のようなもので逃げただけだというのに、鬼気迫る勢いで馬を駆って追い駆けて来られたら、誰だって死に物狂いで逃げると思う。

途中、白い馬が脇の路地から飛び出して来て目の前で嘶きながら前足を振り上げたときは、本当に死ぬかと思った。
まあ、死ぬかと思いつつ慌てて方向転換したんだけれど。
運動音痴というか、わけあって小さな頃から運動が出来なかった私にしては、素早い反応だったと褒めてほしいくらいだ。
でも直後、馬から飛び降りた彼が今度は自らの長い足を使って迫って来て、すごく後悔した。
あの場で蹲っていた方がよかったんじゃないか、と思うくらい、青年が発した静止の声は厳しかった。

結局、常に厳しい鍛錬を積んでいるような騎士の脚力と体力に運動不足の私が敵うはずもなく、路地に逃げ込んだところであっさりと捕まってしまったのだ。

建物の陰になった薄暗い路地で覆い被さられるように壁に追い詰められ、両手を顔の脇で拘束されている私は、息を呑んで間近に迫る青年の顔を凝視しているところだった。

厳しい表情の青年は、遠目でも分かったとおり凄く端整な顔立ちをしていた。

暗く燃える月色の瞳を湛える目元は切れ長で鋭く、縁取る白金の睫毛は長い。筋の通った高い鼻梁は細くもなく太くもなく、胸に響く心地の良い声を発した唇は薄い。

髪の毛は肩を少し超えるくらいまでの長さがあるけれど、顔がとても精悍で、背も１９０ｃｍ近くあるんじゃないかというくらい高く、しっかりと筋肉がついている肩幅は広くて、決して女性的には見えなかった。

私は未だに、自分が置かれている状況が理解できない。

掴まれた手首が熱い。

間近で私の顔を覗き込む青年は、二度目の台詞を口にした。

「何故、逃げるのですか」

だからね、それは逆に私が聞きたいところだ。

どうして、そんな強い目で追いかけてくるのかと。

逃げた理由は、その視線があまりに高い熱を孕んでいたからだ。
でも、捕まっているのは私なのに、彼の方が追い詰められたような声を出すのはどうしてなんだろう。
わからなくて、でも捕まってしまっている以上、何も言わないわけにもいかなくて、困惑しつつも観念して答えた。
「――い、いえ、た、他意が、あった、わけ……じゃ……っ！」
息も絶え絶えだ。
自分でも吃驚した。冷静な思考の裏で、私の身体は街中を走り回って疲れ切っていた。
だって、仕方ないよね？　ほぼずっと全力疾走だったんだもん。
むしろ目の前の青年が息も切らさず汗一つかいていない方が驚異的なことだ。
え、どこの怪物ですか？　とか聞いたら、本気で殺されてしまうだろうか。視界に映る、腰に佩いたその美しい剣で。
と、そんなことを考えている場合じゃなく。
「わ、私、何も、悪いことは、し、してません……！」
「……」
必死で言い訳したのに、無言で返すとは何事か。
黙りたいのは呼吸困難状態の私の方ですけど！　と内心叫びながら、青年の様子を伺う。
てっきり猜疑の視線を向けられているのだと思ったのに、彼の瞳に宿るのは戸惑い、だった。
鋭かった碧の虹彩が、ほんの少し揺らいだ気がした。

「……貴女が悪事を働くなどと思っていません」

随分ときっぱり言われて、驚く。

いやでも、じゃあどうして追い駆けて来たんだろう。

体力の限界まで走らされた私はもはや疲労困憊で、彼に腕を掴まれていなければ崩れ落ちているかもしれないというのに。

「何故、こんな場所に？　何故城に戻らなかったのです？　何故私に何の断りもなく――」

「ま、待って！」

私は慌てて彼の言葉を遮った。

何故、何故、って、こちらの台詞だ。

何故彼はそんなことを私に聞くんだろう？

まるで私のことを以前から知る人だと言うみたいに……。

そこではたと気づいた。

――この人は、人違いをしているんだ。

私と彼は初対面のはずだ。

私は誓って騎士であるような人と接点など無かったし、城なんてものは以ての外だ。

明らかに一般人の私と、城や騎士と関わりのあるような人をどうして間違えたのかはわからないけれど、世界には三人は同じ顔をした人がいるというし。

そうと分かれば話は早い。

彼の言葉からすると、私と似ている人は行方がわからないのだろうし、彼の剣幕から考えると彼にとってとても大切な人のようだから、人違いだとは凄く言いづらいんだけど、その人の振りをすることなんてできないから仕方がない。

私は目を瞑り大きく呼吸して息を整えてから、一度も逸らされない彼の綺麗な月色の瞳を見返した。

「あの。――人違いだと思います。私は貴方を知りません」

そう口にした瞬間、時が止まったかと思った。

彼は息を呑み、瞠目したまま、私を見つめている。

……凄く、居心地が悪い。

でも、どんなに彼が傷ついても、これは覆せない事実なんだ。

――そう思ったのに、驚愕を露わに瞠目していた彼の瞳が、見る見るうちに苦痛に歪んでいく様を見るのは、思った以上に私の心も抉った。

何も悪いことはしていないと言った、その言葉は嘘じゃないのに、何か途轍もなく重い罪を犯したような気分だった。

彼のことをどこか軽く捉えていた思考が、急速に熱を失っていく。

遠くで聞こえる祭りの喧騒は、もう耳に届かない。

「何故、そのような――」

彼は掠れた声を搾り出すように言った。

力を漲らせていたはずの月色の瞳が頼りなく揺らぎ、暗く痛みに歪んでいる。

「あ、あの、ご、ごめんなさ――」

どうしていいかわからず、間が持たなくてとにかく謝ろうとしたら、私の手首を掴む彼の手に痛いほどの力が加わって、思わず言葉を飲み込んだ。

「――笑えない冗談など要らない！」

決して大きな声ではないのに、そこに込められた重く暗い感情に、口が利けなくなる。

瞳に全てを飲み込むような熱が再燃していた。

「私がどれほど貴女を探したか……！　――貴女が側に居ないと気づいたときは、視界が闇に染まったかと思った。世界が歪み、身体の均衡を失うほどの恐ろしさを貴女は経験したことがあるか？それでも自分を叱咤し、縋る思いで国中を探しても貴女は見つからなかった。寝食の間も惜しんで、国外にまで探索の手を伸ばしてもだ。……もう、貴女はこの世に居ないのかもしれないとさえ――」

――ああ、月が溶ける。

違う。

彼の月色の瞳に、涙が浮かんでいるんだ。

辛うじて流れることのないそれは頼りなく震え、滲む瞳には強い憤りが映っている。

男の人の涙なんて、初めて見た。

本当にどうしたらいいかわからない。

きっと、今の私の顔はすごく情けないことになっていると思う。

初めて向けられる男の人の激情に、ひたすら戸惑っていた。

「……ごめんなさい」

何を言えばいいのか。

ただ、私の持つ言葉は一つしかなかった。

「貴方をからかっているとか、冗談を言っているわけではなくて、本当に私は――」

その先の言葉を紡いでいいのか、躊躇う。

苦痛、怒り、憤り、渇望。そして全てを飲み込む正体不明の熱。

それらが浮かぶ月色の瞳を見ていられなくて、視線を落とした。視線の先には引き結ばれた形のいい唇と、固く食い縛られているとわかる筋の浮いた顎が見えた。

なんでこんなことに。

やっぱり、捕まってはいけなかったんだ。

心のどこかで、そんな風に思う自分がいた。

続く言葉を言えないまま俯く私の手首が、不意に解放された。

あ、やっと誤解が解けたんだろうか、とホッとした。でも、目の前の青年がどんな表情をしているのか確かめる勇気が無くて、視線を上げられない。

どうすべきかと地面を見つめていたら、目の前の白いブーツがすっと一歩こちらに踏み出された。

「……シュイ様」

「――えっ？」

抵抗する間もなく、気がつくと私は青年の腕の中にいた。

長身な彼の腕の中にすっぽりと納まった私の背に、縋るように彼の太い腕が巻き付いている。彼は私の肩口に顔を埋めるようにして抱きついていた。

あ、汗かいているのに……！

恥ずかしさと恐ろしさに藻掻いても全然びくともしない。
心の中で悲鳴を上げたけれど、でも気になることが――。

「シュイ」

それ！
彼の呟きが耳元でもう一度聞こえて、何で、と思う。
シュイ。
それは、私の“こちら”での名前だ。
最初の呟きには“様”まで付いてなかった？って思ったけれど、
そんなことよりどうして彼がその名前を知っているのか……。

いや、偶々！　偶々かもしれないし！

そう思って一度抵抗を止め、恐る恐る、私に覆い被さるように抱きついている彼に問いかけてみる。

「……えーと。どうして名前――」

――ぎゃあ！

声を発した途端、巻き付く腕の力が強まった。
さらに、私の肩口に額を擦り付けるようにしていた彼の頭が少しだけ動き、首筋に柔らかい感触が押し付けられるのがわかって、思わず心の中で悲鳴を上げた。
明らかに唇だとわかる、少しかさついて冷んやりとした柔らかい感触。
しばらく押し付けられていたそれは、小さな吐息と共に一度離さ

れ、――甘噛みに変わった。

◆異世界で人違い？　後編

「……っ！　ちょ、や、やめ……！」

浮いた汗すら味わうように舌が首筋を滑り、次いで硬い歯が痛みの走らない程度に肌を食む。

短く吐き出される吐息と水音に目の前が白く弾ける。

散々走り回った所為で上がっているはずの、私の体温以上に、熱い舌。吐息。触れた瞬間冷やりと感じたはずの唇すら、いつの間にか火傷しそうなほど熱を持っていた。

切れ長の目も眉も、引き締められた唇だってどこかストイックな雰囲気を漂わせていたっていうのに、全部フェイクだったの？

それともこれは悪い冗談？

笑えない冗談は要らないって言ったのはそっちなのに！

首元で何度も繰り返される動きは少しずつ上へと移り、いつの間にか耳の下まで到達していた。

私の背中を包み込む腕は簡単に半周して、まるで存在を確かめるみたいにゆっくりと腰を撫で、時折ぎゅうと力が込められる。触れている部分が発火しそうに熱い。

これはきっと摩擦の所為。ぞわりと背筋を駆け抜けたものが何であるのかは、知りたくなかった。

慌てて抵抗を再開してみても、両腕ごと抱き込まれているから全

然効果がなくて焦りが増す。
目が合ったときから、どこか冷静さに欠けていた彼だけど、月色の瞳の奥にはちゃんと理性の光があった。己を律する術を知っている人の覇気もあったはず。
なのに今は何か、箍が外れたような危うさがあって、押し流されそうで怖い。
それでも熱い吐息が耳朶(じだ)に触れたとき、思わず叫んでいた。
「い、嫌だっ！　本当に私は貴方なんて知らないのにっ！！」
叫ぶと同時に、首筋に唇をつけたまま彼の動きがぴたりと止まった。
ああまた傷つけちゃったかも、なんて後ろめたさが胸に浮かんだ私は大概お人好し過ぎる。
この人があまりに苦しそうで、力も感情も激しくぶつけてくるくせに今にも崩れてしまいそうな危うさを晒すから悪いんだ。
それでも、やっぱり見知らぬ人にこんなことをされるのは嫌だ。どんなに相手が端整な顔立ちをした男性でも、恐怖しか感じない。
身体が震えるのだって、嫌悪からに違いない。
きっと、絶対、そうだ。
必要以上に自分に言い聞かせながら、藻掻き続ける。
――私は絶対に彼の求める人じゃない。
だって、私は3ヶ月ほど前に“この世界”に“落ちた”ばかりなんだから。
そう、ここは私が22年間生きてきた世界じゃない。

何かの物語のように、ある日突然、私はこの世界に落ちた。それからまだ、3ヶ月しか経っていない。
そして、その3ヶ月の間に彼と知り合う時間なんて、1秒だってなかったと断言できるんだ。

それなのにどうしてこの人は私のこちらでの名前を？

私の本名は藤堂守維（とうどうすい）という。
スイという音はこの世界では発音し難いらしくて、この街で知り合った人は皆、私のことを“シュイ”と呼ぶ。
彼も私に“シュイ”と呼びかけた。
彼が人違いだとも気づかず、取り乱すほどに私と似ている探し人の名前が“シュイ”であるなら、こんな偶然があるだろうかと疑問に思うのも事実だ。

だけど、何度考えたって、私が彼と知り合う時間なんてなかったのだ。
こちらへ来た直後、幸運なことに親切な人に拾われて、今はその人の家で居候までさせてもらっている。
住む所は直ぐに何とかなったけど、それでも見知らぬ土地で慣れなければいけないこと、覚えなければいけないことも山ほどあって、今日までの3ヶ月はあっという間だった。
こんな、飲み込まれそうなほどの激情をぶつけられるくらい、彼と深い関わりを持つ余裕なんて、少しも無かったんだ。

もう、混乱の極地で泣きそうだ。
やっとこの世界に慣れ始めたばかりという段階で、色々我慢していたものが刺激された所為もあるのかもしれない。
たとえ言葉が通じても、周りはどう見ても日本人ではなくて、景

色だって現代日本とは掛け離れている。生活様式だってそうだ。
一人ぼっちで心細く、帰る術なんて全然わからない。
それでも拾ってくれた人がとても親切で、一先ず頑張っていこうと思えた矢先に、こんなわけの分からない人が現れるなんて。

目を背けていた不安が急激に膨れ上がって視界が滲む。
でもここで泣いたらこれ以上もう頑張れないような気がして必死に涙を堪えていると、震える私に気づいたのか、一度惜しむように強まった抱擁が、ゆっくりと解けていった。耳元で鳴ったリップ音がやけに響いて聞こえた。

「――申し訳ありません」

慇懃な言葉。だけど妙に色っぽい掠れた声。
鎮め切れない熱と、拭いきれない痛みを含んだ熱い吐息が肌を焼いた。

この人は本当にずるい。そんな切ない声を出すなんて。
恐ろしい思いをしたのは私なのに、実際に傷ついたのは彼のような気がして、責められなくなる。
ああ、やっぱり私はお人好しだ！

だけど、ちゃんと冷静さを取り戻した声で、少し安堵した。色々な感情を理性で無理矢理に捻じ伏せたような苦しげなものだったとはいえ。

背中から離れた手はゆっくりと私の頬を撫で、涙の浮かぶ目尻を撫でてから、輪郭をなぞるように肩に落ちていった。
肩に置かれた大きな手はそのまま、まるで逃がさないとでも言うように離れる気配がないけれど、我慢する。

本当は今のうちにもっと抵抗して、何が何でも振り払って逃げなければいけないのかもしれない。
だけど、この人の声や瞳、手の平からでさえ慟哭が聞こえてくるようで、それが出来ずに俯いたまま棒立ちになっていた。決して、街中を追い掛け回されて体力が限界だったわけじゃない。
空気が動く度に首筋がすうすうする。
恐怖よりも不安よりも、急激に恥ずかしさが湧いてきた。
絶えられなくて、私は腕だけ動かして風を遮るようにそこに手を当てた。顔が熱い。

頭の上から月色の視線が降ってきているのを感じる。
彼は暫く黙っていたけど、やがて小さく吐息を落とし、静かに口を開いた。

「貴女が私を知らないというのには、何か理由が……？」

まだ信じてくれていなかったらしい。私だって彼が頑なに私を探し人だと言うのを信じていないのだから、お互い様なのかもしれないけれど。
私は急いで首を横に振って答えた。

「理由なんて無いし、嘘を吐いているわけじゃありません。ただ、本当に知らないんです。貴方はきっと人違いをしてる」

やっと求めていた人が見つかったと思った彼を傷つける言葉を何度も言うのは心が痛い。でもこれだけは、きっぱりと言っておかないといけないことだと思った。
ごめんなさい、と呟くと、また少し沈黙が降りた。
重い空気をどうしたらいいのか。打破する術が全く無い。
緊張したまま黙っていたら、彼が細く嘆息するのが聞こえた。

「……わかりました。貴女の言葉を受け止めます。他でもない、貴女の言葉だから。……貴女は私を知らない」

最後の言葉を紡いだ声はひどく硬質で、本当は認めたくないのだという思いを痛切に感じた。

事実なのに、顔が上げられない。

「貴女は、私を知らない……」

彼はもう一度そう小さく繰り返してから、何かを振り切るように言った。

「ですが、私は貴女を知っている」

強い口調。

平行線だ。

私は彼を知らなくて、彼は私を知っている。

その言葉だけ抜き取れば一方的に彼が私を知っているのだろうと言う事も出来るけど、彼は前に私が城に“戻らなかった”とか、“断りもなく”と言っていた。その言葉は、彼の求める人がちゃんと彼と対面し言葉を交わしていたことを意味している。

だとすれば、やっぱり人違いと言うしかなかった。

ああ本当、どうしたら……。

途方に暮れかけたとき、彼が静かに、縋るように言った。

「シュイ。スイ、――いえ、守維。……そう呼べば、少しは貴女も私の言葉を信じてくれるだろうか」

私は弾かれたようにうな垂れた頭を上げた。

今、“守維”って、言ったよね？

完璧な発音で放たれた自分の名前に、驚愕する。

この世界へ落ちてから、自分の名前を呼ばれてもずっと違和感があった。

“シュイ”という音は日本を遠く感じさせて、呼ばれる度に小さな悲しみが胸に積もっていたのに。

今、彼の口から落ちた名前は確かに、私の名前だった。

瞠目した私の視線を捉えた月色の瞳は、私の動揺を見てどこか安堵したように柔らかく細められた。

瞳の中の苦痛も渇望も消えたわけじゃない。でも怒りや憤りが形を潜めて、代わりに増した熱の正体が何であるのか、私にはわからない。

彼は呆然とする私を見つめ、微笑した。

「ずっと探していました。脅威を退けた後、貴女の姿を見失った瞬間から」

脅威を退けた……？

言っていることは理解できない。記憶にだって欠片もない。

だけど、告げていないはずの私の本当の名前を彼が口にしたのだけは、疑いようがなくて。――混乱する。

ただ月色の瞳を見返すしかない私に、彼はもう一度ふっと笑って見せた。

黙って首筋を押さえていた私の手をそっと引き剥がし、代わりに

自身の背に流れる白いマントの端を引き寄せて、私の首筋に当てた。
自らが残したものを静かに拭っていく。
あのときの熱など無かったように、優しい仕種だった。
羞恥を思い出して首まで赤くなっている私に、そこへ視線を向ける彼は当然気づいているだろうに、何も言わない。……何か言われても困るけど。
一通り拭い終わると、彼はマントを払って、ゆっくりと目の前に跪いた。
私の両手を取り、下から顔を覗き込むようにして言う。

「貴女が、私のことを――。……この世界で成したことについての記憶を、失くしてしまったのか、あるいは今の貴女が元々それらを持たない貴女であるのか。それはわかりませんが……。貴女が私の知る“守維”であることは変わりません。私は貴女を間違えない」

間違えない、なんて。
無理だと思うのに、パレードの喧騒の中でぶれることなく真っ直ぐに私を見つめていた瞳が瞼裏に過ぎって、嘘だと断じれない私がいる。
何も言えず立ち尽くし、ただ月色の瞳に視線を合わせる私を見上げながら、彼は静かに続ける。

「どちらにしろ、私はもう二度と貴女を失えない」

激情に揺れていた月色の瞳は今、強く固い決意に満ちていた。
怒りや憤りの浮かんだ、荒れ狂うまでの熱を孕んでいたときよりも、今の瞳の方にずっと飲み込まれそうだと思うのは何故だろう。
風が何処からか小さな花弁を運んで来て、彼の白金の髪を柔らかく撫でていく。

「貴女がどう思おうと、どんなに抗おうと、貴女には私を受け入れてもらう」

なんだか、物騒なことを言われた気がする。

宣言染みたそれを騎士である彼が言うのは、洒落にならないんじゃないかと思う。

きっと彼は、放った言葉を裏切らないだろうから。

鎮まったと思った狂気にも似た熱が、月色の瞳に浮かぶ碧の虹彩で再びちらちらと燃え始めていた。

それに気づいた私が肩を震わせたのを感じ取り、彼はすっと射るように目を細めた。両手を掴む力が強まる。

「――どこまで逃げようと、貴女の行き着く先は私だ」

どうぞ御覚悟を。

そう続けた彼は控えめに微笑する。

その表情には見覚えが……。

そう思った私は、やはり彼を知っているんだろうか。

彼よりもずっと往生際悪く半信半疑な私は、彼の激情を受け止める勇気などそう簡単に湧くはずもなく、既に逃げ出す算段で頭がいっぱいだった。

追いかけられたら、逃げたくなる。

――とりあえず、彼の大きな手で固く握られたままの自分の手を、どうやって取り戻すべきだろうか――。

了。

◆異世界で人違い？　後編（後書き）

結局、青年の名前は出てこず……。

長編の断片なので色々謎な部分も残ったと思いますが、これはこれで終わりでいいような気もするから書けて満足！

結構一気に書き上げたので、文章おかしかったらすみません。

◇糧召喚？　前編　（召喚）（前書き）

【キーワード】

異世界・トリップ・召喚・女主人公・魔族・食糧

召喚と言いつつ、召喚描写が出てきませんｏｒｚ

でも一応、召喚です。

◇糧召喚？　前編　（召喚）

「ナユ、歌え」
（……）
「ナユ」
（嫌）
「ナユ」
（だから今それどころじゃな――）
「歌え」

反論を遮られ、那由は口をへの字にひん曲げた。

那由は今、本を読んでいたのだ。
しかもその物語はちょうど山場を迎えていて、ささやかな興奮とともに流れに乗って一気に読み切ってしまおうと思っていた。特別に読書が好きなわけではないが、身体に巻き付く鬱陶しい腕と背後の気配を忘れるくらいには集中していた。
テレビもパソコンも存在しない場所では本が数少ない貴重な娯楽だという所為もあるが、著者の構成が上手いのが一番の理由だろう。那由は珍しく物語の世界に魅せられ、ほとんど入り込んでしまっていた。
だというのにそこから引きずり出され一番いいところを邪魔されて、那由の機嫌はすこぶる悪くなった。
那由が本に夢中になっていることは、背後にぴたりとくっついている男――ローディハイには一目瞭然だろうに、いきなり歌えだな

んて随分と勝手な物言いだ。
こちらの都合などお構いなしで、一方的に要求を押し付けるなんて。
そうは思ったが、那由はむっつりと押し黙り、渋々手にしていた本を閉じた。
無言と反論での拒否が通用しない場合、それ以上抵抗しても那由の思い通りには決してならないことを経験上思い知っている。
自分のしたいことを、したいときに、したいようにする。それがローディハイという男だ。
だから不遜な物言いも仕方なく受け入れ、立ち上がろうとしたのに。
身体を囲う腕が解かれない。
那由はさらにむっとした。

ローディハイは「歌え」と言った。その要求に応えるには、彼と物理的にある程度の距離を取る必要がある。
歌自体は場所が何処であろうと歌えるし、質を重視しないのであればどんな体勢でもそれが歌であることに変わりはない。
しかしそれは此処が那由の生まれ育った元来の世界であり、聴衆がローディハイのような特殊な人物でなければ、の話だ。加えて那由の歌に、那由自身には何の利益もない特殊な力が備わっていなければ、の話。
此処は那由が生まれ育った日本でもなければ、地球でもない。ローディハイは“人”ではなく、那由の歌には此処でしか通用しない不思議な力がある。
つまり。
此処で歌うのならば、やはり那由はローディハイから離れなければならない、ということだ。
そのことをローディハイとてきちんと理解しているだろうに、那由を抱えたまま離さないでいるというのはどういうことだ、と那由

は憤慨した。

（離してよ）

「断る」

先ほどの仕返しか、今度は那由が拒否される。だがこればかりは『はいそうですか』と受け入れるわけにはいかなかった。

那由は僅かに逡巡した後、徐に腹の上にある逞しい腕に手を這わせた。

白いシャツの袖は捲くられていて、拘束具よろしく胴に巻き付く褐色の腕は剥き出しだ。触れると思いの外、滑らかな感触が伝わる。

だがもちろん、ただ撫でるために手を添えたわけでは無い。

那由は日ごろの鬱憤の腹癒せも兼ねて、褐色の肌に思い切り爪を立ててやった。それはもう遠慮なく、ギリギリと。

皮膚を傷つける一歩手前まで力を込めれば、強靭に見える腕にも流石に痛みは走ったようで、ローディハイは小さく眉を顰めて那由の凶暴な指を引き剥がそうとした。

しかし那由は拘束が一瞬緩んだ隙を逃さず、伸びてきた大きな手をするりとかわす。

脱出成功、とばかりに那由は勢い良く立ち上がり、手にしたままだった本をテーブルの上の水の入ったコップと持ち替え、ローディハイの元を離れた。

素早い一連の動きに、那由は我ながら慣れたものだと思った。

「歌えと言ったのはロードでしょ」

十分に距離を取ってから振り向き、不機嫌さを存分に込めて言い放つ。

それが本日初めて実際に声に出した言葉だったことに、那由は気づいた。

これも、那由の歌――というよりも、声自体に備わる歓迎できない能力の所為だ。そして、そんな要らない能力の存在を知らしめてくれたのは、目の前で愉快げに笑う男、ローディハイである。

「歌えとは言ったが、離れろとは言っていない」

逞しい腕に爪の痕をくっきりはっきりと残されたローディハイは、けれど那由とは対照的に不機嫌さは無く、むしろ上機嫌な様子で言い返す。

薄い唇の端はくっと上がり、漆黒の前髪から覗く黄金の瞳は楽しげに細められて那由を眺めている。

腕を組んでソファにふんぞり返る様は実にふてぶてしく、那由の機嫌を取ろうという気は全く無さそうだった。

本当に身勝手な男だ。いつかギャフンと言わせてやりたい。そして泣いてひれ伏すがいいのだ。などと三流悪役のようなことを思う。しかし、目の前の誰にでも偉そうな態度を取る男がそんなこと、天地がひっくり返ってもしないだろうし、那由のご機嫌取りなどという殊勝なことをするはずも無いということも、那由は十分理解している。

だから、豪快に傾いた機嫌も彼女は一人で立て直すしかないのだ。それについては多少諦観し始めてはいるもののやはり憤りは募るもので、那由は片眉を跳ね上げローディハイを睨み付けた。

「離れなきゃ危ないでしょ！」

「別に俺は構わないが？」

むしろ大歓迎だな、とニヤつくローディハイの金の瞳に欲望の赤が揺らめいたのを見止めて、那由の機嫌は立て直す前に更に下降した。

そりゃあロードは構わないでしょうよ！　と、那由は心の内で叫

ぶ。声には出さずとも、目の前の男には全て筒抜けなのだが、それを分かった上での心の叫びだ。
プライバシーも何もあったものではないローディハイのその能力は、彼が“人”では無いからこその力だ。
頭の中が丸見えであるのは、まだ華も恥らう乙女（自称）である那由は不快極まりなかったが、しかし一方で那由にとって身を守ることにも繋がっているので文句は言えない。

「私が構うんだってば！　ロードじゃなくて、私の身が危ないんだからっ」

那由は怒っているというのに、那由が叫べば叫ぶほど、ローディハイの機嫌は上向いていくようだ。形のいい唇の端、その角度が始めの頃よりも上がっている。
満足げなその表情に、那由はもう歌わずともいいんじゃないかと思ったが、思った直後に「歌え」と再び促される。
やっぱり歌わなきゃいけないのかと大きく嘆息したところへ、三度（みたび）の催促がかかる。

「ナユ、早くしろ。腹が減った」

何だその子供のような台詞は、と思う。まるで母親に御飯を強請る小学生のようじゃないか。いや小学生の方が断然可愛いのだけど。むしろローディハイは欠片も可愛くは無い。
そんなことを考えたら、思考が伝わったらしいローディハイの片眉がひょいと上がって、僅かに不機嫌さを見せたので、那由は慌てて考えるのを止めた。
ローディハイの機嫌がいいから、今の距離を保っていられるのだ。居丈高に見える彼も一応は那由のことを尊重してくれている。彼がヘソを曲げ、万が一にもこの僅かな気遣いを放棄されれば、忽ちに

那由は必死に守ってきたものを失うことになる。そんなことは御免だ。
だから那由は、多少の抵抗は見せたとしても、結局はローディハイの要求を受け入れることになる。
癪だが仕方ない。そう思いながら、ふと視線を壁に掛かる時計に向けると既に昼時を過ぎていることがわかった。本に夢中で、お昼御飯の時間にも気づかなかったらしい。
なるほど、と一つ頷いた那由は、姿勢を正した。
手にしていた水で喉を潤し、呼吸を整えてから、伏し目がちに口を開く。
唇から甘い音が零れだした。

「――――、――――――」

那由が歌い始めると同時に、那由の周りの空気が変化し始める。
ゆらり、と目に見えないはずのそれが、陽炎のように揺らいだ。
質量を持っているかのようなその揺らぎは、とろりとした濃密さの中に那由の澄んだ声を溶かして、甘さを含んでいく。
呼応するように、ローディハイの金の瞳に濃い赤がちらつき始めた。

ローディハイは胸の前で組んでいた腕を静かに解き、ソファの背凭れに両腕をゆっくりと広げるようにして預ける。
瞳に浮かんだ赤が滲み出し、黄金だったそれは橙色へと変化した。
ローディハイは妖しく光る瞳を眇め、射るように那由を見つめる。
ぐっと弧を描く薄い唇の奥から今にも真っ赤な舌を覗かせ舌舐めずりでもしそうなほど獰猛な表情を浮かべて、ローディハイは喉を鳴らした。まるで極上の美酒でも飲み下すように。
空気の甘さが増すほどに、ソファの背凭れに広げた腕に力が篭も

り、しなやかな筋肉が隆起する。
ローディハイは那由へと跳びかかりたい衝動を、ソファに爪を立てることで耐えていた。

一方で、那由はざわりと動いた空気に、慣れたとはいえ背筋が冷えるのを感じていた。まるで見たら石にされるとでもいうように、不穏な空気をだだ漏らすローディハイから頑なに目を逸らす。射殺されそうなほどの鋭さを含んだ絡みつくような視線を感じるが、気づかぬ振りで歌い続けた。
ここで歌うのをやめてしまえば、そちらの方が逆に危険なのだ。
中途半端な充足は時に飢餓感を増大する。

「――――、――――――」

紡がれ続ける甘い歌声に、ローディハイの黄金の瞳はいつしか完全なる真紅へと染まっていた。
滴る血のような、深く、鮮やかな赤だ。
部屋に充満する濃密な空気がローディハイの周りに凝縮されるようにして集中する。
ゆらりと漆黒の髪が揺れ、恍惚の表情を浮かべたローディハイの視線が、那由から逸れた。僅かに顎を反らして、宙に視線を彷徨わせる。蜜のような甘い香りがローディハイを包み込んでいく。
暫く彼の周りで揺れていたそれが、ゆるりと身体に吸い込まれ始める。同時にローディハイの身体には強烈な快感にも似た衝撃が走った。指の先まで熱がともり、酩酊感のような快さに頭が眩む。
ローディハイは熱っぽい吐息を僅かに零し、唇を舐めた。凄絶な色香を撒き散らしながら、浸るようにゆっくりと瞼を閉じる。
瞼裏には桜色の小さな唇を震わせて歌う那由の姿が浮かび、ローディハイはさらに甘い香りと極上の蜜に満たさていった。

那由が適当な選曲でいくつか歌い終えた頃、ようやっとローディハイから満足げな吐息が落とさた。力んでいた両腕からは力が抜け、僅かに反らされていた顎が引き戻される。そのまま今度は首をうな垂れるようにしてローディハイはゆっくりと俯いた。

「――――」

ローディハイの動きを眼の端で捉えながらも、念のため那由は歌い続ける。

もう十分かな、と頭の片隅で思ったとき、ローディハイがふっと小さく笑うような気配があった。それに反応して那由が視線を向ける。

ローディハイは前へ落ちてきた漆黒の髪を気だるげに両手でかき上げながら、同時に俯けていた顔を上げた。ふう、と大きく呼気が吐き出され、ゆっくりと瞼が開く。奥から現れた瞳は、既に元の美しい黄金色に戻っていた。いまや、赤が滲む気配はない。

それを確認して那由は歌うのをやめると、何処か緊張していた身体の力を抜いた。吐息を零し、ほっと胸を撫で下ろす。なんとか安全に仕事を終えられたようだ。

（……お腹一杯になった？）

那由が声に出さずに尋ねると、まだ僅かに余韻に浸っているようだった金の瞳が那由を捉えた。

那由を見、ローディハイは口端をきゅうと上げ、妖しげな笑みを浮かべる。

あ、嫌な予感。那由に走った直感は的中した。

「――ああ。……一晩中ヤり通したくらいにな」

ローディハイはのたまった。

（なっ――――――！）

「まあ、試したことが無いから実際がどうか知らんが。――なんなら試してみるか？　お前が相手になるなら楽しめそうだ」

（～～～～っ！！　――余計なこと言わないでよっ！　試さないし！　素直に満腹って言えばいいのよ、もうっ！）

瞬時に首筋まで赤くなって叫ぶ那由に、ローディハイはくっくと喉の奥で笑った。

◇糧召喚？　前編　（召喚）（後書き）

後編は那由の置かれた状況についての説明がほとんどになると思います。
興味のある方は流し読む程度に覗いてやってください。

◇糧召喚？　後編

――コンコンコン。

歌い終わったのを見計らったように扉が叩かれ、那由はそちらに視線を向けた。訪問者らしい。

ローディハイのセクハラ紛いの発言に対する怒りはいまだ鎮まらなかったが、那由はなんとか気を落ち着かせた。

何も関係がない第三者に、不機嫌な顔を見せるのは申し訳がない。それに、この程度のことで憤懣を溜め込んでいては、ローディハイの側になどいられないのだ。那由自身は別に側にいたいとは思わないのだが、今のところそうせざるを得ないので仕方がない。

「入れ」

那由が大きく息を吐くのを愉快げに眺めたまま、ローディハイは扉の外へ入室の許可を出した。

一拍置いて、ゆっくりと重厚な扉が開かれる。奥から現れたのは濃紺の髪に同色の瞳をした、柔和な雰囲気を纏ったまだ年若い執事であった。

「失礼致します。ナユ様のお食事をお持ちしました」

声までも柔らかな執事が頭を下げると、背で一纏めにされている艶髪がさらりと流れた。

清潔感あるオフホワイトのスーツに身を包み、気品溢れる所作で礼を取る様は良家の子息のように洗練されている。今は下げられているため見えないが、優しげに弧を描く眉や高すぎない鼻梁、男性にしては少し厚みのある唇、何より晴れ渡る夜空のような濃紺の瞳が美しく、世の女性の注目を一身に集めるだろう容貌をしているのだ。

しかし那由はこの年若く美しい執事が良家の子息などでは決してないことを知っていた。

初めて会った当初はこの執事――クウィデアには色々と騙された那由だが、今ではローディハイなどよりずっと頼りにしている。纏う雰囲気を裏切らず、ローディハイに仕えているとは信じ難いほど穏やかであり優しくもあるクウィデアが、那由はとても好きだった。

（あ、クーイ、ありがとう）

那由が礼を言うとクウィデアが頭を上げ、視線が合った那由に向かいふわりと微笑んだ。その穏やかな笑顔に和まされつつ、室内へと進むすらりとした姿を追っていると、いつもと違うことに気づいて那由は首を捻った。

（あれ？）

いつもであれば、クウィデアは室内に踏み込む前に扉の外の給仕カートを取りに行くのだが、今日はそれがないのだ。

クウィデアは数歩進むと、開いた扉の前を空けるようにして脇に控えた。

不思議に思った那由だが、その行動の理由は尋ねるまでもなく直ぐに判明した。

クウィデアが脇へ控えると同時に、扉の奥から金茶の髪をしたメイドが姿を現したのだ。クウィデアの代わりに給仕カートを押して

入室して来たそのメイドは、俯き加減で頬をほんのりと桜色に染めている。

（メイドさん？　――珍しいね、クーイがメイドさんを連れて来るなんて）

普段、那由がローディハイと共に過ごしているときの食事の給仕は、執事であるクウィデアが一人で行なっている。二人分の食事を世話するのであれば一人では手が足りないだろうが、食事を摂るのは那由だけなので問題はない。

ローディハイは食事を摂らない。と言うよりも、ローディハイの食事は那由の歌がそれに当たり、物を口にすることはほとんどないのだ。酒（アルコール）は別のようだが、腹が空けば那由に歌えと命じればそれで済む。

那由にしてみれば奇怪なことではあったが、ローディハイは人ではなく、俗に“魔族”と呼ばれるような存在であるから当然なのかもしれない。

基本的に、魔族であるローディハイの食事といえば、人や魔族、あらゆる生き物の精気である。生きる源、あるいは生命活動の際に発散されるエネルギーと言ってもいい。摂取の仕方は様々だが、魔族であるローディハイはそうしたものを糧として生活していた。

しかしあるとき、その精気が那由の歌――声から摂取できることがわかった。しかもそれは今まで調達してきた中でも味わったことの無い程に極上ときて、以来ローディハイは那由の歌でのみ飢えを満たしている。

那由の声や歌はローディハイだけでなく、魔族と呼ばれるものには全てに有効なものだったが、一方である種の麻薬のような効果もあり、ローディハイほど力のある魔族でなければ耐えられないこともわかった。

入室して来たメイドが頬を染めていたのは、扉越しに聞こえてきた那由の歌声に中(あ)てられたからだろう。
だが彼女がその程度で済んだということは、メイドにしては珍しく彼女もそれなりに力のある魔族なのかもしれない。どのくらいの時間聞いていたかはわからないが、扉越しとはいえ那由の歌を耳にしたのが普通のメイドであれば、頬を染める程度では済まなかっただろう。
そうした理由があるからこそ那由は普段、歌どころか声を出して会話することも禁じられているし、自分でも進んで声を出そうと思わないのだ。
ローディハイ以外にも、那由の歌声に耐え極上の美酒のように味わうことの出来る者は居るにはいたが、狭量なローディハイが許可をしないため、余程のことが無い限り那由はローディハイのためだけにしか歌わない。そしてローディハイの食事はほぼ那由の歌で賄われているのだ。

ともかく、ローディハイが“人”の食事を摂らないということは、今このときの昼食の給仕にもクウィデアだけで事は足りるということだ。メイドは必要ないはずなのである。
しかし、そうであるならクウィデアが連れて来たメイドは一体。
那由が首を傾げていると、クウィデアの返答よりも先に何故かソファの方から冷やりとした空気が流れてきた。まるで絨毯が氷に変わってしまったかのように足元が寒くなる。
那由が慌てて確認すれば、今の今まで機嫌良さそうにしていたローディハイが片眉を跳ね上げていた。
盛大に不愉快、と表現しているそれに自然、那由の眉間にも皺が寄る。感情の起伏が激しすぎてついていけない。

（……どうしたのよ、ロード）

那由が眉を顰めて尋ねると、ローディハイはそれを無視し、クウィデアを睨めつけて言った。

「メイドだと？　そんなものの入室は許可していない。――どういうことだ、クウィデア」

「ええ、只今連れて参りましたのは私の独断です。申し訳ありません。ですが、これはエンリケニアの指示でもありますので」

垂れ流す冷気と威圧感にクウィデアは緊張しながらも気丈に返す。話の中心となっているメイドなどは顔面蒼白でカタカタと震えていて那由は同情したが、今那由がメイドを庇うように動けばローディハイの機嫌は更に悪い方へ傾くだろうことが容易に想像できたので、静かに見守るしかなかった。

「エンリケニアめ、勝手なことを」

クウィデアの言葉に出てきた名前に、ローディハイは苦々しい顔になった。

エンリケニアはローディハイの家令で、執事であるクウィデアの上司に当たる。

彼は今、ローディハイの名代（みょうだい）で屋敷を空けているのだが、どうやら屋敷を出る前にクウィデアに何かの指示を出していたらしい。

エンリケニアはローディハイが唯一信頼している人物でもあり、随分と長い付き合いにもなるようで一方的に押さえつけることの出来ない貴重な人物でもある。

クウィデアがこの場でその名前を出したのも、そうすればローディハイが渋々ながらも話だけは聞くだろうと予想したからかもしれない。或いは、エンリケニアがそうしろと言ったのか。

とにかく、その名前が出たことで僅かながらローディハイの冷気が治まったのは事実だった。……不機嫌さは増したようではあった

が。

「このメイドをナユ様の側付きにするように、とのことです」

（えっ――！？）

「なんだと！」

クウィデアの言葉に、ローディハイが声を荒げる。途端、鎮まっていたはずの冷気がぶり返し、ぶわりと空気に黒く重い何かが溢れ出した。

那由は嬉しさの滲んだ声をあっという間に飲み込む。メイドに向けていた視線をローディハイに戻すと、ローディハイの表情は不機嫌どころか苛立ちに燃え、美しい黄金色だった瞳には興奮により赤い光がちらつき始めていた。

（ロード！）

那由は慌てて声を上げるも、ローディハイには再び無視された。人の主張はとことん聞かない男だ。那由はムッとしたが、賢明にも空気を読んで押し黙った。代わりにクウィデアが硬い声で口を開く。

「――ローディハイ様、お怒りは御尤もですが、どうぞお聞き届けを。ナユ様に女性の側付きはやはり必要です。魔族ばかりのこの域で人であるナユ様が暮らし続けるならば尚のこと。この者は、魔族ではありますが、人の域で暮らしておりました。幸いなことに、もしも那由さまのお声を耳にしてもなんとか耐え得るだけの力も備えております」

「……」

ローディハイは口を開かず、じっとクウィデアを睥睨している。威圧し、それで折れれば良し、とでも考えているのかもしれない。

現にクウィデアの首筋が薄っすらと汗ばんでいるようである。
しかしそれでも執事は、その柔らかい雰囲気とは裏腹に意思は固いようで、視線を落とし僅かに頭を垂れたまま微動だにしなかった。
重く圧し掛かる強大な力の気配と、衣服越しにも皮膚を突き刺すような冷気に、もはやメイドは立っていることがやっとで、それも給仕カートという支えが無ければ崩折れてしまいそうに震えている。
その姿があまりに可哀相で、何よりこの重苦しい空気の原因は本(もと)をただせば自身にあるので、那由は思い切って叫んだ。

「ロード！」
「……」
「……」

どこか陰惨だった空気に突如とろりとした甘さに似たものが加わって、そのアンバランスさにローディハイ含め全員が微妙な顔をした。
酒だと思って飲んだら激甘なジュースだった、というような気持ち悪そうな表情であったが、とりあえず注意を引けたのでいいだろう、と那由は今度はきちんと心の声で言葉を発する。

（ちょっとロード、落ち着いてよ。そんなに過敏にならなくても大丈夫だよ、たぶん）

那由は眉尻を下げて、橙に染まり掛けている瞳を見つめる。
ローディハイが、なにもただ気に入らないからという理由で那由にメイドを付けることに反対しているわけではないことを、那由は理解している。
那由がローディハイによってこの地に喚(よ)ばれて間もない頃、那由には専属のメイドが数人付けられたのだが、そのときに色々と思い出したくないようなことが起こったのだ。

ローディハイは優しい男などではないが、せっかく手に入れた面白い玩具であり極上の食糧でもある那由を傷つけられたことに、そのときは並みならぬ怒りを見せた。
再びメイドを付けるとなれば、また同じことが繰り返されるかもしれない。そう思うと、怒りが再燃するのだろう。

（自分の身の周りのことは自分で出来るし、そこまで困ったことがあるわけじゃないけど、でもやっぱり私も近くに女の子がいてくれたらと思うよ。ロードが私を元の世界に還してくれる、っていうなら話は別だけど。それに、エンリさんがオッケー出したんなら大丈夫なんじゃないの？）

主人の所有物に手を出されたことは、その所有物が“人”だったことで当初は勝手が分からなかった所為もあっただろうが、ローディハイの側近を務めるエンリケニアが同じ轍を踏むとも思えない。
ローディハイは那由の言葉を聞きながら、目を眇めてクウィデアを眺めている。
しかし怒りは多少治まったらしい。次に開いた口から聞こえた声の冷たさは、幾分和らいでいた。

「お前を還す気など皆無だな」
（……でしょうね）

ふんと鼻で嗤って言い切るとは、大概感じが悪い男だ。逆らえないのが口惜しい。

「クウィデア。そいつは人の域で暮らしていたと言ったな？」
「はい」
「ならば人に対する意識はどうだ。人を恨んでいるようなら逆効果だろう」

「確かに、魔族とは知らずとも異質さに周囲の人間からは倦厭されていたようですが――――」

本人を前にしての会話としては失礼極まりない内容が展開され始めたことに那由は嘆息しつつ、指先を真っ白にして給仕カートを掴んでいる金茶の髪のメイドに視線を向ける。

勝手にああでも無いこうでも無いと話している二人を放って、那由はメイドに声を掛けた。

（ね、顔を上げて。名前は何て？）

金茶のメイドは呼びかけに反応し、パッと視線を上げた。

潤んだ瞳はハッとするほど綺麗なエメラルド色だった。

胡桃（くるみ）のように円く大きなエメラルドの瞳が印象的なそのメイドは、結局無事、那由の専属メイドとなったが、この時怯えていた姿は何処へやら、その後ことあるごとにローディハイと火花を散らすこととなり、那由は頭痛の種を増やす結果となった。

了。

◇糧召喚？　後編（後書き）

書きたいことが山ほどあり、長くなってしまったのでぶった切りました orz
収拾つかなくなりそうなので、一応こちらはこれにて終了ということで……。
未だに有耶無耶な部分があるんですが―（召喚の経緯とか執事に騙されたエピソードとか）、そちらはいつか連載版に出来るような機会があれば、また。

◆異世界人の危険な特技？　前編　（召喚）（前書き）

【キーワード】

異世界・召喚（失敗）・騎士・危険（？）な特技・至って真面目な変人・隠された美形

◆異世界人の危険な特技？　前編　（召喚）

それは全くもって可哀相な話。

ある日、うちの変わり者魔術師長が、召喚魔法の実験に失敗した。ただ、同じ失敗にしても、何も喚び出すことが出来ないだけならよかった。

が、現実は違ったのだ。

よりにもよって、喚び寄せたのは――。

さっと目の前を横切って行った影に、俺は思わず視線を投げる。一つに纏められた艶やかな黒髪を靡かせて、細っこい足をちょこまかと動かしながら掛けていく後姿が見えた。小さな身体の両端からは、籠の淵と、その上からこんもりとはみ出た布の端が覗いていた。これから洗濯場へ向かうようだ。

彼女こそ、変わり者魔術師長が喚び出してしまった召喚獣、もとい召喚人の少女だ。

黒い髪に濃い焦げ茶の瞳。象牙の肌は珍しいが、それ以外はこれと言って特徴の無い、と言っては失礼なんだろうが、大体において平均的な少女だ。

ああ、目はくりりと大きくて愛嬌がある。……ちょっと可愛い。いや、結構可愛い。……俺の好みはどうでもいいか。

とにかく、彼女は普通の少女だ。
変人魔術師長にこちらの世界へ喚び寄せられた彼女は、召喚の条件となるはずの“力”は皆無だった。物理的な力も然ることながら、魔力も持たない、どこまでも普通の少女。
召喚魔法とは、得てして召喚主の助力となってくれるモノを喚び出すものだったはずで、それが何の力も無いか弱い少女を喚んでしまったのだから、これを失敗と言わざるして何と言うのか。変わり者の魔術師長は失敗などと認めていないようだが。

突然、今まで暮らしていた世界から切り離された少女は、今はこちらの世界で元気に特別認可の侍女として、城で働いている。
本来であれば身元のはっきりしない者を城の侍女として雇うことなどないのだが、彼女はその名の通り、特別に認められて侍女職に就いている。
何せ彼女は、絶対的な被害者だった。
彼女の身に降りかかったことを考えれば、身元の保証がなく城の侍女職に就いたとしても、誰が責められるだろう。
いや、むしろ俺からすれば、彼女は働く必要もないと思う。
諸悪の根源である魔術師長が全ての面倒を見るべきだ。
しかし、働くことは彼女の希望でもあったらしく、双方の妥協点が城の侍女、だったんだろう。
もちろん、身元の保証が無いとは言っても、変人とは言え国王お抱えの魔術師長が後見についているので成し得たことではある。万が一、彼女がとんでもないことを仕出かしても、全ては魔術師長の責任、というわけだ。当然だな。

まあとにかく、彼女は希望通りに侍女として働き、元気に走り回っている。
時折、侍女長に品が無いとどやされているが、一生懸命な様子は可愛らしいからそのままで居てほしいと思う。

いや、むしろ元気に走り回っていてもらわないと、困る。
彼女が廊下や庭に一人佇んでいる姿を見ると、胸が潰れそうな思いに駆られる。これは別に俺だけが感じる気持ちじゃなく、城に居る者はほとんどが抱く気持ちだと思う。彼女をどやす侍女長であってすら。魔術師長は別だが。あいつは人の皮を被った悪魔だろうと思う。

ある日の夕方、橙色の日が差し込む外廊下で一人立つ彼女を見た。
外庭を歩いていた俺は普通に彼女に声を掛けようとしたんだが、俯き加減の横顔を見た瞬間、息を呑んだ。
儚いとか悲しげだとか、そんな類のものだったら或いはいくらかましだったかもしれない。実際には、彼女の横顔に浮かんでいたのはもっとひどいものだった。
完全に無表情だった。
何の寄る辺もなく、ただ、“独り”だと思わせる雰囲気が濃く漂い、彼女の周りだけ切り取られたように空気さえも静止したかのような。
そこには完全なる“孤独”があった。
到底、まだ二十にも満たない少女が浮かべたとは信じられない表情だった。
その様子を見て、声を掛けることなどできなかった。気持ち的にも、物理的にも。喉元から胸の真ん中までをぎゅうと鷲掴まれているような、苦しさが込み上げていた。

きっと、彼女の孤独は、この世界にいる限り完全には拭い去れないんだろう。
還してやりたい。
だが、肝心の魔術師長が帰還魔法を完成させられないのだから、俺ごときがどうしてみようもない。実にもどかしい限りだ。彼女の佇む姿を見た者は誰もがこのもどかしさを抱えているかと思うと…

…。

魔術師長、本気で闇討ちしてやろうか。

と、思わなくも無い。実際には無理だから尚更腹立たしいことだ。

彼女が走り去った先をぼんやりと眺めていると、耳元で小さく甲高い音が鳴り響く。耳飾(ピアス)から流れてくるそれは、見張りの交代時間を知らせるものだ。これも変人魔術師長が開発したかと思うと耳が腐りそうだが、便利なので我慢しているのだ。

どの辺りが便利かと言えば……いや、やめておこう。今は必要のない説明だろうしな。

とにかく、交代の時間だ。

持ち場へと向かおうと踵を返した俺は、不意に視界に映ったド派手な姿の何かに一歩後ずさる。

これはまた、随分と……。

目の前を横切っていくのは、極彩色の気違……いや、理解し難い衣装を纏った男だ。

顔はこれまたド派手な仮面で隠されてはいるが、男なのは間違いない。何せ、ヤツは俺の同僚だから。認めたくないような気がするのはその格好を見れば仕方がないことだろう。

頭には紫色の鮮やかなつば広の帽子。その帽子には何の鳥の羽なのやら、桃色や黄色、果ては真っ青なものまで、配色を完全に無視した色とりどりの羽が揺れ、帽子の下から覗く髪は本来の髪質や色を隠すように、ごわごわとした鬘(かつら)が垂れ下がっている。こちらの色は真っ赤だ。まさに気違い。……いや、独創的。

さらに、顔を完全に覆っている仮面の地色は黒で、目元などの淵には金色の蔓模様と人を小馬鹿にしたような模様が白と赤で彩色されている。

もちろん、服装だって頭の螺子が百本くらい吹き飛んでいそうな……まあ、個性的な装いだ。

幾重にも重ねられた上着は一枚一枚で色が違う。裾や襟元から覗くそれらは頭同様、配色など完全に無視だ。また目に痛い色ばかりを選んでいる辺り、やっぱり奴はどこかに脳みそを捨てて……もしかしたら目の病気なのかもしれない。そうだ。きっとな。そう信じてるぞ、俺は。

頭の先から爪先までそんな調子で、手には手袋を付けている為、一見して体格は分かり難い。というか、正直ぱっと見ただけでは中身が誰なのやら、だ。俺は知っているけどな。同僚だから。とはいえ実際は城中の誰もがその正体を知っているわけだが。

奴は、その精神崩壊を来たしたような……誰にも真似できない個性を追求した格好をほんの一瞬忘れさせるような、静かで硬い足取りで迷い無く一つの方向へ進んで行く。

少女が駆けて行った方向へと。

◆異世界人の危険な特技？　中編

個性の塊のような奴の名前は、ハルディオ・ガレイガルという。
ただの同僚どころか従士の頃からの付き合いで、今や俺の相棒のような位置にいる奴は、初めからあれ程イカれ……おかしな野郎だったわけじゃない。
真面目で芯の通った男。口数少なく冗談の一つも言わないような堅物だったが、弱きを助け強きを挫く、そんな絵に描いたような真っ直ぐさを持っていた。
今でもその性格に変わりは無い。まあ、だからこそ器用に曲がることも出来ずに明後日の方向に進んでしまったのかもしれないが。

つい数ヶ月前までは、突飛な恰好をするようなこともなかった。
精悍で綺麗な顔をしておきながら服装などにはとんと気を遣わない奴ではあったが、それでも何故か小奇麗に見えてしまうという羨ましい体型、外貌の持ち主だ。
普通に洗いざらしのシャツやズボンを身につけている程度。そんな簡素な恰好でも奴が身につけているとあらば清潔感というものが発生するのだから、世の中は不思議だらけだ。数ヶ月前まではそれを見るだに一体あれは何の魔術だ、と思っていたものだが、今のハルディオしか見たことが無い者にはそんな爽やかな姿の奴など想像もできないだろうな。今や俺の記憶も極彩色に塗り替えられそうで恐ろしい。

とにかく、かつては異常の無かったハルディオが何故ああなった

のか。
ことの発端は数ヶ月前のとある日、重騎士訓練の時にまで遡る――。

◆◆◆

ガシャガシャと鎧の擦れる音が響き、剣同士がぶつかり合う甲高い音がそこかしこから聞こえる。同じ甲冑を着た者達が、剣を結び、或いは鍛錬場の端を疾駆する。
肌が見えているところなどほとんど無いため、全く同じ甲冑が数十人と蠢く様子はある種、異様なものがあった。
しかしこれも実戦を見据えて鍛錬するには必要なことだ。
俺たち重騎士は基本的に全身鎧を身につけたまま鍛錬をする。
もちろん脱いで鍛錬することもあるが、重装備での実戦において重要となってくる敏捷性を養うためには、常から甲冑を身につけて鍛錬する方が効率的なのだ。
さらに、普段から甲冑を身につけていれば、嫌でも鎧の構造の癖や視界の悪さには慣れる。この慣れが無ければ、本来命を守るものが命取りになるという笑い話にもならない状態に陥ることは想像に難くない。
ここ数年は国が安定し、隣国との戦も形を潜めたお陰で重騎士が本格的な戦に出兵することはほとんどない。しかし、いざ開戦となったときに俺たちが使い物にならないのでは闘わずして負けが見えてしまう。
今でこそ主な仕事と言えば城や要人の警護だが、いつか起きるかもしれない危機のために、俺達は日々鍛錬を積んでいるのだ。

と、一丁前なことを言ってはいるが、俺もいい加減、疲れた。短い小休止はあれど打ち合いが続けば鍛え上げられた俺といえども息が上がり、汗が噴出す。
うげっ、言ってる側から目に汗が――。

――カンカンカンカンッ

拙(まず)い片目を開けられん。
そう思ったとき、耳元で小さく鐘を打ち鳴らすような音が聞こえた。
音の発生源は耳飾(ピアス)だ。息を整える程度の小休止ではなく、きちんとした休憩の合図だった。

俺は秘かにホッと息を吐き、兜を脱ぐ。籠手を外して目元を拭い、数度瞬くと視界が明瞭になった。
はっきりした視界にはまず、俺と打ち合っていた相手が映った。こちらも兜を脱ぎ肩で息をしているが、しっかりと立っている。あのまま打ち合っていたら一本取られていたかもな。
負けるなんて当然いい気はしないから、丁度良く鳴った休憩の合図に感謝だ。そう思いながら周りを見ると、床にへたっている奴らが何人かいるのが目に入った。
兜を脱ぐだけならまだしも、即行で座り込んだ奴は隊長直々に指導が入る。可哀相に。
同情しつつ一息吐く。そのまま何気なく視線を転じた先で、兜も脱がず直立不動で立っている奴がいるのに気づいた。
隊長の指導を受けたくないがために兜も脱がない奴は結構いるが、肩も揺れていないとは、あいつは化け物か。
それが誰だかは俺には明らかだから、遠慮なく心の中で罵ってやる。体力馬鹿め。

俺は静かに奴へと足を向けた。是非にもその兜の中身が見てみたい。いつも通り涼しげな表情の癖に、真っ赤な顔で汗だくだったら笑ってやる。

悔し紛れなことを考えていると、すいと横を風が通り抜けていって、俺は思わず足を止めた。心なしか甘い匂いがしたような。

風を追うように視線をやれば、さらりと流れる黒髪、華奢な手足と侍女のお仕着せが見えた。変人魔術師長が異世界から間違って召喚してしまったという少女だ。

どうして彼女がこんなところに？　と首を傾げている間に、彼女は迷いの無い足取りで俺の行くはずだった場所へと真っ直ぐ突き進み、遂に直立不動の甲冑の目の前で停止した。

不意に現れた場にそぐわない少女を、場内中の重騎士たちがまじまじと注視する。そんな中で、彼女は周りの視線に気づく様子もなく嬉しそうににっこり笑って言った。

「お疲れ様です、ハルディオさん。……あの、蜂蜜檸檬水をお持ちしたのですが、いかがですか？」

その言葉を聞いて、聞き耳を立てているために静まり返っていた場内のそこかしこから、ゲホゲホと咽るような音が聞こえた。ついでに「ハルディオ……いや、ハルにもついに春が……！」とか頭の悪いことを言っている奴もいるが、そんなことはどうでもいい。

確かにハルディオは堅物でストイックすぎる性格の所為で、浮いた話の一つも……出ては消え、を繰り返すという有様だったが。

それよりも、お前ら気づかないのか、と俺は思う。

――あいつ今、全身鎧だぞ。

「あ、皆さんのもありますので、宜しければどうぞ」

少女が振り返って言う。周りからはオオーッとどよめきのような、雄叫びのような、よくわからん騒音が聞こえたが、もう一度俺は言う。

あいつ今、全身鎧だぞ、と。

周りの奴らはその意味がわからないんだろうか。

この鍛錬場内には、甲冑を着けた重騎士が何十人といる。

今は休憩中でもちろん兜を脱いでいる奴もいるが、ほとんどは被ったまま。頭の先から足の先まで鎧に隠されている。顔どころか指先一つも見えやしない。

つまり、その中でどれが誰だかなんてさっぱりわからないのが普通じゃないか？

俺がハルディオに気づいたのは、まあ、長年の勘ってやつだ。

正直、こちらの世界へ来てまだふた月と経っていない彼女が迷いもせず、確信を持って何十の甲冑からハルディオの入ったそれを言い当てるのは不可能に近いと思うんだが。

いや待て、むしろ俺も間違えているんじゃないのか？　と少々不安になったところで、直立不動の甲冑が兜を脱いだ。

結果はご想像通り。

兜の下からは、真珠色の髪を汗で張り付かせながらも何故か清潔感溢れるハルディオ様がその精悍な顔を出したわけで。

彼女、凄くないか？

そう思うのは俺だけ？

目を点にする俺を尻目に、隊長の許可を得て廊下から給仕カートを押して彼女が戻ってくる。その後ろからもう二人。どうやら外で待機していたらしい侍女たちが一緒に場内に入ると、彼女たちの周りにはワラワラと人だかりが出来始めた。

……しかしなあ。人だかりが全て鎧を装備した野郎どもっていうのがまた鬱陶しい限りだ。囲まれた異世界人の少女と侍女らがかなりたじろいでいるじゃないか。おいおい、誰か気ぃ遣ってやれよ。って無理か。阿呆が多いしな。いやいや、俺に比べれば、って話だぞ。一応な。

気の回らない野郎どもに呆れ返っていると、不意に横に並ぶ気配があった。

「お前はいいのか？」

ハルディオ……かと思いきや、隊長だった。

「いえ、自分はあの山が崩れてからで」

俺と同じような考えの奴もちらほらいる。

隊長に返事をしつつ視線をやると、ハルディオは少女の横で雪崩れ込む男どもの脳天に容赦なく拳をお見舞いしているところだった。流石にハルディオは阿呆ではなかったらしい。いや、堅物の成せる業か？

「そうか。……それよりあの子、凄いな。なんであの甲冑がハルディオだってわかったんだ？」

その言に思わず隊長を振り返る。

流石、こちらも阿呆どもとは違う。気づいていらっしゃったか、と思いながら俺も頷いて見せた。

「ですよね。ハルディオには恩人だとかで懐いてるみたいなんですが、甲冑を被ってる所にそう何度も会っているわけもないと思うんですが」

「だよなあ。甲冑どころか生身にもそうそう遭遇してないだろうに」

戦が無いとしても、重騎士である俺達にも仕事はある。ハルディオもほぼ毎日、城の何処そこの警備だ要人の警護だと仕事をこなしているのだ。侍女として働き始めた彼女とそうそう会っているとは思えない。

だからこそ、驚く。

「……まあ、鍛錬後のあいつは結構分かり易いから、その所為かもな」

確かに。鍛錬で疲弊し切ったほかの奴らの中にあって、ハルディオの体力は化け物だから分かり易いと言えば分かり易い。兜は脱がないまでも多少は姿勢の悪くなる他の奴らに比べ、あいつは疲れなど感じさせない直立不動のままだからな。

「そうですね」

隊長の言葉にそのときは同意した俺だが、後にそれは間違いだったと気づくことになる。

◆異世界人の危険な特技？　中編（後書き）

甲冑書きたかったんで重騎士とかちょっと調べたんですが、調べ足りない部分があるかもしれません。
むしろ都合のいいように解釈しているかも……；；；
この中に出てくる鍛錬の仕方などはフィクションとして捉えていただけると助かります。

◆異世界人の危険な特技？　後編

鍛錬場での出来事から数日ほど過ぎた頃、俺は謁見の間に居た。
もちろんただ突っ立っているだけなんてわけもなく、警備のためだ。相変わらず重い甲冑を着け、他の重騎士と共に正面通路の両端に控えている。
今日の謁見申請者は何人いたんだったか。願わくば長口上をつらつらと垂れ流さない奴らだといいんだが。
そんなことを考えながら剣先を床に下ろし、柄に両手を乗せて直立する。重騎士の控え姿勢だ。
王が謁見している間は、皆同じ体勢で控えていることになる。間違っても謁見の邪魔などせぬよう気配を殺し、無の彫像と化しつつ、いつでも危険を察知できるよう警戒は怠らない。
重騎士仲間の体勢が全て整った頃、大扉が開く気配がした。

臙脂の絨毯が敷かれた中央の通路を静かに進む人物が俺の正面を通り過ぎる。それが誰かを見て、俺は冑の中で秘かに片眉を上げた。
うちの変人悪魔魔術師長様じゃないか。
相変わらずいけ好かないお顔をしていらっしゃる。
魔術師特有のずるずると長い長衣を引き摺り、魔力を宿すからという理由で長く伸ばされたままの濃紺の髪を靡かせながら、絨毯の上をゆっくり歩いていく姿は一見物静かで温和な印象を受ける。
物静かで温和。
ある意味それは間違っていないだろうが、物静かで温和だからと言って、そこに良心というものが含まれているかどうかは、また別

の話だ。そのいい例が、うちの変人魔術師長様だろう。見た目で騙されてはいけない。
そんな詐欺のような外見の魔術師長の後ろから、緊張した面持ちで続く少女がいた。今日の最初の謁見者はこの二人らしい。
魔術師長の実験失敗による犠牲者である彼女がこの場にいるなら、謁見の内容も自ずと知れる。
大方、魔術師長による帰還魔法作成の進捗状況と、少女の仕事や生活、身の回りのことについての定期報告をするんだろう。
陛下は国と民に害を成さない限りは情に厚いお方だから、彼女のことについても大変お心を砕いてらっしゃると聞いた。……変人魔術師長とは比べ物にならないくらい出来たお方だ。当然だが。

彼女はここの生活にもそろそろ慣れたのだろうか、などと思いながら眺めていると、緊張に表情を硬くしていた少女がそっと魔術師長に向かい、何かを言っているのが目に映った。
背の低い彼女に合わせ自然と魔術師長が上体を倒す。
ああそれ以上近づくな！　変人魔術師長め、彼女に何かしたらその長ったらしい髪を引っこ抜いてやる！
俺が心の中で馬鹿なことを叫んでいる間に、魔術師長は少しの逡巡後、少女に頷いて見せた。それを見て彼女がぱっと顔を輝かせる。直後、身を翻した彼女は軽い足取りで、こちらに向かって歩き出した。
……何事だ？
まだ陛下はお見えになってはおられないからいいのだが、何故こっちに向かってくるんだ？
考えている間にも、彼女はぐんぐんとこちらに近づいて来る。
それに気づいた周りの重騎士たちもどことなく動揺しているような気がする。一度控えの姿勢をとった重騎士は謁見が終わるまで動いてはいけないから、雰囲気で察するしかないが。通路を挟んで俺と同じ側に整列している重騎士たちがそれぞれ僅かに身構えている

ようだ。

警備の関係上、通路から大した距離を空けているわけでもないため、少女はあっという間に目の前まで来てしまった。

躊躇いもせず一人の重騎士の前に立った彼女は、抑えた声で言った。

「あの、お邪魔してすみません。……ハルディオさん、今日はお暇な時間はありませんか？」

ああそうか、こっち側にはハルディオがいたな、と思うよりも前に、俺はギョッとした。いや、俺だけじゃなく、たぶんハルディオを含め、少女の言葉を聞いた全重騎士がギョッとしたと思う。

視線こそやることはしないが、それでもどこかからカシャンという甲冑が擦れる音がした。動じないことが鉄則の重騎士であるにも関わらず。動揺のほどが知れるというものだ。

「……」

驚き過ぎたのか、それとも元々の寡黙さ故なのか、ハルディオからの返事はない。

沈黙が流れて、ハルディオの前に立つ少女は小首を傾げた。

「……ハルディオさん？」

「……。――ああ」

どこか呆然としたような声が冑の中から聞こえた。

そりゃあ呆然ともするよな、と俺は思う。

だってそうだろう？

何せ俺達は今、全身鎧だぞ。

と、いつかと同じような言葉も心の内を零した。

そして、鍛錬場でのアレは偶然でも鍛錬後のあいつが目立っていたからでもなかったのだと、考えを改めさせられる。

いやしかし、どうしてハルディオのことがわかるんだ？

今の俺達は全身鎧なだけじゃなく、広間の中にいる重騎士の全てが同じ姿勢で控えている。背格好だって、見栄えの問題でほとんど同じくらいの者が選抜されている。

つまり、今ここに居る俺達は個人を特定する個性も特徴も、ほとんど無いと言っていい状態なんだ。先日の鍛錬の後の一件とはわけが違う。

正直、奴を相棒と自負する俺ですら、控え姿勢をとった重騎士の中からハルディオを一発で当てるのは無理だ。

それを彼女はやってのけたのだから、呆然ともなるだろう。

その後、彼女はハルディオと二言三言交わし、陛下がいらっしゃる前にいそいそと魔術師長の元へと戻っていった。

彼女がそのとき何を言ったかは、呆気に取られ過ぎていて覚えていない。

結局、そんな出来事が何度か続いた。

で、それがハルディオの奇怪な……いや、奇抜な……同じか。とにかくよくわからん恰好をするようになったこととどう関係してくるか、だが。

要は、これらの出来事が切っ掛けになった、ってことだ。

彼女が甲冑集団からハルディオを探し当てるということが何度か続くうちに、ハルディオは何を感じたのか。

はじめは、甲冑のまま少女が働いている場にふらりと現れたりしていた。いつもは侍女の仕事場になど近づかないあいつが、だ。

そして、彼女はいつもそれをハルディオだと見抜き、迷いの無い足取りで嬉しそうに近づいては、声を掛けていた。

軽い興味本位のつもりが、段々と面白さを見い出していったらしいハルディオは、甲冑だけで満足していれば良かったものを、何を思ったか他の恰好で試しだすようになる。

どんな恰好をしても気づくのか気になったのかもしれない。普段のあいつなら到底しないような恰好をしても見抜くかどうか。

それが何故あんな極彩色にまで発展したかは俺には理解できないが。

ともかくまあ、全身を隠すような恰好となれば、必然的に可笑しな恰好になるのは仕方がないのかもしれない。頭の先から足の先まで覆い隠すというのは、案外大変なものだ。

だが、他にあいつのように可笑しな恰好をする奴がいないのだから、そもそもの意図が台無しになっているということを、あいつはわかっているんだろうか？

甲冑のときは木は森の中にある状態だったが、それが一本だけ鮮やかな花を咲かせれば、目立ってしょうがない。

いまや誰もが極彩色の木の正体を知っている。

俺は、鮮やかな衣を靡かせるハルディオの背中を眺めながら、溜息を一つ。それから息を大きく吸った。

「――ハル！」

呼びかけると奴はぴたりと足を止め、極彩色の残像を残しながら振り返った。……目が痛いっつうの。
さらなる嘆息が零れそうになるのをぐっと堪えて、ハルディオの元へと近づく。

「……あの子のとこ行くのか？」
「……」

ド派手な仮面が黙ったままこくりと頷く。……怖いな。本気で。こんな恐ろしいものを毎度彼女に見せているかと思うと……。彼女は何故笑ってこいつと喋れるのか、謎だ。
彼女が平気なら別にいいのか……？　と思わなくもなかったが、腐っても相棒。ここは俺が教えてやらねば、誰がこいつを正すというんだ。という強い気持ちを込めて、俺はハルディオに言った。

「いいか、よく聞け」
「……何だ？」

不思議そうにするハルディオを軽く殴ってやりたい気持ちをどうにか押さえ込んで、肩に手を置く。

「なんとなく、それが楽しいのはわかるが。……あんまりそんな可笑しな恰好で彼女に会いに行ってると、いつか変質者だと思われるぞ？
だからたまにはそんな服は脱いで、ちゃんと正常な、良識ある立派な男だっていうのを見せとけよ」
「……」

暫く黙って考え込んでいたハルディオは（そもそも考え込まずに

気づけという話だが）、徐に首を縦に振った。分かってくれたらしい。

……分かってくれた、と思っていたんだが――。

なんで、あいつは彼女の前で、服を脱ぐんだよ！！？？？

確かに、確かに可笑しな服を脱げとは言ったが、俺は目の前で脱げとは言ってないぞ！　断じて！！

それじゃあ『いつか』どころか、『その場で完全に』変質者だろ！！！！！

全身鎧の中からたった一人を見つけ出す彼女を不思議に思っていたが、それよりも十年来の相棒の思考回路がとんでもないことになっていると、俺はそのとき初めて知ったのだった――。

◆異世界人の危険な特技？　後編（後書き）

オチが予定していたものと変わってしまった……。文字数の関係もあったんですが；

いつかオマケ的な感じで元のネタも書ければいいな、と思います。

あ。ハルディオは全裸になったわけではないので、ご安心ください。（当然だ

しかし上半身くらいは出したでしょうね。変質者なんで（笑

◇異世界からホームステイ？　（逆トリップ）（前書き）

【キーワード】
逆トリップ・現代・美形・夏・ホームステイ？

※注）こちらは連載版へと移行しております。
が、小説家になろう様の削除理由に当たらないようなので、残しておくことにしました。
題名は変わりませんので、連載版も覗いてくださるという方は、『異世界からホームステイ』で検索をお願い致します。

◇異世界からホームステイ？　（逆トリップ）

――実家に帰ると、見知らぬ外国人――いや、異世界人が居た――。

大学2年の夏、8月に入り暑さもいよいよ増して来た頃、私は約二ヶ月という長い夏休みを利用して田舎の実家に帰省することにした。都会のあまりの暑さから逃げたとも言う。

ビルの建ち並ぶ都市は、日陰も多いがアスファルトや磨かれた窓からの照り返しも強い。鉄板の中に放り込まれたようだと思うのは、私がまだ都会に慣れない田舎者だからだろうか。

蝉は煩いけれど、緑が涼しげに木陰を作り、玄関や窓を全開にしても犯罪の欠片も起きそうにない実家が恋しい。エアコンの冷たさよりも風の涼に惹かれるのは、やっぱり私が田舎者だからだろうか。

実家の縁側で団扇を片手にアイスを齧るのは、私にとって外せない小さな夏のイベントだ（日常的過ぎるとか言わないで！）。齧るものはスイカになったり桃になったりする。汗だくで汁だくなのがいいよね。……。私だけ？

それに、暫く実家を離れていたことで、母があれやこれやと世話を焼いてくれるのも嬉しい。

この間無事に成人も迎えたので、今年は父と酒でも酌み交わそうと秘かにお酒のお土産を用意していたりする（発想が男くさいとか言わないで！）。

受験に受かれば来年の春に晴れて高校生になる予定の弟が小うるさいのが玉に瑕だけれど、私は実家に帰るのが楽しみだった。

そうして母の愛情に甘え、父との交流という瞑目でお酒を飲み、自堕落に休みを謳歌しようと思っていた私が、帰省した先で思いもよらないものに遭遇するとは誰が思うだろう。

「ただいまーっ。お母さ――」

慣れた仕種で簾(すだれ)を払いのけて入った先、玄関には何故か見たことも無い白い壁が――。

怪訝に思ったのは一瞬で、反射的に見上げた先で出合った“色”に私はポカンと間抜けに口を開けて立ち尽くした。

「――は？」

白い肌、
白金の髪に、
同色の睫毛に縁取られた瞳は宵闇の藍(あお)で、
星屑みたいな銀の虹彩がいくつも瞬くように散っている。
銀河を凝縮したみたいな瞳だ。
少し節(ふし)のある鼻は過ぎない程度に鼻梁が高く、
その下に鎮座する唇は薄くも厚くもない。つまり最適な厚みってこと。
それらのパーツを黄金率のように乗せた顔が、頭一つ分以上も上にある。
その上、頬はファンデも付けていないのにきめ細かくさらりと綺麗だなんて。

私は一歩半という至近距離にあったソレに驚愕し、慌てて簾を押

し退けるようにして後退した。

――え？　は？　ぇえっ？

遮っていた壁が遠のき少しだけ開けた視界の隅に、熊のような虎のようなわけのわからない刺繍のついた草臥(くたび)れた水色の手提げ袋が見える。巷(ちまた)で少し前から流行り出したエコバッグというやつだ。田舎では前から存在していたそれは、年季が入りすぎて薄汚れている。それを男はお綺麗な手にぶら提げていた。

いや、待て。

似合わなさ過ぎるだろう。

しかも、よく見ればその金髪頭の着ているTシャツは父のもので、綺麗に筋肉の乗った身体に窮屈そうにぴったりと張り付いている。腹筋硬そう。って違う。

下に穿いているハーフパンツには見慣れない紐が。黒のハーフパンツには真新しい真っ白な紐が随分と映えている。どうやら上はパツパツなのに、ウエストは緩々で、母が苦肉の策を弄したらしい。

Tシャツやハーフパンツから覗く手足はすらりと長く、筋肉もしっかりとついているのに身長の対比の所為か細く見える。

つまり、

何だろう、このイキモノ。

「姉ちゃん何やってんの？」

私を自失から救ったのは弟の小生意気な声だった。丁度いいところに……、っていやいや待て待て、何をそんなに冷静に！　『何やってんの？』はこっちの台詞だ。

まずはこのイキモノの説明をしろ！　というか、『おかえりなさい、お姉さま』と言え！

って違うっ。

こんな不思議生命体、うちには居なかったはずだぞ絶対に！弟よ！

首を傾げてこちらを見下ろしていたイキモノが何故か納得顔で頷いているのを横目に、私は高速で弟を手招く。手首が痛い。あ、ちなみにこの手招きは上から下へじゃなく、下から上へ、ね。アメリカンな感じで。どうでもいいか。

かなりの混乱状態になりながら、近寄ってきた弟を力一杯引き寄せる。『痛ぇ！』とか聞こえたが、私の手招きスタイルよりもどうでもいい。

『ちょっと、孝太！　あのイキモノは何っ！？』

数歩先で静かにこちらを見つめているイキモノを極力視界に入れないようにしながら、小声で弟を詰問する。引き寄せた弟が『姉ちゃん近い暑い痛い』とか言っているが、私の手招きスタイルよりも（略。

怪現象を目の当たりにしたかのような私の様子に弟は溜息一つ（生意気な）。

「あー、アッシュだよ。アシュール……ヒャカスバーラだっけ？」

後半はきらきらしい不思議生命体に向かって言う。不思議生命体はこっくりと頷いた。日本語わかるのか。

すごいな勉強したのか、と驚く私を尻目に、弟はもっと私を驚愕に陥れることをポロッとサラッとアッサリ言い放った。

曰く。

「一週間くらい前に庭に落ちてきたんだ」

莫迦を言え。

◇異世界からホームステイ？

「アッシュはさ、異世界から来たらしいよ」

我が弟君は、私から出来る限り離れようと上半身を引き気味にして（言っておくけど私が臭いとかじゃないから！）そんなことを宣(のたま)った。

その言葉を聞いて、私はすごく納得した。

なるほどね。

まさかとは思ったけれど。

要するに、これが彼(か)の有名な――、

“受験ノイローゼ”というやつですね。わかります。

そんなに受験が大変だったなんて。まだ半年以上あるのに……。だからあれほど、日々の勉強を怠るなと言ったんだ、私は。サッカーばかりやっているからこういうことになる。今どき、スポーツ選手だって頭が良くないとやっていけないんだぞ。センスだけで活躍できるのは本当に才能がある人だけだ。日々の勉強から頭の回転を早くする努力というものをだな……って、何の話だ。脱線しすぎた。

説教染みたことを考えながら、私も孝太と同じように僅かに上半身を引いて受験苦という病に侵された弟の顔を半眼で見つめる。も

ちろん腕は離さないけど。逃がすもんか。正気に戻れ。
孝太は私の言いたいことを察したのか慌てたように言い募る。
「マジだって！　母さんに聞けばわかる！　いや、父さんの方がいいか、父さんが言えば姉ちゃんも信じるだろ！」
半ば叫ぶようにして言った孝太の顔は必死だ。
どうやら弟の受験ノイローゼは重程度らしい。今現在も視界にチラつく金髪男を　本気で　異世界人と言い、我が家の庭に落ちてきたのだと言っている。
かわいそうに。高校受験でそんなんじゃあ、大学はどうするんだ、弟よ。大学受験の方がもっと大変なのに。
と言いつつ、まあ万が一にもあの頭の堅いお父さんが孝太の言うことを肯定したら、信じてやらないこともない。努力はしよう。有り得ないだろうけど。
「とにかく、一先ず中に入れよ、母さんも父さんも奥に居るし。――アッシュ、買い物は後だ。姉ちゃん帰って来ちゃったから、先に説明する」
帰って“来ちゃった”とはどういう意味だ莫迦もん。いやそれより、仮にも一週間前に“落ちて来た”とかいう“異世界人”をお遣いに出すとか、うちの家族おかしくない？　おかしいよね？　まさか受験ノイローゼの弟を抱えて育児ノイ――なわけないか。流石にね。
私が居間へ顔を出すと、父は趣味の盆栽の本を読み、母はお昼御

飯の支度をしていた。母は私の顔を見、後ろから黙ってついてきた金髪男を見、一言。

「あら六花（むつか）、帰って来ちゃったの」

「……」

私も一言言ってもいいだろうか。

帰って“来ちゃって”ごめんなさいね！

弟といい、母といい、何なんだ一体。正月以来久しぶりに見る娘（姉）の顔より、金髪男の方が大事なのか。確かに目の保養にはなるが、それよりもっと娘を歓迎して！“帰って来ちゃった”とか酷くない！？

かなりイジケた気分に陥りつつ、促されてテーブルにつく。母はもうすぐ御飯が出来るからと言って台所に戻ってしまった。

私は御飯の準備が整うまでの間に、父から事情を聞くことにした。

そして、父の話を要約するとこうだ。

“ある日突然、庭の上空2～3メートルほどのところに穴が開き、そこから金髪男が落ちてきた。事情を聞いてみると、どうやら魔導とかなんとかでの移動時に座標を間違えたらしい。直に迎えが来るようなので、それまで面倒を見ることになった”

一通り説明を聞いた私は思ったよ。

何そのファンタジー。

普通に有り得ないでしょう。何でそれをうちの家族は簡単に受け入れちゃっているんだ。怪し過ぎるっていうのに。

しかも、怪しさを冗長するのは金髪男が日本語をわかることだ。どういう原理かはわからないが、聞き取りは出来て、でも話すことは出来ない。

じゃあ“魔導”云々とか、“直に迎えが来る”とかっていうのをどうやって聞いたのかというと、金髪男が絵で説明してくれたらしい。

実物を見せてもらったんだけど、これがまた妙にリアルで……、本気で上手(うま)すぎる。何処の絵描きさんですか？　と思わず聞いてしまいたくなったね。聞かなかったけど。

それはそうと私はその無駄に丁寧に描かれた絵の中にいた、従者っぽい濃紺色の髪の毛の人が気になった。眼鏡を掛けていたんだけど、異世界とかいうところにも眼鏡というものは存在するんだね。

ところでそのインテリ男がかなり私の好みなのだけど、迎えとはその濃紺髪の従者が来るのかね。こっちはしっかり聞いておいた。私的に重要なので。金髪男は首を傾げていたけど。どっちなんだ。はっきりしろこら。

私が見事な絵（主に濃紺髪の男）に見入っていると、父は笑いながら言った。

「まあ、異世界とは言え外国人が“ほーむすてい”に来たと思えばいいんじゃないか？」

……。

何そのイイ笑顔。

ホームステイくらい綺麗に発音しようよ。

私が頭の堅いはずの父の意外な柔軟性に驚いているうちに、母が居間へと料理を運んで来て家族プラス一の団欒的お昼御飯が始まった。

「アッシュ、今日のトマトはとっても甘いから食べてご覧」
「……」
「アシュール君、わさびはどうだ、君の世界にも似たものはあるのかい？」
「……」
「アッシュ、後でサッカーしようぜ」
「……」

いやいやちょっと待ちたまえよ、我が家族たち。金髪男はどれだけチヤホヤされているんだ。久しぶりに帰った娘の影が薄すぎる！
そもそも、落ちて来て一週間という金髪男、馴染み過ぎじゃない？　あ。わさびでツーンとなってる。ざまをみろ。
母はせっせと金髪男の前に料理を差し出し、父は昼間からお酒を勧め、弟は勉強についてやサッカーについてあーでもないこーでもないと喋り続けている。一々律儀に金髪男は反応を返しているが、何なんだろう、この和気藹々感は。
異世界人が庭に落ちてくるって、普通の出来事じゃないよね？　むしろ異世界とかいうものが存在することが奇跡だよね？　もっとこう、戸惑いとかないの？　金髪男は金髪男で何普通に和食とか美味しそうに食べてるの、外見に合わなさ過ぎる。
何よりも家族が何の違和感もなく受け入れているのが違和感あり

過ぎるよ！

私は納得いかない思いで悶々としたけれど、――とりあえず。

「アシュールさん、お醤油取って」

◇異世界からホームステイ？

「どうもありがとう」
「――」
「あ、これ？　食べてみる？」
「――」
「御飯とかとも合うんだけどねー。あ、種あるから気をつけてね」
「……。――ッッ！！！？？」
「アハハハ、酸っぱかった？　それ、梅干って言うんだよ」

私はそうめんのつゆに梅干を入れるのが好きだ。しその葉とかもいいけど、やっぱここは梅干だね。そうめんを啜ったときに時々梅干の果肉が入ってきて、うひゃっ酸っぱ！　ってなるのが好きなの。

あ、何の話かって？

いやね、アシュールさんがお醤油を取ってくれたときに私の手元を不思議そうに見ているから何かと思ったら、梅干を見ててね？

和食中心の我が家でこの一週間のうちに一度も遭遇しなかったのかと不思議に思ったんだけど、まあ偶々機会が無かったのかもしれないし、折角だからと勧めてみたわけ。そしたらまあ、予想通りリアクションが面白いの何のって！アハハハハ。

いやいや、その恨めしそうな顔、堪んないね！（私は断じて“えす”じゃないよ！）

ん？　それより私も家族のことなんて言えない、馴染み過ぎだ、って？

……まあ、あれです。
私、すごく空気を読む子なんです。

どう考えても、既にアシュールさんはうちの家族にすっかり受け入れられているわけで。その家族が異世界だ庭の上空に穴だと胡散臭いことを言っていたとしても、アシュールさんという人物がここに存在することは事実だ。

最初はあまりに簡単に信用しているから、一瞬“洗脳”という言葉が頭を過ぎったけど、よく考えてみたらそんなこと有り得なかった。だって、洗脳するなら“異世界”とか“庭の上空に穴”とか、そんな聞くからに怪しげな単語、真っ先に記憶から消すよね？　それでもって、もっと尤もらしい理由を捏造するはずだもん。

そして、常識的に考えて有り得ないことを洗脳するでもなくすっかり信じ込ませるような技術を持った人物を相手に、私がどう足掻いたところで事態が変わるかどうかは怪しい。何せ、堅物なはずの父に信用され、且つイイ笑顔まで引き出しちゃった人なんだ、アシュールさんという人は。

我が家では一応、父とは絶対の存在なのである。父が灰色を白と言ったらそれは白に他ならず、快晴でも雨と言ったら雨なのだ。つまり、父がこの人は異世界人ですが面倒見ます、と言ったらそうするしか無いのである。

孝太の話なんて信用していなかったけど、父がアシュールさんを受け入れている以上は、私も右に倣えというわけだ。

だから、ここは場の空気に流されてみようと思ったのです。場というよりも、父の周りの空気だけど。

まあ、万が一にも彼が私の家族に危害を加えるような怪しい行動を取れば、私だって死ぬ気で抗ってみせますとも。家族を守るために。愛でもって！　勇気を持って！　アーン、パーンチッ！

結局のところ、害が無いならどうでもいいかなあ、と。そう思ったのは否定できないけど。この親にしてこの子あり、的な部分が無いとは言えないけれども。いやいや、田舎者は心が広いんですよ。

そんなわけで、私と家族とプラス一の不思議な夏休みは始まったのでした――。

「あ、お母さん、ここにお刺身入れてー。うん、それとそれー」
「――」
「……」
「お刺身うまー。次はそうめん、そうめん！　……。　――ッッ！！！」

な、なんで！！？　どうして私のめんつゆの中に大量のわさびが……っ！！？？
ぎゃーっ！　鼻にくる！　目にくる！　なんか色んな汁が出るー！　し、死ぬ……！！！

少し目を離した隙に、何故か私の梅干入りのめんつゆが大量のわさび入りめんつゆに入れ替わっていた。
私は海苔を入れるのも好きで梅干入りのめんつゆにも大量に入れる。わさび入りのめんつゆにも同じだけ海苔が浮いていたから、つゆの色のおかしさに気づかず思いっきりそうめんを啜ってしまった。……いやちょっと、マジで。鼻痛い。
ヒーヒー言いながら、何とか落ち着いたとき涙目のまま周りを見渡すと、アシュールさんが口元を押さえているのが目に映った。目が笑ってる。さらに手元には、わさびのチューブ。その隣では弟が隠すことなく爆笑していた。

私は空気を読んだ。いや、察したね。

――孝太め！　アシュールさんに入れ知恵したな！！！

そのとき私は本気で弟を締めようと決めた。孝太、後で裏庭に来い。来なかったら潰す。来ても潰すけど。何を、とは言わないが。ナニを、だ。

大体、私がアシュールさんに梅干を勧めたときも黙って見ていたくせに！　同罪じゃないの！？

しかも、アシュールさんもアシュールさんだ！！　そういうキャラだったの、この人！？　虫も殺さなそうな綺麗な顔して……！

仮にもか弱い乙女に仕返しとか……紳士にあらず！

このとき、私のアシュールに対する態度の方向性は決まった。もう“さん”なんかいらないね。呼び捨てで十分だ、アシュール！

容赦しねぇ！　……あ。か弱い乙女としたことが、ちょっと言葉遣いが。

とにかく。

覚悟しろよ！

……。

いやいや。てへ。

◇異世界からホームステイ？（後書き）

『異世界からホームステイ？』のこれ以降の続きは連載版でご覧になれます。
小説家になろう様の削除理由に当たらず、編集で新しいお話に変えると更新履歴に載らないようなので、こちらはこのまま残しておくことにしました。
何卒ご了承のほど宜しくお願い致します。

◆異世界人だらけの異世界？　前編　（強制就職）（前書き）

【キーワード】

強制就職によるトリップ・異世界人だらけ・巨大図書館・眼鏡・潔癖・冷静沈着……と見せかけて振り回される美形・ブルーハワイ

◆異世界人だらけの異世界？　前編　（強制就職）

カッカッカッ、と短く高い靴音を響かせて、足早に廊下を歩いていく。

青年は今まで生活してきた中で、これほどに早く歩いたことは早々無かった。いつも冷静沈着に。状況判断を欠かさず。不意の出来事にも難なく対処できるように。隙など見せてはならない。必要に迫られて駆けることはあっても、これほど苛立ち紛れに靴音を響かせたことは無かった。

そんな青年が何故これほどイラつきながら早足で廊下を歩いているかというと、原因は向かう先にある。

「――ライカッ！」

バンッと勢い良く扉を開け放ちながら、青年は室内に向かい、部屋に響き渡るほどの声で怒鳴った。

見慣れた部屋は青年が今朝出かける前に見た光景と変わらずすっきりと整頓され、塵一つ無いかのように清潔感があった。ただ一つ、あるはずの無いものがそこにある。

青年がフレームのない眼鏡の奥の瞳をギラギラと光らせながら睨みつける先には、シングルサイズのベッドがあった。朝には綺麗にベッドメイクされていたはずのそこに、こんもりと出来上がった山。

青年の怒声に反応したのか、ベッドの上の小山から小さく呻る声が聞こえて、やがてそれはもぞもぞと動き出した。青年は待ち構えるように腕を組み、仁王立ちでその様子を睨みつける。もぞもぞしていた塊は暫くして、バサリと音を立てて掛け布を払いのけた。予

想通りの人物の顔に、青年は片眉を跳ね上げた。
掛け布から出てきたのは、盛大に寝癖を立てた、まだ何処か幼さの残る一人の少女だ。寝心地のいいベッドですっかり寝こけていたのだろう少女――来夏（らいか）は、まだ完全に目覚めていないのか茫洋と一点を見つめている。
そのだらしの無い姿を確認すると青年はさらに眉を吊り上げ、ついでに眼鏡も人差し指の甲でぐいっと押し上げて、ツカツカと少女へ歩み寄った。顔に掛かるアッシュブロンドの髪を払いながらベッドの前まで行き、低く地を這うような声で言う。

「ライカ、貴女は一体ここで何をしているんです。待ち合わせの場所にも訪れないで！」

高い位置から見下ろす青年に来夏は視線を上げ、その形相にも気づかずぼんやりと瞳を瞬かせた。まだ半分夢の中にいるのか来夏の反応は薄く、纏う空気は青年とは反対にひどく緩やかだ。
少女は青年を見上げたまま数度瞬きした後、徐に青年の腕を掴んだ。寝起きにしてはその動きは驚くほど俊敏だった。
しかし、――これもいつものことだ。
最初の頃こそ身構えることもなく不覚を取ったが、経験を積んだ青年はもはや動揺などしなかった。

「ふっ、甘いですね、ライカ。この私がそう何度も同じ手に……うわッ」

勝ち誇ったように口角を上げて足に力を入れ、いつものようにベッドへ引きずり込まれないように踏ん張ったというのに。少女は予想に反して青年の方へ体重を掛けてきたため、思い切り後ろへ押し倒される形となってしまった。
自分と少女の体重を受けて床に強か打ちつけた腰が痛い。

顔を歪める青年に、少女はぽつりと呟いた。

「……ぶるーはわぃ……」

青年がはっとしてスカイブルーの瞳を見開いたときには遅かった。

倒れた衝撃でずり落ちた眼鏡はいつの間にか来夏に奪い取られ、視界にはぱっくりと大きく開かれた口が――。

かぷっ、と青年は左目に齧(かぶ)り付かれた。

歯を立てられる恐怖か、それとも別の何かに対してか。青年は肩を震わせ身を固める。来夏の肩を掴む手に無意識に力が入った。

来夏は青年に馬乗りになったまま、何度か唇で食むように甘噛みした後、ぺろりとその瞼を舐める。生温かい感触が瞼を撫でて、青年の背中を何かが駆け上がった。

嫌悪だ。これは嫌悪以外の何ものでもない。と青年は自分に言い聞かせるも、彼の心拍数は上がり、短く吐き出す呼気の温度がいや増す。身体の底から湧き上がる衝動に抗い難い魅力を感じる。制止の声は確実に聞こえてくるのに、打ち崩すような奔流が全てを打ち流す。

クソッ――。

らしくもなく悪態をついた青年は、しかし堪えきれず、来夏の肩を掴む手に一層力を込めてその細い肩を引き寄せようとした。だが、当の来夏が唐突に身を放した。

引き寄せようとした力の何倍ものそれで突き放される。来夏の急な動きと、それによって生まれた二人の隙間に空気が流れ込み、濡れた感触の残る瞼が外気に触れて冷たく冷えるのを感じた。

しばし見つめ合ったあと、来夏は音がするような勢いで頬を染め

た。その目には茫洋とした濁りはなく、はっきりと意思の光が見える。ようやっと目が覚めたらしい。しかし、現実を見て朱を上らせた来夏とは逆に、青年の頭からはすっと熱が降りていくようだった。

何か途轍もなく血迷った行動に出るところだったような気がするが、きっと気のせいだ。自分は何もしていない。ただ、目の前の痴女に襲われたに過ぎない。そうだ、まさか万に一つも応えようなどと……有り得ない。絶対に。

「ニ、ニヴル、いつ帰って来たの？　……というか、なんか、ごめん……ね？」

痴女はまるで乙女のように恥らって言う。白けた気分だ。

ニヴルは来夏から眼鏡を引っ手繰るようにして奪い返すと、懐から専用のハンカチを取り出して腹立ち紛れに力を込めて拭き始めた。傷がついてしまうかもしれないが、それよりも自分の所有物に他人が触れたことが気に入らない。

一頻り来夏が触れたであろう所を念入りに拭いたはいいが、ニヴルは再び掛けなおすことはなく懐に仕舞う。どうせ度など入っていないから問題はない。

ニヴルは未だ己の上に乗ったままの来夏に構わず身を起こした。

「！　いっ……たーいっ！」

当然バランスを崩してすっ転んだ来夏がどこかぶつけたようで抗議の悲鳴を上がったが、それを冷たく見下ろし、ニヴルは言い放った。

「自業自得です。そんなところに座ってないで、さっさとその汚らしい涎を何とかしなさい」

“汚らしい”とか言った！　“汚い”じゃなくて“汚らしい”

とか言ったーっ！　女の子にむかって酷いよ！！」
「汚らしいものを汚らしいと言って何が悪い。どこに女性がいますか、連れて来なさい。それが確かに女性であれば誠意を込めて謝罪しましょう。まず無理でしょうが。いやそれよりも、貴女の所為で私の布団が穢れました。どうしてくれるのです。責任を持って洗濯屋に出しておきなさい」

私は貴女の汚らしい涎で汚れた顔を洗ってきます、と言いおいて、ニヴルは足音荒く洗面台へと向かった。
捲くし立てるような台詞に、来夏は打ちつけたお尻の痛みも忘れてぽかんと見送るしかなかった。

◆異世界人だらけの異世界？　前編　（強制就職）（後書き）

キーワードの内容がほとんど出てこず……。
次話あたりである程度の説明なんかを入れられるといいなと思いますｏｒｚ

◆異世界人だらけの異世界？　後編（前書き）

ちょっと長いです。
後半ほぼ世界観の説明なので、面倒な方は前半だけお読みください。

◆異世界人だらけの異世界？　後編

「えっと……、それで？」

来夏は不機嫌に眉を寄せるニヴルに恐る恐る尋ねた。磨き上げられた眼鏡、その奥のスカイブルーがギロリと来夏に向けられ、思わず一歩後ずさる。

何て険のある視線だろうか。どこまでも熱く、そしてどこまでも冷たい、――スカイブルー。たったひと睨みで燃やし尽くされ、あるいは永久凍土に埋められるような。……どちらにしろ死亡確定なのだが。

どうして彼はこれほど怖いのか。そして態度が大きいのか。一応仕事の面で先輩なのは来夏の方である。

（少しくらいは敬ってくれても……）

そう心の中でぼやいたところでさらにニヴルの眼光が鋭くなり、来夏は慌てて目を逸らした。

「『それで？』とは何です」

「……え？」

「『それで？』という質問の意図は何か、と聞いているんです。まるで私があなたに用事があるような言い草ですが、聞きたいのは私の方です」

言っている意味がわからない。というか、物凄く嫌味ったらしく

言われた。要するに、『俺はてめぇになんか用はねぇ！』ってことだろうか。
来夏は目を泳がせながら、いつも肌身離さず持っている鞄をギュッと抱きしめた。
「え、だって、今日は西の町に出た霧魔（むま）を浄化しに行くんじゃ……」
そうだ。確か、昨日そんなことを上司である少年館長プルウス・レアルに言われたはずだ。霧魔の浄化は本来なら来夏やニヴルの出る幕ではないが、少しきな臭いので浄化ついでに見て来い、と。
だからこそ来夏はパートナーであるニヴルを彼の部屋まで迎えに来た。まあ、合鍵を使って中に入って待っていたら、気持ちの良さそうなベッドに引き寄せられて思わず転寝……いや熟睡してしまったのだが。
「その通りです。ですから陽刻（ようこく）三半月（さんはんげつ）（午後一時頃）にロダの噴水前で、と昨日伝えたはずですが？」
言いながら眼鏡を押し上げる。神経質そうなその動きがニヴルの苛立ちを伝えていた。
しかし、そうは言っても来夏とて困る。昨日そんなことを言われただろうか、と記憶を探ったが、それらしい場面は一向に出てこなかった。
「それっていつのこと……？」
聞き返すと同時、ニヴルの片眉が跳ね上がった。同じだけ肩をビクつかせた来夏は戦々恐々と次の言葉を待つ。
またやってしまった。

たぶん、明らかに、確実に、来夏の方が伝言を忘れたか聞いていなかったかのどちらかだ。
そう思ったのは間違いではなかった。悲しいことに。
「……昨日、館長からのお達しを受けた後です。調べものをしているときに、明日……今日は、薄陽（はくよう）（午前六時〜正午まで）の間に済ませなければならない用事があることを思い出したので、閉架にいたあなたに伝えに行きました。……あなたは寝ていましたがね」
（ああやっぱり！）
予感が的中したことに来夏は頭を抱えそうになった。そうしなかったのは、ひとえにニヴルの辛辣な嫌味を回避するためだ。自分に落ち度があるのに頭など抱えて苦悶すれば、自業自得とばかりに非難が降る。自分の行動への非難を予想して頭を抱えたくなるのだが、頭を抱えたとしても非難されるのだ。どちらにしろ嫌味は免れない。
来夏は背中に冷たい汗が伝うのを感じながら、必死で言葉を探した。
「で、でも寝ていたなら――」
「起こしました。起こしましたが涎を垂らしたまま起きませんでした」
「じゃ、じゃあ書置きでも――」
「残しました。見逃さないよう、あなたの後生大事にしている咎書（うしょ）の下に差し入れてまで」
「……ついでに誰かに言伝――」
「私がそこまでする必要が？」
「……はい、ありませんです……」
来夏は負けた。尤も、悪いのは来夏であるため何とも言えない。

そもそも、閉架には寝るために行ったのではないのだ。ちゃんとやるべきことばあったのだが、静かな空間で睡魔に勝てなかった。まさか席についてものの数瞬で意識がなくなるとは来夏自身も思わなかった。

眠るべきではないときに眠り、起こしても起きない来夏にメモを残したのなら、ニヴルに非はない。メモを読まなかったのは来夏だ。

しかし、メモなどあったかな？　と来夏は首を捻った。咎書の下に差し込んだのなら、来夏が気づかぬはずがない。何故ならその咎書とは、来夏がこの世界に留まる理由であるからだ。だが、一方でニヴルも決して必要の無い嘘などつかない人物だ。

では何故メモは見当たらなかったのか。

そのとき、来夏の脳裏に一つの場面が浮かんだ。

（ああ！　きっとアレだ！　どっかの本から鎧兜が逃げ出して、それに叩き起こされて走り回ったとき！！）

来夏は半透明の鎧兜がガシャガシャと人の周りを走り回り、集めていた資料諸共、机にあったものを全てバラバラにされたことを思い出した。

◆◆◆◆◆

ここは、モルレニクス巨大図書館と呼ばれる、途方も無い量の蔵書が集められた途方も無い大きさの図書館だ。別の名で千年図書館とも呼ばれている。

そして今、来夏はこの千年図書館で導書師の一人として働いていた。

来夏は、二年半ほど前までは全く別の世界の日本という国に暮らす、普通の女子高校生だった。それがある日何を間違ったか――。

来夏はその日、いつものように学校の図書館で借りた本を中庭で読もうとしていた。

本を借りるのは来夏にとっては既に習慣的なことで、別段いつもと変わったようなことはなかった。

しかし、その日開いた本は何かが違っていた。いや、何かなどと曖昧なものではなく、はっきりとした違いがあった。――開いた本の文字が滲んだり浮かび上がったり、果てはうねうねと動いたりして見えたのだ。

その日までに来夏は色々な本を手にし、何度となく開いては閉じることを繰り返してきた。しかし、これまでこのような現象に遭遇したことなどただの一度もない。だというのに、目の前で起こっているこれは何なのか。

まさか、自分は病気なのだろうかと不安に駆られているところへ、目の前に一人の少年が現れた。しゅるり、ばさり、と空中に衣を翻し、それは実に唐突な出現だった。

来夏の目の前に立った葡萄色の髪に紫水晶の瞳をしたその少年は、異様に整った見目をしており、白を基調としたローブのようなものを被り、手にはきちんと開けるのか怪しいほど分厚い本を持っていて、……要は、明らかに不審者だった。学校の中庭に居てはならない類の。

見た目は純粋無垢な少年に見えたが、どう見繕っても高校生には見えない。周りの景色から浮いたその少年は、『文字が浮いて見えたり動いて見えたりするのは、“導書”の才があるからだ』とか何とか……。

来夏が理解できずにポカンとしているのをいいことに、少年によ

ってあれよあれよという間に勝手に千年図書館の導書師として就職することが決定され、高校も中退させられた挙句、親元からも引き離されたのだ。
直ぐにこのときの少年が来夏の上司となる、千年図書館の館長プルウス・レアルだと知るのだが、それまで来夏は彼のことを使いっ走りの小間使いか何かだと思っていた。……まあ、それにしてはいやに身奇麗ではあったのだが。

では、この千年図書館――モルレニクス巨大図書館とは一体どんなところであるのか。

まず、モルレニクス巨大図書館は、来夏の生まれた地球とは別の次元、空間に存在している。
もちろん、ただ大きなだけの図書館などではない。
この場所にはあらゆる次元で生み出された“魂ある蔵書”が集められるのだが、それらを管理・保管、あるいは返還するのが、モルレニクス巨大図書館の役割だった。

“魂ある蔵書”とは、蔵書に込められた著者の強い思念や熱意、あるいは蔵書を手にした者達の思いにより、書かれたものが蔵書の中だけでなく現実世界へ影響を与え得る力を持った、特殊な蔵書のことである。
この“魂ある蔵書”が現実世界に齎す影響の形は様々だ。

例えば、“霧魔（むま）”。
霧魔とは、魂ある蔵書からその蔵書に関わる思念が、霧や靄として溢れ出し、漂いながら何処かに行き着いて凝り固まったものを言う。
霧魔に実体はなく、見た目も濃い霧のような、輪郭のない曖昧な

ものだ。
この霧魔が現実世界へと与える影響は、悪戯程度で終わるものから悪質な悪さとなるもの、延いては人を害することまであり、またその力の使い様も様々である。

そして霧魔に留まらず、物語の中に登場するモノたちがあまりに強い力を得た場合、霧魔よりもはっきりとした形を持って外界へ飛び出してくることもある。これは“躁魔(そうま)”と呼ばれる。――来夏がニヴルのメモを失った原因である鎧兜は、こちらのパターンだ。

さらに、文字自体が蔵書から逃げ出すこともある。
この場合、周りに対して悪影響を及ぼすものを“邪字(じゃじ)”、ただ浮き出て漂い跳ねるものを“躍字(やくじ)”と区別する。

そして、これら蔵書から飛び出したものたちを総称して“書魔(しょま)”と呼ぶ。

このような書魔を浄化、あるいは捕まえ蔵書に戻し、固定化を施して、二度と外界へと影響を及ぼさない、人々が自由に手にできる蔵書にするのが導書師の仕事だった。
と言っても、導書師の仕事はそれだけではない。外界へ干渉してきた書魔に対処するだけでなく、ときには蔵書の中へと実際に渡ることさえあった。
このように導書師の仕事は多岐に及ぶため、霧魔などの割合扱い易い――その場凌ぎではあるが霧散させるだけで済むような――相手の場合は、導書師ではなく街の警吏が対処することも多い。
だが、霧魔を完全に浄化し、あるいは霧魔よりも高度な書魔に対抗、加えて蔵書の中を渡ることは、才ある者にしか担うことが出来ない。つまり、導書師として見い出された者にしか出来ない仕事なのだ。

こうした理由から少年館長プルウス・レアルは才ある者を発掘し、導書師として雇うのだが、この導書の才がかなり稀有なものであるため、モルレニクス巨大図書館のある次元に生きる者達だけでは賄いきれない。そのため、少年館長はあらゆる次元を渡り、才ある者を攫うようにして強制的に千年図書館へと就職させているのである。

つまり、千年図書館で働く者は、そのほとんどが何処か見知らぬ異次元、異世界から連れて来られた異世界人なのだ。その所為か、純粋な“人”ではない者も中には存在したりする。

モルレニクス巨大図書館がどういう経緯で生まれたのかは定かでない。しかし、ここへ連れて来られた異世界人たちの子孫によって作られたのが館下にある巨大都市――国とも言える――ファタブラーエであり、その中にある街の一つがロダだった。

まさにここは、モルレニクス巨大図書館を中心に作られた世界だった。

この千年図書館があることで、館下の街では不思議が溢れ、現実と虚構が交錯する。あらゆる次元の者たちが集まったことで、相当の文化や技術が雪崩れ込み、しかし長い年月をかけた先人たちの努力により不要なものや突出したものは淘汰され、残ったものたちが全て衝突し合うことなく上手い具合に混在していた。ただし、種族に関してはこの限りではなかったが――。

来夏にとってみれば、ここは何でも有りの闇鍋的世界だったが、それでもこの場所が存在していることは事実だ。

慣れるまでにはかなりの時間を要したが、パートナーのお陰でここまでこれた。

導書師の仕事は二人一組のパートナー制だ。現在の来夏のパート

ナーはニヴルである。
しかしこのパートナーは最初から最後まで同じ者と組まされるわけではなく、三年ごとの更新制がとられていた。何故なら、導書師は三年ごとに帰還の選択肢を与えられるからだ。

導書師として見知らぬ場所に強制的に就職させられたとは言え、実は必ずしも縛り付けられているわけでもなく、来夏は心から望めば地球に帰ることもできる。
ただそれは、この場所についての記憶を丸ごと消し去られてからのことである。また、導書師としての能力が残っていると日常生活に支障が出るため、その能力も剥奪――埋没させられてしまうのだ。

モルレニクスに連れて来られてからは見習いとして三ヶ月は少年館長プルウス・レアルについて仕事をすることになる。多いときで一日数人の導書師見習いが連れてこられるが、少年館長プルウス・レアルが面倒を見るのは大体一人だ。では残りはどうなるのか。――残りもまた、少年館長プルウス・レアルが担当する。
これはどういうことか。噂では一部の見習いは何処かで眠らされるとか、少年館長は分身できるとか、あるいは実はプルウスは一人ではないのではないかと言われているが、真実は闇の中だ。
とにかく、少年館長の下で三ヶ月の修行を積んだ後、まずはそこで最初の選択肢が与えられる。帰るか、導書師となるか。
心から帰りたいと思えば、そこで見習いたちは帰してもらえる。ただ、不思議なことにこの段階で帰還を望むものはあまりいないのだが――。
とにかく、導書師となった後も、異世界から連れて来られた者には三年ごとに帰還の選択権が与えられるのだ。

だが、来夏は切実に帰りたいとは思わなかった。だからこそ今でもこの場所立っている。……咎書とともに――。

◆異世界人だらけの異世界？　後編（後書き）

とっても説明くさいｏｒｚ　そしてまだ謎の用語もあり、かつ主人公たちの生活は垣間見る程度となってしまいましたが、とりあえず終了です。
街で起こる不思議や本に書かれた物語の歪みを解決していくような短編連作ものを書きたくて練ったお話です。
深いようであんまり掘り下げきれていないので、既におかしな部分がありそうですがｏｒｚ
どこか気になるところがあったら今後のためにご指摘くださいませ。

“導書”という言葉は“魔導書”を参考に考えたんですが、“導書”という言葉自体はあるのかと検索をかけたら、とある方が使っておりました。
しかも、“動く文字”という観点で……驚愕。
ですがもちろん、その方とこちらの作品は全く関係ございません。
念のため申しますと、参考にさせて頂いたわけでもありません。

“文字が動き出す”という設定はもうある程度使い古された設定のような気もするので、どっかで被ってやしないかと戦々恐々とはしておりますｏｒｚ
でも結構気に入ってる設定だったり。

◇異世界で復讐劇？　前編　（召喚）（前書き）

【キーワード】

異世界・召喚・結婚・裏切り・温い復讐・陰湿な復讐・魔族・鳥・もふもふ

シリアスダーク…と見せかけて主人公と鳥がイチャもふする話（予定）

◇異世界で復讐劇？　前編　（召喚）

――……ヨ……ヒヨ…ヒヨヒ……

「……？」

ほんの微かに聞こえた音に、森を進んでいた柚葉は足を止めた。
ぐるりと辺りに視線を巡らせ、首を傾げる。

――……

気のせいだったのだろうか。
耳を澄ませてみても森から返るのは静寂だけだ。
風は凪ぎ、葉の囁きも聞こえない。小鳥達は時折楽しそうに歌っているが、それ以外の気配は無いようだった。
柚葉は逡巡した後、背負った籠をきちんと担ぎなおして再び歩き出した。
この森には薬草を取りに来ている。
まだ日は高く、木々の間隙から差し込む日の光はキラキラと眩しいが、森の日暮れは早い。今は青々とした透き通るような葉も、日が傾き始めるのと比例するように暗色に染まり、地面に暗い影を落とす。あっという間に視界は悪くなるのだ。
あまりのんびりはしていられない。
それに、夕刻からは魔の時間だ。
比較的安全な森とはいえ、太陽の威光が弱まれば闇のものたちが動き出す。そうなっては大した対抗力を持たない柚葉は格好の餌食

だ。
死ぬわけにはいかない。
柚葉は足を速めながら、慣れた足取りで森の奥を目指した。
お世話になっている薬草店の店主に頼まれた薬草はもう少し進んだ先にあるはずだった。

――ヒ……ヒヨヒ……

「……」

やはり何か聞こえる気がする。
先を急がねばならないがどうしても気になり、柚葉はもう一度足を止めた。
俯きがちにじっと息を殺して耳に神経を集中させる。

――ヒヨヒヨヒ…ヨヒヨ……

今度は幾分はっきりと聞こえ、柚葉はくるりと方向転換した。
何度か立ち止まって音の方向を確かめながら、探り探り進んでいく。徐々に耳に届く音が大きくなってきた。

――ヒヨヒヨヒヨ、……ヨヒヨ

「！」

やっとのことで音の出所を突き止め、膝下近くまである草をそっと掻き分けると、そこには羽を広げて突っ付しながらも懸命に声を上げる鳥の雛がいた。

「ヒヨヒヨヒヨヒヨヒ……」
「……」
……雛鳥、でいいのだろうか？
声は甲高く幼げであるし、身体はふんわりとした濃灰色の体毛に包まれている。翼も飛ぶには頼りなく、風切羽も見当たらない。見た目からいえば完全に雛だ。
しかし少しばかり、大きすぎはしないだろうか。
柚葉の知る鳥の雛と言えばせいぜい拳ほどのものがほとんどだ。確かダチョウの雛でさえ、拳二つ分程度だった気がする。
だというのに、目の前で小さく震えている濃灰色の雛はどう見ても鶏くらいの大きさはある。いや、下手をするとそれより大きいかもしれない。
こんな雛が存在するだろうか。
「……ヒヨッ…ヒ」
「――！」
悲痛な声で柚葉は驚愕の渦から舞い戻った。
よく見れば、雛は翼と足に怪我を負っている。
大きさはともかく、このままでは時機に衰弱して死んでしまうか、あるいは獣や魔の餌になってしまうことは確実だ。
それも自然の摂理と言ってしまえばそれまでだが、消えようとしている命を目の前に見ない振りをして立ち去ることは、柚葉にはどうしても出来なかった。
怪我や病を治すための薬草店で働いていることも、妙な使命感の原因かもしれない。
とにかく柚葉は多少身構えながらも震える雛にそっと手を伸ばし

た。
驚かさないよう出来るだけゆっくりと抱き上げる。
雛鳥の声は一層弱々しくなっており、柚葉が触れても微かな抵抗さえ見せなかった。
哀れな様子に眉を寄せつつ、柚葉は頭上を見上げてみる。
雛鳥が倒れていた付近の木にそれぞれ目を凝らしたが、鳥の巣らしいものは見当たらない。巣から落下したわけではないということだろうか。

「ヒヨ……」
「……」

柚葉は逡巡し、意を決すると雛を抱えたまま踵を返した。
ここでは草が茂り過ぎており、しゃがむにも手当てをするにも妨げになる。場所を変えねばならなかった。

◆◆◆◆◆

町へ戻ると、柚葉は荷物も置かずに真っ先に役所へと向かった。
役所へは直ぐに着いたが中は混雑しており、整理札を手に待たねばならなかった。
柚葉は簡素な椅子に座り、膝の上の雛鳥を優しく撫でながら逸る気持ちを抑えて待った。

「札番号十一の方――」
「！」

やっと柚葉の番号が呼ばれて受付へと急ぐ。

「お待たせしました、ご用件は……おや」
「……」

柚葉は説明するより先に細心の注意を払ってカウンターに雛鳥を乗せた。説明せずとも、雛を見れば一目瞭然だと思ったからだ。
受付にいた壮年の男はお決まりの台詞を途切れさせ、驚きに目を瞠っているようだった。
驚いたのは雛鳥にか、それとも柚葉にだろうか。視線が雛と柚葉を忙しなく行き来する。

「えーと、これは……」
「……森で怪我をしていて……」
「お嬢さんが手当てを？」

柚葉は頷いた。
採ったばかりの薬草を使い、店で習った簡易の血止めと痛み止めを作って、よりひどい傷のあった足に薬とハンカチを巻いた。他に布が無く自分の衣服を裂くような力も持ち合わせていなかった柚葉は、仕方なく翼の方は薬をつけるだけにした。それでも何もしないよりは増しであったと思う。
ついでに栄養価の高い木の実を磨り潰して与えようかとも思ったのだが、寸での所で思いとどまった。昔飼っていた犬のことを思い出したのだ。
確か犬はネギ類が駄目だった。猫もそうだったかもしれない。人間にとっては無害でも、彼らにはエキスでさえ有毒だった。
万が一にも、よかれと思った木の実に雛にとって毒となる成分が含まれていたら、助けようとして命を奪ってしまうことになる。
柚葉は慌てて木の実の汁を脇に捨て、代わりに持っていた水を与えることにした。

一通りできることだけやってみると、少しだけ雛は元気を取り戻したようだった。
薄っすらと濡れた瞳を開くさまを確認して、柚葉は直ぐに森を抜けて役所を目指したのだ。
役所は謂わば雑用所でもある。もちろん限度はあるので使いっ走りにするようなことは出来ないが、迷い犬の保護や行方不明の猫探しもしているのだから、傷を負った雛鳥もどうにかしてくれるのではないかと思ったのだ。
この世界には地球のように動物を診てくれる獣医はいない。町医者は動物への処置は専門外だ。

「うーん、これは……あまり見たことのない種類の鳥のようだけど……」
「……」

問うような視線を向けられたが、こちらの世界の人が知らないものを柚葉が知っているはずがない。そうでなくても少しばかり世間知らずな柚葉であるから、雛鳥を真剣に見つめている振りで役人の視線から目を背けた。

「……はあ、とりあえず預かるよ。幸い命に直結するような傷でもないようだしね」

役人は最初よりも砕けた口調で言った。単純に柚葉の容姿を見てそれが妥当だと判断したのだろう。柚葉は慣れたことなのでそれについては何も指摘しない。不快にも思わなかった。とにかく役人の言葉にホッと胸を撫で下ろす。
雛の傷は命に関わらないだろうということにも、そして何の知識もない自分ではなくある程度対応に慣れた役所の人がそれほど渋らず請合ってくれたことにも安堵したのだ。

薄っすらと金の瞳を開けている今は大人しい雛鳥の頭を優しく撫で、傷に触らないよう背を撫でると、雛鳥はどこか気持ち良さそうにヒーヨと小さく鳴いた。

◆◆◆◆

一頻りの遣り取りを終え、柚葉は役所を出た。
少しばかり緊張していたのか、役所を出た途端にどっと疲れが押し寄せ、思わず溜息が零れてしまう。
人の多いところは苦手で息が詰まる。
だがこれで一安心だ。
あの雛鳥がこの先どこでどのように生きていくのかは気になるところだったが、柚葉に出来ることはすべてやったと思う。
柚葉に撫でられうっとりとしているように見えた雛鳥を思い出し、柚葉はそっと微笑んだ。
手に持っていた採取籠を担ぎ直し、採り損なった薬草については店主のエルサーラに謝らなければと考えながら、薬草店に向かい足を踏み出したときだった。

『うわわわぁぁわわわわ――ッ』

――ガタンッバサァアッヒヨッガシャアッヒヨッドサドサドサァア――！

「……」

何か物凄い音がした。
たったいま柚葉が後にした役所の方から。

柚葉は少しだけ振り返り、直ぐに前に向き直って足早に歩き始めた。何かあまりよろしくない予感がする。
激しい物音の間におかしな音も混じっていたような……。

「――ヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨ」
「……」

そう、丁度こんな――。

……。

何か聞こえる。
背後から。
柚葉は振り返らず、さらに足を速める。

「ヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒッ、ヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨッ」
「……」

必死な鳴き声が何か詰まったように途中で途切れ、直ぐに再開される。
流石に居た堪れなくなった柚葉が振り返ると、案の定、柚葉の後ろから先ほど引き渡してきたはずの大きな雛鳥がボテボテと転がるようにして柚葉の後を追ってきていた。
足に怪我を負っている所為で上手く走れないのか、幼い翼を使ってまでついてくる。

「……」
「ヒヨヒヨヒヨ」

柚葉が立ち止まったのに気づいたのか、雛鳥もまた倒れこむよう

にして止まった。
これは一体どうしたことだろうか。
いくら雛と言っても走れるくらいには成長しているし、刷り込みの時期はとうに過ぎているはずだ。それなのに何故、親鳥を追うかのように柚葉の後を追ってくるのか。
柚葉が抱き上げようか、それともこれ以上触れない方がいいのかと逡巡しているうちに、先ほどの役人が役所から飛び出して来た。頭がボサボサになり、シャツまでもがよれている。一体何があったのかと、柚葉は少し不安になった。

「あああ、急に暴れだすから驚いたよ！　とにかく中へ――うわわわわわ」
「……」

役人が雛鳥を抱き上げようとした途端、雛鳥は思い切り暴れだした。どこにそんな力が残っていたのかと思うほどの脚力で、深い傷を物ともせずに役人を足蹴にしている。
あまりの光景に柚葉が唖然としているうちに役人がパタリと倒れ、ボトッと着地した雛鳥がまたしても柚葉に向かってきた。

「ヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨ」
「……うぅ」

◆◆◆◆◆

「……ただいま、バルナスっ」

柚葉は家に帰るなり、立ちはだかる壁に躊躇無く突っ込んだ。

壁ではあるが、全く痛みはない。
巨大な壁は柔らかな灰色の毛に覆われ、ふうわりと柚葉を受け止める。
柚葉が埋まるくらいに豊かな毛皮はどこまでも滑らかで細く柔らかく、空気を存分に孕んでふっくらとしている。
全身を極上の羽毛に包まれ、柚葉はうっとりと甘い吐息を零した。

「ピーヒョル」

毛に覆われた壁が高く透き通った鳴き声をあげた。

――そう、この巨大な羽毛の壁こそ、柚葉があの日に助けた雛鳥の成れの果てだった。

あの頃も確かに大きな雛だとは思ったが、だからと言ってたった一年ほどで十畳以上はある部屋を目一杯まで埋め尽くすほど巨大化するなど、誰が思うだろうか。
少なくとも柚葉は思わなかった。全く。
だからこそ、柚葉を必死に追いかけてくる雛鳥を世話することに決め、一人暮らしのそれほど広いとは言えない自宅に連れ帰ったのだ。
それが、今や立ち上がれば三メートル近くはあろうかという大きさにまで成長し、くちばしから尾の先まではギリギリ室内に収まるかどうかというほど。
もはや怪鳥の域だ。
連れ帰ってから、どんどん大きくなる雛鳥（だったモノ）の世話を続けつつも、自分でお世話しようなど安易に過ぎた、と柚葉はちょっとだけ後悔したことがある。

しかし驚くのはそれだけではなかった。

雛鳥が幼毛のまま、そろそろ異常な大きさではないかと柚葉が思い始めるほど育った頃。
柚葉が薬草店から帰宅すると、ひたすら柚葉を追いかける大きさ以外は可愛らしかった雛鳥が、忽然と姿を消していたのだ。
代わりのように柚葉を出迎えたのは――。

◇異世界で復讐劇？　前編　（召喚）（後書き）

ヒーローは鳥です。（↑

◇異世界で復讐劇？　中編　その一（前書き）

シリアス入りまーす。
もふもふをお持ち帰りしてから一年半後くらいの出来事。

◇異世界で復讐劇？　中編　その一

「――ユズハ、探したよ」

後ろから掛けられた優しく甘やかな声に、手にしていた食材籠を取り落とした。

ジャガイモに似たメルギスと呼ばれる根野菜がゴロゴロと土の上を転がっていく。瑞々しい緑の葉を茂らせたソルエは土塗れになり、赤いヨティツェがぐちゃりと無惨に潰れてしまった。

柚葉は動けない。

使い物にならなくなってしまった可哀相な野菜たちを拾うことはできず、瞬きさえも忘れる。

振り返るのが怖かった。

「心配した……」

背後から届く声はどこまでも穏やかで、気遣いと安堵の色が滲んでいる。

それが誰であるのか、柚葉には間違えようもない。

柚葉がこの世界に召喚されてから三年もの間、ずっと唯一頼りにし、心の支えにしていた人物。いつも優しく柚葉を包むように側に居てくれた人が、直ぐ後ろに立っている気配がする。

彼はかつて、たった一人見知らぬ世界に放り出された柚葉を慮ってできる限り会いに来てくれた。故郷を思って涙すれば無駄な言葉を掛けずにただ寄り添ってくれた。慰めるように背を撫でてくれた大きく繊細な手は温かいものだった。

そう、信じていた――。

柚葉は思う。

彼の優しげな表情と言葉によって奇麗に隠されたその裏には、どんな暗い感情が隠れているのだろう。

ゆったりと細められる翡翠の瞳の奥で、どれほど憎憎しげに柚葉を眺めているのだろうか。

情けなく手のかかる柚葉に何度その銀糸の髪を掻き乱したくなったことだろう。今でもきっと。

それでも棘に塗れた黒い塊は柚葉を傷つけることが出来ず、彼の胸の中でウズウズしているに違いない。

「さあ、こちらにおいで。もう街は堪能できただろう？　――城に帰ろう」

肩にそっと置かれた手に、怖気が走る。

柚葉が気づいたときには乾いた高い音を立てて、白磁の美しい手を叩き落していた。

「っ触らないで！」

「！」

振り向くと、光り輝く秀麗な容姿の男が一人、弾かれた手をそのままに立ち尽くしていた。

何が起きたのか理解できないように固まる男は、白の衣にきめ細かな銀の刺繍が施された長衣の上から薄紫の外套を纏っていた。

清廉な立ち姿は神に愛されたように光り輝き、御使いの如き純白を思わせる。

しかしその実、彼が本当に清廉であるわけがないと、柚葉は既に身を持って思い知らされていた。

“城に帰ろう”
彼から発された迎えの言葉は、柚葉を針の敷き詰められた鳥篭へと放り込む残酷な誘いだ。
有刺鉄線で覆われた鳥篭は、一度戻ればもう二度と出ては来れない。それどころか籠の中にいるだけで柚葉を傷つけ、安息など訪れることのない日々へと只管に縛り付けてしまうだろう。

いつかはこんなときが来るだろうと思っていた。
優しさという仮面を被り、何食わぬ顔で柚葉を迎えに来るだろうと。
城を飛び出し、隠れるようにして辺境の街に暮らしていた柚葉だが、簡単に足がつくことは予想していた。
しかし実際現れた迎えは柚葉が予想していたよりもずっと遅かった。

柚葉はこの国を出られない。
それは物理的な拘束が働いているわけではなく、精神的なものによる。それもとても強烈に柚葉の精神を揺さぶる、性質の悪いものだ。
ときに人は、形あるものよりも見えないものの影響を強く受ける。柚葉も同じだ。
だが物理的でない以上、柚葉が心を殺せば国外逃亡も不可能ではなかった。
それをしなかったのは、柚葉があまりにこの国を知りすぎたからだ。それも目の前の男の思惑であったのだろう。
この世界へ来た当初から、男は柚葉をよく城の外へ連れ出した。美しい自然を見せ、民の生活を見せ、生きる笑顔を見せた。
なんて陰湿な手法だろうか。
知らぬうちに柚葉は担いだ荷物を下ろせなくなっていた。

国の民を見殺しにすることなど出来なくなっていたのだ。
加えて、柚葉が国外に逃げなかった理由はもう一つある。
柚葉が国を出たかどうかは、こうして迎えに来た目の前の人物――いずれ国の頂点に立つ男には筒抜けだということ。
柚葉の一挙手一投足を把握しているわけではなく、国内にいるかどうか、その一点において王の直系である男には感じ取る力があった。
だからこそ、たとえ何処に逃げようと、柚葉が国内にいるとわかれば捜索の手など直ぐに伸びると思っていた。それでも時間稼ぎのために逃げ出したのだ。柚葉は真実を知るための時間が欲しかった。
結果的に柚葉の目的は十分過ぎるほどに果たせたと思う。
二年もあれば、当然の結果とも言えた。
国にとって召喚してまで必要とした存在が柚葉であり、周到に張り巡らせた真綿によって縛り付けなければならないほど手放せない人柱が柚葉だったはず。
それなのに柚葉が城を出て二年。柚葉が街で過ごした日数は、この世界に喚ばれて城で過ごした日々の半分をとうに越していた。
それだけの時が経過しても一向に現れない追っ手に、柚葉は逆に不安を掻き立てられていたくらいだ。
いや、心のどこかでは尤もだと思っていたかもしれない。
柚葉のお守りから解放された目の前の男は、きっとその優しい仮面を脱ぎ捨てて、開放感と気儘な独り身を謳歌し、柚葉が把握していた以上の相手と快楽を貪っていたに違いない。
柚葉は胸を突き上げる暗い思いを押し殺し、奥歯を噛み締めた。
目の前の男に向かい衝動をぶつけることすら、悔しい気がした。
全てを過去のものにしたかった。
「……カイ、私は戻りません」
「――」

カイと呼ばれた男は驚いたように翡翠を見開き、言葉を飲んだ。
柚葉からそのような言葉が出てくるとは露ほども思っていなかったかのような顔。
迎えに来たと優しく微笑めば、躊躇いなくその手を取るとでも思っていたのだろうか。
本当は寂しかったと柚葉が泣いて縋るとでも。

――まさか、本当に？

柚葉にはもうそんなことは不可能であるのに。
何故なら柚葉は、女官たちによって美しく端整込めて整えられた繊細な男の手が、柚葉だけのものではないと知ってしまった。それはもう随分と前のこと。
柚葉以外に触れ、情熱的に動くさまも、熱を生むさまも見せ付けられた。それも一人ではない。
自分以外の女性が汚れているとは言わない。だが、柚葉が知る限りでも相手は数人も居たし、それらに熱く触れた彼の手は、もう穢れたものにしか見えなくなっていた。少なくとも、柚葉が触れて欲しいと思える手ではなくなった。
男は知らないだろうが、男の相手の女性の中には柚葉を邪魔に思い、直接的に接触してきた女性も居たのだ。狙い澄ましたように柚葉の行く先で行為に耽って見せたりもした。柚葉の存在が国にとってどんなものであるのかは把握していただろうに。大胆不敵とはこのことだった。
そんな光景を見せられる度に柚葉の心は潰れ、先ほど落としたヨティッェよりもなお赤い血を流した。
男は柚葉の前では真摯に誠実に、どこまでも優しい理想の男を演じていたから、柚葉は軋む胸を抱えながら裏切りの事実を信じられないでいた。

まるで目にしたものが悪い夢であったかのように、初めの頃は気づかぬ振りをした。しかしそれも、回を重ねるごとに目を逸らすことなどできなくなる。
明らかな不貞だった。
国の民や臣下にも祝福されて挙げたはずの結婚式はなんだったのか。
思い悩み苦しみながらも男の裏切りに目を瞑って半年。柚葉がこの世界に来て二年と少しが過ぎた頃だった。
全てが嘘であったと知ったのは――。

「カイ、……カイファス。わたしはもう貴方のところには戻りません」
「……っ。――何故そんなことを？」

笑ってしまう。
何故、と。
誰よりもそれを知っているであろう本人が聞くのか。
柚葉は非道な男に投げつけたい数多の言葉を飲みこんだ。
どんなに恨み言を連ねても、何もかも今さらだ。
そして、色々なことに目を向けようとせず、ただ流されていた自分にも非はある。
だから口にしたい言葉はたった一つだった。

「……カイファスをもう愛していないから」
「――っ」

衝撃を受けたような顔。有り得ない言葉を聞いたような。
確かに、彼にとっては有り得ない言葉だったかもしれない。柚葉が裏切りを知るまでの一年半以上もの間――いや、露見していないと思っていた彼からすれば柚葉が突然消えるまでの三年間ずっと、

彼は自分を抑えて柚葉に対しては誠実な男を演じ続けていた。
男は綿密に作り上げた柚葉のための仮面を完璧だと思っていただろうし、そう見えるよう努力もしていたのだろう。
そこまでして繋ぎ止めようとしていた相手から、気持ちが離れたと告げられるのはどんな気持ちなのだろうか。
きっと、ふざけるなと、お前ごときが何様のつもりで、と怒鳴り散らしたい衝動に駆られていることだろう。
幼稚で脆い柚葉を相手にする苦行を耐えていたにも関わらず、簡単に心変わりを告げられれば、罵りの言葉の一つも浴びせたいに違いない。たとえ本当の心に柚葉への想いなど欠片も無かったとしても、いや、だからこそ、不快に思ったはずだ。
柚葉にすればカイファスへの気持ちが消えるまでには血を吐くような辛さを耐えていたのだが、彼はそれを知らないのだから急な心変わりを理不尽だと受け取っているだろう。
しかし、もうどうでもいいことだ。
カイファスの気持ちも。
城で良くしてくれていると信じていた彼の臣下たちのことも。
嘲るように微笑みを向ける女たちのことも。

柚葉はただ、静かに暮らせるのならそれでいい。
カイファスの側ではなく、柚葉が守っている国の民の側で。

「国からは出ません。わたし自身が在ればいいのなら、何処に居ても同じはずです」
「ユズハ……」

城で過ごしていたときの柚葉にはない余所余所しい口調は、カイファスに対する明確な拒絶を表していた。
仮面を外すべきか迷っているのか、未だに困り果てた優男の顔をするカイファスに、柚葉の心は波打つ。白々しいと叫んでしまいた

かった。

「何故そんなに頑なになってしまったんだ？　城で嫌なことがあったのか？　それとも私が何かした？　……私が何かしでかしたなら謝ろう。だから――」

「何をしている」

何も理解せぬまま簡単に謝るだなんて、本当にどこまで自分を馬鹿にしている！

柚葉が堪えきれずに叫びだそうとしたとき、バサリと大きな音とともに低く地を揺るがすような声がカイファスのそれを遮った。

「バルナス」

縄のように太い、灰の色味が強い褐色の腕が腰に回り、大きな茶の翼が身体を囲った。

◇異世界で復讐劇？　中編　その一（後書き）

注）超ネタバレ的時系列説明←

◆柚葉が召喚される
↓一年未満で結婚
↓その半年後くらいに不貞発覚
↓さらに半年後くらいに夫やら臣下やらの嘘が発覚
↓全ての発覚から一年後くらいに主人公が王宮から逃走
↓街に移住して半年くらいでもふもふ発見&お持ち帰り
↓それから一年半ほどでお迎え登場（↑いまココ

ということで、主人公の召喚から裕に五年が経過しています。長

◇異世界で復讐劇？　中編　その二

「バルナス」

腰に巻きつく逞しい腕の持ち主が誰なのか、柚葉には直ぐにわかった。

柚葉が今一番に側にいて欲しいと願う者。

一緒に過ごしたのはカイファスよりもずっと短い間でしかないのに、何より、誰より信頼している。全てを預けてもいいと思える者。

見上げると思った通り、頭二つ分近く上から猛禽のような鋭い金の瞳が柚葉を見下ろしていた。

バルナスと呼ばれた有翼の男が降り立った拍子に、地面に散ったソルエやヨティツェが吹き飛ばされ、あるいは踏み潰されたのを視界の端に、柚葉は小さく吐息を零した。

柚葉よりも高い体温に包まれ、安堵感が全身の力を抜いていく。波立っていた気持ちも冷静さを取り戻した。

存在が側にあるというだけで、何も恐ろしいことなどないと思える。過去の憤りも遺物として胸の奥に沈めることができた。

柚葉が筋肉質な胸板にそっと手を添えると、バルナスの鋭かった瞳が幾分和らいだ。

額に頬を摺り寄せられる。何処か幼いその仕種は肉食を思わせる彼の大きな体躯には不釣合いだ。だがそれも柚葉には可愛く思える。

柚葉が胸に身体を預けると、腰に巻きつくバルナスの腕がぎゅうと狭まった。

「――魔族……！」

柚葉とバルナスの甘い雰囲気は、カイファスの硬い声により打ち壊された。

身を低くし腰の剣に手を掛けるカイファスを、ぎろりと不機嫌そうな灼熱の金が睨み据える。

一気に張り詰めた空気を打ち破るよう声を上げたのは柚葉だった。

「カイファス、剣を抜かないで。この人を傷つけるのは国を傷つけることと同じです」

「何を馬鹿な！　其奴は魔族だろう！？」

「うん。でも、わたしと命が繋がってる」

「な……っ！」

「……」

それは柚葉がこれまでに必死で考えた、唯一カイファスたちに対抗し得る手段だった。

城で過ごした日々の半分近くが苦痛と隣り合わせだった。

愛した人の不貞を何度となく見せ付けられ、相手の女の蔑みに晒され。終いには全てが嘘だったと知った。

カイファスからの愛も、王や臣下たちからの厚意も、それまで聞かされていたこの世界での自分の存在意義も。

全てを明らかにする彼らの話を聞いたのは、ほんの偶然だった。

柚葉が召喚されて二年、カイファスと結婚してからもすでに一年以上が経過していた頃で、彼らも油断していたのだろう。柚葉が侍女から離れ、内庭を歩いているとき、風に乗って頭上の部屋の窓から声が洩れ聞こえてきたのだ。

途切れがちではあったが、大体の内容は理解できた。

柚葉が見て感じていたもののほとんどがまやかしであったという

ことだ。

それからはとにかく塞ぎこむ日々が続いた。

毎日が地獄のようで、突然見知らぬ世界に放り出された当初よりも余程ひどい精神状態だったように思う。

けれど、嘘が露見しているとも知らず何度も見舞いに訪れる優しい男の仮面を被ったカイファスや彼の臣下たちを見ていて、ただ流され嘆くだけだった柚葉の心境にも変化は訪れる。

このままでは駄目だと。

悲しみに沈むだけでは何も変わらず、利用され続けるだけだと気づいた。

甘言に浸っていた自分も悪いのだと必死に自身に言い聞かせ、柚葉は決意する。

城を出ようと――。

「魔族と命を繋げるなど……！　貴様、ユズハに何をした！」

「……」

カイファスは剣の柄から手を離すことはなく、厳しくバルナスを睥睨する。

バルナスは柚葉をさらに抱き寄せ、額に唇を寄せたままカイファスに向ける鋭い目を眇めた。

「何も」

それだけ言うと、また柚葉の頭に頬を摺り寄せる。目の前で身構える相手にはもう興味を失ったとでもいうようだった。

射るようなカイファスの視線など物ともせず、バルナスは柚葉を腕に抱き上げ、柚葉のお腹の辺りに顔を埋める。鼻を押し付けるようにされ、くすぐったさに笑みが零れそうになるのを柚葉は必死で

堪えた。ここで笑ってしまうのは、流石に場にそぐわないだろう。
怒気を立ち上らせたままのカイファスに向かい、柚葉はゆっくりと口を開く。

「ねえ、カイファス。わたし、決めたの」
「……」

腹にぴたりとくっつくアッシュグレイの髪を撫でながら、柚葉は凪いだ声で言った。ほんの少し唇の端が上がってしまうのは抑えられなかった。
カイファスは見たこともないほど穏やかな様子の柚葉を見て口を噤み、厳しい視線はそのままに先を促す。

「わたし、あなたに……国に復讐する」
「なっ……にを……！」

明日は雨が降るらしい。
そんな日常の会話のように何気ない口調で告げられた言葉は、重い衝撃でもってカイファスへ届いた。
柚葉にべったりと張り付く魔族といい、一体この二年足らずの間に柚葉に何が起こったのか。カイファスは理解できずにいた。
己の境遇に嘆き頼りなく揺れる黒の瞳も、憂いを含んだ笑みも、カイファスの知る柚葉のそんな様子は今は微塵も感じられない。
そうだ、カイファスの姿を見れば嬉しそうに顔を綻ばせるあの笑顔もまだ目にしていないではないか。
そう気づいて、カイファスはぐるりと胸をかき回されたような嫌な感覚を味わった。
カイファスの言葉にただ頷くだけだったはずの少女は今その瞳に意思を宿らせ、自分以外の男の腕の中で安心しきった表情を見せている。いや、それどころか自分に反旗を翻しているのだ。

想像だにしていない光景だった。

二の句が告げないカイファスを見て、柚葉は笑いたくなる。

カイファスの様子を見ればやはり、彼にとって柚葉の気持ちなどはどうでもよかったのだと思えてならない。

もっと柚葉の変化に気を回し、柚葉の考えていることを理解しようとしていれば、柚葉ごときが巡らせる計画など直ぐに気づけただろうし、頓挫させられただろうに。

カイファスたちはきっと自分達の嘘を隠すのに必死で、柚葉の嘘には気づけなかったのだ。

全ての発覚から数ヶ月後、柚葉は一人王宮を出るために準備を重ねていた。表面上は何も知らない振りを通し、変わらずカイファスへ信頼と恋慕を示していた。

あまり上手くない演技が通用したのは、偏にカイファスらの油断のお陰だったと思う。彼らは柚葉には何も出来ないと高をくくっていたのだろう。

いや、それ以上に、柚葉が何を思い、何を感じ、何をしたいと思っていたかなどそれほど重要ではなかったのかもしれない。

ただ、恋という想いを利用して、目の届く範囲に置いておくことさえできれば、それでよかったのだ。

それが必ずしも必要なことではなかったとしても、彼らは自分達の威信のために柚葉を縛ることを選んだ。

何も知らない頃の柚葉であれば――バレないようにやってくれれば、柚葉は幸せだったかもしれない。

まさに王子然とした容姿を持つ秀麗なカイファスに大切にされ、存在してくれるだけで国が救われると言われ、誰もに傅かれて。

だが、柚葉は既に全てを知ってしまった。

何も知らない頃には戻れない。

流されるという楽な道を選ぶことなど出来ないのだ。

「わたしもう、カイファスが知ってるユズハじゃないよ」
「……」
バルナスの温もりに包まれて緊張が解けた所為か、口調から余所余所しさが抜け、かつてカイファスと接していた頃のものに戻っている。
しかしもう虚勢を張る必要はなく、構わず柚葉は続けた。
「全部知ってるの。わたしを城に留めるために、わたしの気持ちを――カイファスを好きだって気持ちを利用したこと」
「――！」
「召喚のこととかも、わたしなりに調べた。あなたに説明されたことと、色々違っていたね？」
「……っ」
ぎりっと歯の擦れる嫌な音が響く。
カイファスは柚葉がこれまでに見たこともないような険しい表情をしていた。
少しだけ、カイファスの本性を垣間見れた気がした。
「わたしの気持ちは玩具じゃないのに。今まで召喚されてきた子たちのだってそう……！」
バルナスの大きな手が宥めるように背を上下して、込み上げる気持ちを鎮めてくれる。
柚葉は深呼吸した。
「……だからね、復讐することにしたの」
「――待ってくれ、ユズハ。君はきっと勘違いをしている。この

国には間違った情報も多く流れて――」
「わたしの気持ちを利用したことは否定しないの？」
「！！」
表情の強張りは、明らかな肯定を意味していた。
「……いいの、本当にもう、全部知っているから。今さら謝って欲しいわけでもない。でも、復讐はする。
大丈夫。わたしは国とあなたに復讐するけど、きっとそれは国のためになる」
「君は何を――」
「覚えておいて？　わたしとバルナスの命は繋がってる。わたしを城に連れ戻そうなんてしないで。そんなことをすればきっとバルナスがこの国を壊す。バルナスを殺すことは私を殺すこと。だから私を放っておいて。――静かに復讐のときを待っていて」
そう言い置くと同時に、柚葉を抱えたままのバルナスが強烈な風を巻き起こし、空高く舞い上がった。
見る間に小さくなる影を、カイファスはただ見送るしか術はなかった――。

◇異世界で復讐劇？　中編　その二（後書き）

鳥（バルナス）の影が薄い。
次話で補強しようと思います。
今までにない筋肉系ヒーロー。
でも岩のようなマッチョではナイヨ。細マッチョでもないケド。（…

◇異世界で復讐劇？　後編

「空の警備は手薄だな」

「！」

突如バルコニーから響いた重低音に、カイファスは跳ね起きるようにソファから立ち上がり、懐の短剣に手を伸ばす。

バルコニーには一羽の大きな鳥がとまっていた。鷹に似たその大鳥は焦げ茶の艶やか翼を持ち、威風堂々と手すりに鎮座している。鼻筋から首の後ろに掛けての鬣のようなアッシュグレイの羽が王者の風格を思わせた。

しかしその姿を見せていたのも一瞬で、瞬く間に大鳥の姿は溶け、徐々に人型をとっていく。数秒もしないうちに靄は一人の男の姿を形作った。と同時に、鋭い金の瞳がカイファスを射抜く。

変態を遂げた男を見て、カイファスは得物を構えるべきか躊躇した。

姿を現したのは忌まわしき魔族の男。カイファスは数日前に再会した柚葉の言葉を思い出したのだ。

命が繋がっているということがどういうことなのか、微細を知らない。傷つけるだけで柚葉に影響を及ぼすのか、命さえ奪わなければ柚葉も無事であるのか。

もちろん調べてはいたが、いまだ正確な情報を得られていないのだ。

カイファスの迷いを感じ取ったように、魔族の男が口を開いた。

「抜いてもいいが、勧めはしない。柚葉が言ったことは事実だ」

筋肉の隆起した太い腕を組み、バルコニーの手すりに寄りかかる男は目の前で柚葉を連れ去った魔族の男に間違いない。この国で人型の魔族など目にすることはほぼ皆無と言ってよく、間違いようがなかった。柚葉の名が挙がったことからも明らかだ。

しかし、わかっていても、男は柚葉とともに居たときとはあまりに雰囲気が違いすぎて、カイファスは微かに戸惑う。

柚葉に甘えるようにして擦りより、ともすれば微睡むような空気さえ放っていた男は、今や暗雲も落とすほどの重く不穏な空気を纏い、獲物を前にした猛禽よりもなお炯々《けいけい》たる眼光でカイファスを睨み据えている。

剥き出しの上半身は強靭な筋肉に鎧われ、その肌色も相俟って鋼のように見える。両の肩口や胸元に施された銀の刺青が異様さを放ち、獲物を品定めするように自在に収縮する瞳孔がヒトではないことを知らせる。

両の上腕に嵌められた腕輪は鈍い金で同色の細い紐のような装飾が幾筋も腕輪から垂れ下がっているが、上半身に身につけているものといえばそれだけだった。

相手は完全に丸腰だというのに、全身に刃を突きつけられているような気がするのはどういうわけだろうか。

この国の次代を統べるはずだというのに、カイファスは目の前の男に完全に圧倒されていた。

背筋を冷たい雫が伝っていく。

その軌跡が見えたわけでもないだろうに、バルナスはフンと小さく鼻を鳴らし、白けた様子で金目を眇めた。

「柚葉のかつての番(つがい)は随分と不甲斐無いらしい」

「っ！　な、…んだと！　……っ」

挑発するような言葉に咄嗟に声を荒げ、カイファスは慌てて言葉

を飲みこむ。舌打ちしたいのを寸でのところで堪えた。
しかしカイファスの様子など気にした風も無く、バルナスは続ける。
「貴様は何もわかっていない。柚葉のことも、この脆弱な国のことも、――貴様自身のことも」
「……何が言いたい」
地を這うような声で問う。それでもバルナスの腹の底に響くような声には敵わなかったが、カイファスの出せる一等低く、硬い声だった。
「そのままの意味だ。柚葉は流れに身を任せた自分も悪いと思っているようだが、貴様も同じということだ。……いや、気づいた柚葉よりもいまだ気づかぬ貴様の方が余程愚かだろうな。流れの中で掴むべき藁も逃した」
「……」
理解し難い言葉にカイファスは眉を寄せ、しかし反駁の言葉を飲みこむ。魔族の言葉など、真面目に聞くものではないと頭のどこかで警告音が鳴っていた。惑わされるな、冷静になれ、と胸のうちで繰り返す。
男は威圧的な雰囲気とは裏腹にゆったりとした様子で、バルコニーから動く気配もない。
だがカイファスは警戒を怠らず、懐の短剣からも手を離すことなくバルナスを見据え続けた。
柚葉のことを考えればカイファスはバルナスを傷つけられない。しかし逆は可能だ。バルナスはカイファスを傷つけることができるのだ。それも、いとも容易く。
悔しくともそれが事実であるから、敵わないと本能が告げていて

も短剣から手を引けない。
いざとなれば、柚葉の命よりも己の命を優先する。簡単に殺されるわけにはいかなかった。
カイファスは次代の国王であり、民を守り育んでいく立場にある。誰よりもそれに相応しい教育と素養を身につけてきた。
硬く口を噤み緊張を漲らせるカイファスを見、魔族は研ぎ澄まされた金の瞳を細める。嘲るのでも呆れるのでもない視線は、淡々とカイファスを観察していた。

「そう警戒せずとも殺しに来たのではない。柚葉の望みはそんなものではないからな」
「……では何だと言う」

その問いは前者に対してか、後者に対してか。
カイファス自身さえも判断できなかったが、バルナスは後者についてのみ口にした。

「さて。それは貴様が己の目で確かめればよい。我が教える筋合いはない。ただ、……そうだな。柚葉はどこまでいっても柚葉だ」

そう言ったバルナスの金の瞳は柚葉の影を追うように僅かに優しさを含んで細められる。
カイファスはそれを苦い気持ちで見つめた。

「柚葉の言葉に嘘はない。彼女が言った通り、彼女の復讐は復讐であり、国のためでもあるのだろう」
「……」
「――しかしそれでは生温い！」
「っ！！」

突如部屋中に吹き荒れる風に、カイファスは必死で足を踏ん張った。舞い飛ぶ書類や書物、その他の小物を避けるために顔を腕で庇ったが、直ぐに突風はおさまった。

「貴様らが柚葉にしてきた仕打ち、ひと時たりとも忘れるな。柚葉の嘆きと我の怒りは別のところにある。それを心して過ごすがいい」

そうして街でのときと同じよう、一陣の風を残して一人の魔族は姿を消した。

後には荒れた室内とそれ以上に荒れ狂う感情に翻弄される、一人の愚かな男だけが残された。

◆◆◆◆◆

――カタン

小さな音がして、疑問に思う間もなく腰にぎゅうと何かが巻きついた。

香草を使ったスープの味見をしようとしていた手を止め、見下ろせば腰もとにアッシュグレイの丸い頭があった。

「バルナス」

「……」

呼べば金の瞳が嬉しそうに柚葉を見上げた。

「おかえりなさい」

頭を撫でると更に顔を蕩けさせて、ぎゅうと再び柚葉の腰もとに顔を埋める。

バルナスはいま、八歳ほどの少年の姿をとっていた。

本来は屈強な二メートルもある魔族の男のバルナスだが、家で動き回る際には基本的に少年の姿をとる。小さな方が狭い部屋では動き易いからだ。

バルナスの気分次第では十歳や十五歳程度になることもあるし、人型を取らずに鳥の姿で過ごすこともある。成鳥になってからはそれが可能だった。

彼は今、八歳の気分らしい。

柚葉が始めてバルナスの人型を見たときは五〜六歳程度の姿だった。

薬草店から帰宅すると雛鳥の姿が消え、代わりに腰に抱きついてきた見知らぬ少年に驚愕したものだ。

金の瞳を見て、何故か柚葉には直ぐに彼が雛鳥の変化した姿だとわかった。肌の色は人にあらざるものだったが、不思議と恐怖は感じなかった。

ただ半信半疑のまま『ひーちゃん？』と呼びかけたのだが、少年は嬉しそうに頷いた後に少し困ったように眉尻を下げ、頭を振って『バルナス』と訂正してきた。雛鳥の鳴き声から安易につけた呼び名は流石に気に入らなかったのかと思ったが、本来の名前が“バルナス”というらしかった。

名前があることを考えるとやはり刷り込みの時期は過ぎていたはずなのに、バルナスが何故柚葉を親鳥のように慕うのか。柚葉にはわからなかったが、それから柚葉の鳥と時々少年との日々は始まった。

子育てのような位置からスタートしたため、柚葉にはいまだにバルナスを幼い少年として扱ってしまうときがある。彼はとっくに成鳥だというのに。

バルナスとて甘えるために少年の姿をとる癖に、柚葉があまり子供扱いをすると拗ねたように鳥の姿をとって口を利かなくなることがある。あるいは家の中でも時折青年の姿をとって見せる。まるで本来の姿を忘れるなとでも言うように。

しかし頭二つ分も背の高いバルナスを見て、柚葉はどちらかというと、随分大きくなったなあ、と子の成長を喜ぶ親のように感慨に耽ってしまう。たとえとっくに親子の関係などではなくなっているとしても。

ちなみにいえば、バルナスは鳥の姿でも大きさは自由自在だ。手の平サイズの小鳥になることも出来れば、鶏サイズになることもできる。

ただ、人型のときとは違い、鳥の場合はどれも成鳥の姿で大きさだけが変化する。小鳥サイズと言っても見た目は猛禽だった。それを見たときに、『小さいときは小鳥の方が可愛いのに…』とポツリと言ったのが聞こえたのか、その後数日バルナスがどんよりと落ち込んでしまい、柚葉は彼の機嫌を立て直すのに苦労した。

以来柚葉は、バルナスのどの姿も可愛い、大好きと褒め倒すことにしている。

実際、子供姿のバルナスは可愛いし、どんなサイズの鳥姿もふわふわで大好きだ。

八歳ほどのバルナスを腰に貼り付けたまま柚葉はスープの支度を済ませたが、それ以上は流石に身動きが取れず、バルナスの頭をひと撫でして声を掛けた。

「ご飯できたから、お皿を出してくれる？」
「……わかった」

渋々柚葉から離れたバルナスに笑みが零れる。無心の愛情が嬉しかった。

食事の準備が終わって席につくと、目を煌かせてスープを口に運ぶバルナスを見ながら柚葉は気になっていたことを尋ねた。

「そういえば、さっきはどこへ行っていたの？」

成鳥になってからバルナスはときどき家を抜け出すことがある。薬草店のお昼休みに柚葉が一度家に戻ることを知っているため、その時間には必ず姿を現すのであまり気にはしていないのだが、今日は少し帰りが遅かったのだ。普段なら柚葉が食事を作っている後姿をじっと見つめているのに。

柚葉が首を傾げていると、バルナスはスプーンを口に運ぶ手を止めて柚葉を見た。金の瞳が爛々として見えたのは気のせいだろうか。バルナスは直ぐに視線をスープに戻し、素っ気無い口調で呟いた。

「兎の様子を見てきた」
「……兎？」
「ぶるぶる震えていたので可愛かったぞ」

微かに唇の端が上がったのに気づかず、柚葉は眉尻を下げた。

「……生で食べちゃだめだよ？」
「食べはしない。己を虎と勘違いしているようだから身の程を知らせてやるのだ」
「……？」

そんな兎がいるのだろうかと、柚葉は疑問符を乱舞させてさらに首を傾げた。

「其奴は他にも思い違いが多い。我が教えてやろうと思ってな」

「……そっか」

偶に柚葉には到底理解できないことを言うバルナスを前に、柚葉は頷くことで話を終わらせることにした。

バルナスが柚葉に理解できないように話すということは、柚葉に理解して欲しいともするべきとも思っていない事柄だということだ。

柚葉が本当に知りたいと思うことや、知っておいた方がいいことは決して隠さないのがバルナスである。ならば今回の話題は追究せずともよいということだと柚葉は受け取った。

それからはまた穏やかな食事が始まった。

◇異世界で復讐劇？　後編（後書き）

こちらはここでひとまず終了です。
『復讐劇？』はネタバレをふんだんに含んだ断片集になった気がします。
もちろんまだ謎な部分とか、省いた部分とかもたくさんあるんですが。
もふもふと戯れる様子が書けなかったのが少し心残りです。柚葉は眠るときは鳥バージョンのバルナスのお腹の下で寝ています。暖かいんだぜ。リアル羽毛。
『復讐劇？』はカイファスと柚葉の過去の関係で、連載にするとしたらＲ１８じゃないと駄目なのかなあ、とか思っています。どうなんだろう？

◆異世界で刺青師？　前編　（迷い込み）（前書き）

【キーワード】

異世界・迷い込み・刺青（のようなもの）・御守り・魔道具・主人公は店主・美少年・美青年・美女・魔猫・マッチョもいるかも

◆異世界で刺青師？　前編　（迷い込み）

「……っ」

息を吹きかける度にヒクリと艶肌が揺れる。
頭上からは押し殺した呼吸音と時折飲み込み損ねた苦悶の声が。
私の両脇にはしなやかで、でもまだ発達過程にある太腿があり、そのすぐ脇には椅子の肘掛をギュウと握り締める細く節張った長い指。

「……ぅっ……」

ふぅっともう一度息を吹きかけ、なだらかに隆起する腹筋を撫でると、両脇の太腿が僅かに震えた。

（なんだろうなあ……すごくイケナイことをしている気分……。）

まさか前日になって睡眠促進効果のあるアロマを切らしていることに気づくとは。
ええ、決して故意ではありませんよ。不慮の事故、想定外です。
アロマに頼れないと知ったときの少年の強張った顔といったら。あまりに申し訳なくて「また今度にしようか？」と聞いたら、負けず嫌いなのか何なのか、忘れたいだろう過去さえ振り切って「いえ、平気です」とキリッと断言した彼には心の中で拍手喝采したものだ。
しかし今の様子を見ると、結果的に後悔する事態に陥っていそうだけど。

――ふぅ……

「――！」

そっと息を吹きかけると、また少年の奇麗な腹筋が引き攣った。敏感ですね。……あ、いえいえ、何でもないです。うん、もう終わるからもうちょっと我慢してください。

アロマで眠らせるのは別に痛みがあるというわけではなくて、作業の部位によってはお互いに気まずい思いをする可能性が多分にあるからだ。まあその、性的な意味で。……ええ、既に経験済みですが何か？

「――はい、終わったよ」

出来るだけ素知らぬ顔でペチッと剥き出しの硬いお腹を叩き身体を起こすと、背凭れを少し倒してある椅子に背を預けていた少年が、大きく息を吐いた。

同時に随分力んでいた身体から力が抜けていくのがわかる。

そんなに緊張するなら素直に断ればよかったのにね。

それにしても。

「ん～、いい出来栄え」

「……」

私が目の前に晒されている芸術的な腹筋を遠慮なく眺めていると、少年が居心地悪そうに身動ぎをした。

（ああしまった、私としたことが自分の腕前を自画自賛するのに夢中で……。）

少年の大きく開かれた両足の間を長々と陣取っていた自分に気づいて、ちょっと慌てる。流石にここは恥らうところでしょうか。……いやいや、私が恥らったら逆にもっと居た堪れなくなるよね、うん。

あ、少年はちゃんと下穿きを履いているからね？　クリーム色の少しダボッとしたヤツ。膝下あたりから八分くらいまで包帯のような布でぐるぐると止めてある、現代には無い感じのズボンですが。

いくらなんでも下も履いていなかったら私でも平気な顔でこんな場所に陣取りません。

「ユト、どう？　身体に違和感とかない？」

私は平静を装って出来る限り明るい声でユト――ユティオル・ヴォルディエントの様子を窺った。

「……いえ、いつもながら特には」

「そう、ならよかった」

異常なしの返事を聞いて安堵し、ユト少年の赤金色の髪から覗く耳が赤いのには気づかなかった振りをして私は立ち上がった。

テーブルの上の籠から生成りのシャツを取ってユトに手渡すと、律儀に「ありがとうございます」と軽く頭まで下げられた。相変わらず礼儀正しく、そしてちょっぴり堅苦しい子だ。

緩くウェーブを描く磨き上げられた銅のような赤金の髪は柔らかそうで、でも前髪から覗く大きな紫水晶の瞳は少し吊り気味。眉も気性を表すようにスッと一直線なお陰で、ふんわりとした淡色の髪から受ける甘い印象を引き締めている。

鼻梁は高すぎず筋が通り白い頬には薄っすらと赤味が差して、薄い唇は桜色。

まさに美少年。
そんな彼は出会いの一件から、今や私の　実　験　台　だったりする。
「それで、今回はどんな魔画（メヘンディ）なんですか？」
「ああ、今度のはねぇ――」
気持ちを切り替えるようにして切り出され、私も便乗してわざとほんのちょっと得意気な調子で答える。
魔画――メヘンディ。
それはたぶんこの世界では私にしか施すことの出来ない特殊な画（え）だ。
さっきのイケナイ妄想を起こさせるような状況も、決して邪まな感情を伴ったものではなく――いや、正直に言えばちょっと嗜虐心が疼いちゃったりしたけど――あれも魔画に関係するもので、立派なお仕事の一環なのだ。
まあ、仕事と言っても表向きのものではなく、裏でこっそり限定的にやっているお仕事なんだけれども。
「――毒除けの魔画を描いてみたの」
「解毒ではなく毒除け、ですか？」
「そう。ほら、ここにベルゴルの葉のモチーフを入れてあるの、わかる？」
「ああ、ええ。――ではベルゴルの毒を回避することができるのですか？」
「うんうん。理論的……というか、私の見込みではそうなるね」
魔画の見た目を説明するのに一番想像され易いのはタトゥ、和名

では刺青、だと思う。
肌に描かれるという意味では同じ。
ただ、おっかないヤのつく人たちが描くような毒々しかったり厳ついもの、派手なものではないし、描くのは写実的なものでもなく、どちらかというとデフォルメされたデザイン的なものばかりだ。色も青や赤を入れたりはせず、単一黒一色。あ、たまに濃紺は使ったりするけど。

もう一つ刺青と違うのは皮膚に直接色を刺し込むわけじゃない、ってところで、加えて用途を考えても本当はどちらかというと元の世界のインドで魔除けなどに使われていたメヘンディ――所謂『ヘナタトゥ』とか『ヘナアート』と呼ばれるものの方が似てる。
魔画、って書いてメヘンディって読むことにした理由はそこにある。
命名が安易だけど気にしない。名前なんて分かり易いのが一番だ。

インドのメヘンディはヘナという植物をペースト状にしたもので肌を染める。染めるだけだから刺青と違って1～2週間で消えるし、デザインがとても凝っていて奇麗だからお洒落で描いたりする人もあちらの世界には多くいたかな。
一方で私の描く魔画は特殊な溶液を使って肌に描き、私が息を吹きかけることで固定化する。刺し込むのでも染めるのでもなく“塗る”と言った感じだね。刺青のような痛みはないし、ヘナタトゥのように時間を置いて流したりもしなくていい。身体をキャンパスにして絵を描くだけだ。
ただ細い筆を使うから施される側はくすぐったいし、息を吹きかけられるのもくすぐったい。場所によってはその……まあ、疼いちゃったりもするわけで。……うん、その結果のユトの反応なわけですが。
ああ、溶液をそのまま残すけど皮膚呼吸できないなんて問題もな

いみたいだから安全だよ。落とすことも特殊な洗浄液を使えばあっという間に落ちるし。
デザインも本場のメヘンディまではいかないけどそれなりに考えて描いているし、お客様にはかなりお褒め頂いてる。

「――ベルゴルの葉は用意してありますか？」
「うん。紅茶に入れられたりすることが多いんだっけ？」
「ええ、ベルゴルの葉は効力は弱いですが無味無臭なので、毒として使われるなら料理や飲み物に混入されることが多いです」
「なるほど」

で、私の描く魔画が元の世界のメヘンディと決定的に違うのは、その効果にある。
メヘンディは元の世界では魔除けや願掛け、運気の向上などのために使われていて、効果のほどはたぶん日本の御守りとかと同じで劇的なものではなかったと思う。

でも私の魔画は目に見える形、あるいは実感できる形で効力を発揮する。

精神的なこと作用するものもあるけど、顕著なのはやっぱり肉体強化かな。力を増幅したり、皮膚の一時的な硬化を図ったり。
もう一つすごく特殊なものがあるけどそれはまた追々。
魔画の効果はモチーフとして描くものによって様々で、元の世界のメヘンディで使われているものからそのまま引用してこっちでも使っているものもあれば、こちらの世界のモチーフを使って新たに考えたデザインもある。
実は何を描くかはそこまで問題じゃなくて、要は私のイメージが大切なんだ。魔画に力を込めるのは私だから私が念を込め易いモチーフを選ぶのが最優先になる。つまり、モチーフが効果を上げるわ

けではなく、効果を発揮させるためにモチーフを使うのだ。
本当は私が念を一番込め易いのは“漢字”で、だからモチーフの中に上手く崩しつつも漢字を入れることも多い。漢字だけではつまらないし、モチーフだけだとイメージが固まらない。だから二つを合わせてることにしたんだ。

今回描いたベルゴルの葉は、元の世界には無かったものだ。
ベルゴルの葉には毒が含まれていて、ユトが言った通り無味無臭なので暗殺などに用いられることも多いらしい。
さっきユトのお腹に描いた魔画は、毒除けの効果があるようにイメージして描いた。
ベルゴルの葉の中に“跳ね返す”という意味で『反』という漢字をいくつか葉脈の中に崩して入れ、葉の周辺には“あなたを守る”という花言葉を持つ『カランコエ』という元の世界にあった花をデフォルメして散りばめてみた。
一応しっかりイメージを注ぎながら描いたから効力の方は大丈夫だと思うんだけど……。

「紅茶に葉の汁を数滴垂らしていただければ飲みます」
「うん、ありがと！」

話が早くて助かる。流石、私の実験台！
失礼極まりないことを思いつつ、急いで紅茶を用意してユトに差し出した。
実験台と繰り返すくらいだから、ユトには私が新作の魔画を描いて、それが本当に意図したような効果を発揮するかを試してもらっているのだ。
ユトも慣れたもので、最近ではどうやって効果を試すかは自分から考えて実行してくれたりする。気が利くので本当に助かります。
いくら私でも相手に「試しに毒飲んで」なんて軽くは言えない。

――それにしても、陽光の差し込む中いまだ肌蹴たシャツのままで少し緊張気味に紅茶のカップを持つユトは、……絵になるな。
美少年は伏し目になっただけで憂いを含んだ色っぽさが出る。さらに日差しを浴びて輪郭が少しだけぼやけ、赤金の髪がキラキラ光を弾く様と言ったら……。

ごちそうさまです。

などという馬鹿な考えはおくびにも出さず、私はユトに声を掛ける。

「わかってると思うけど、最初は舐める程度にしてね。もし失敗してたら大変だから」
「はい」

割と冷静な返事が返ってきてちょっとだけ安心する。
まだ十代だというのに、ユトには年齢を忘れさせるような落ち着きがある。
しかし魔画を描いている最中のいちいち反応する様子は初心で……って、これってセクハラ？　確か女の人からでもセクハラは成立するんだよね？　危ない危ない。

ユトがゆっくりとカップに口をつける。
このときばかりは私もおかしなことは考えずに彼の反応を静かに待った。

「――っ」

紅茶の湯面が揺れた直後、ユトが眉を顰めた。薄紫の瞳を細め、

少し首を傾げる。

「どうかした……？」

少し不安になって聞いたんだけど、ユトはカップを持っていない方の手で制止のポーズを取ったので、私は大人しくユトの動向を窺うことにした。

実験台とか言ってユトに新しい魔画のお試しをさせてはもらっているけど、私のこの能力はどうもチートくさくて、今までに失敗したことがない。つまりあんまり実験の必要性は感じないので、ユトはあくまで念のための実験台要員だ。ユトが捕まらないときは自分で実験台になったりもする。というか自分で実験する方が多い。

本当は他人で試すのは気が引けるから、ユトを実験台にするときは失敗しても問題ないようなものを選んでいるんだけど、今回は自分の身体では描きづらい場所だったからユトに描かせてもらった。

ちなみに描く場所はどうしてもそこじゃないといけないということは無いんだけど、でも結構描く場所には意味もあるし効果の強弱にも多少影響するので、あえて効果の薄い場所は選ばないようにしているんだ。

ユトが意を決したようにカップを傾け、先ほどよりも多くの紅茶を口に含んだ。

「ッ！！　ぐっ……げほっごほっ」

「ユト！」

紅茶を口に入れた途端、苦しそうに咽たユトに慌てる。

スカートのポケットからハンカチを出して渡し、慌てて水差しからコップに水を注いでそれもユトに渡した。

（やばい、もしかして初の失敗……！？）

◆異世界で刺青師？　前編　（迷い込み）（後書き）

説明が分かりづらかったらご一報ください。

ユトは１８歳くらい。主人公は２４歳くらいを想定しています。
１８を少年というのは微妙ですが、主人公の感覚で２０歳未満＝少年なのでお許しを。
あとユトは西欧系にしては童顔で成長も遅いというどうでもいいような設定があったりします。まだ成長期。

「げほっごほっ」

苦しげに咳を繰り返すユトに焦りが募る。
魔画が失敗するなんてほぼないと思っていたから、咄嗟に自分が何をしたらいいかわからなくなった。
でもキョロキョロしているうちにテーブルの上の小瓶が目に入って、私は心の中で盛大に自分を罵った。

（解毒薬、ちゃんと用意してたじゃない……！！）

すっかり存在を忘れていたそれに慌てて手を延ばす。
横ではまだユトが咳き込んでいて、細い背が苦しげに揺れているのが痛々しかった。

「ユト、ま、待ってね、いま解毒薬を――っ！」

――カシャンッ

（あああぁぁぁぁあぁあっ！！！）

なんて間抜け！
なんてお約束！
無駄にお約束！！
こんなドジっ子みたいな展開、誰も期待してないって！

焦るあまりに念のためと用意してあった解毒薬の小瓶を取り落としてしまった。
物凄く軽い音を立てて飛び散った大事な解毒薬に頭が真っ白になる。

「けほっ……んんっ」

呆然と床を湿らせる解毒薬を眺めていたけど、ユトの呻きで我に返った。
そうだ、呆けている場合じゃない！

「だだだ、大丈夫だからねユト！　今すぐベローナの薬草店に行って来ればきっと間に合う！」

魔画（メヘンディ）は割と万能だけど、こういうときには役立たずだ。だってのんびり模様を描いている暇なんて無いからね！
私は床に散らばった小瓶の破片もそれなりの値段がする解毒薬もとりあえず無視して身を翻す。
軽い気持ちでユトを実験台呼ばわりしていたけど、未知の魔画を描くことにもうちょっと警戒心を持って慎重を期すべきだった。
まさかまだ２０歳にも満たない少年の命を危険に晒すことになるなんて、失態だった、で許されることじゃない。

「ごほっ――……。落ち着いて、ください」

今にも駆け出そうとしていた私は身体を折って咳き込んでいたはずのユトにパシッと手を取られ、静かな声で引き止められて思わず跳びあがりそうになってしまった。
こんなときまで冷静だなんて、とんだ１８歳だ。でも死を目前に

本人に落ち着き払われても周りは黙って見ていられないものだよ、少年！

「う、うん、大丈夫、落ち着いてる、大丈夫、転んだりしないよ、大丈夫！　それより手を離して、すぐ解毒薬を買ってくるから、大丈夫だよ！　あああ、私ってばどうして解毒薬を一つしか用意してなかったんだろう頭が足りなさ過ぎるっ」

何回“大丈夫”を繰り返すんだか。大丈夫じゃないのが丸分かりだ。

とにかくユトに掴まれている手を引き抜こうとグイグイやっていたんだけど、でもユトは全然手を離してくれなくて、それどころか逆にグッと引き寄せられてしまった。

思いのほか強い力にたたらを踏んで倒れこみそうになった私は、ユトが腰掛けている椅子の背に慌てて空いた方の手をつく。

突然のことに息を飲みながら見下ろすと、ユトが紫水晶の瞳に薄っすらと涙を溜めてこちらを見上げていた。

思わずゴクリと喉が鳴ってしまったのは、ええと……、うん、誤魔化せないので正直に言います。

ちょっとお前、可愛すぎるだろ。

美少年の潤んだ瞳での上目遣いはベルゴルよりも毒だと思う。

おねぃ様は殺されそうです。主に出血多量で。

って、そんな変態臭いこと考えている場合じゃない！

「ユト、し、死なないでね……！」

思わずがっしりとユトの細い肩を掴む。

ちょっと痛そうに眉を顰める美少年もまた垂涎の（自主規制。

「死にません」

「――へ？」

物凄く端的に断言され、間抜けな声が出た。

ポカンと見下ろす私を余所に、ユトは相変わらず沈着冷静だ。

掴んでいた私の手をそっと離し、さらに椅子に覆い被さるようにしていた私の肩を優しく押して体勢を立て直させてくれた。

「一つお聞きしますが、この紅茶は普通の紅茶ですか？」

「えぁ？　うう、ううううん」

「……どっちです？」

「え？　ああ、うん、普通の紅茶だよ？　安物だけどね？」

毒で咽ていたはずのユトが思ったよりもしっかりと喋っているのに気が抜けて咄嗟に上手く返事が出来なかった。我ながら『ううううん』って……。そりゃ突っ込まれるわな。

でも気を取り直して質問に答えた。

商売は順調なので貧乏なわけじゃないけど、高級な茶葉は少し酸味が強くて好かないのだ。

この世界のお高い紅茶はローズヒップの濃いやつみたいな味で、舌が痺れちゃうんだよね。

「ストレート？　それとも何か入れました？」

畳み掛けるように聞かれ、首を傾げる。

やけに紅茶に拘るな。

毒の話はどこいった？

「ベルゴ――」
「それ以外で」

ぴしゃりと遮られて、ちょっとムッとした。
人の言葉をぶった切るのは失礼だぞ、少年。
そうは思いつつ、苦しい思いをさせてしまっただろうことを考えると強気に出られず。

「砂糖は入れたよ？　スプーンに４杯ほど。ユトは甘い方が好きでしょ？」
「――」

何故そこで黙る。
そして何故頬を染める。
美少年が恥らう姿はやっぱり色っぽいが。
いやいや、何を恥らっているのか、おねぃさんにはわからないんだけれども……。
今の若い子の感覚を理解できなくなっているんでしょうかね？
私ももう齢？

「――あの、何故それを……？」
「ん？」

またしても上目遣い攻撃。
誰かこの世界でもカメラを開発してくれないかなー。
今のユトは写真に収めたいほどの麗しさです。
とかなんとかぼうっと美少年を眺めていたら、もごもごと言い難そうにユトが口を開いた。

「俺が甘い方が好きだって……」

「ああ」

何だそんなことか。

「だっていつも実験後にパイとかクッキーとか出すと目が輝くし。食べてるときも幸せそうだし」

「……」

あ、頬がさらに赤くなった。……可愛いいなあ。

なるほど、要は男が甘い物好きなのは恥ずかしい、的な思考からの赤面ですか。と納得した。

私は気にしないのになあ。むしろ男の人でも甘い物は好きな方がいい。だって私がお菓子作るの好きだからさ。食べてくれないと悲しいじゃない？

「それよりユト、具合は悪くないの？　解毒薬はいらない……？」

顔を覗き込むと、居心地悪そうに俯いていたユトがハッと顔を上げた。

「あ、ええ。すみません、なんともないです。さっき咽たのは、紅茶があまりに苦くて……」

「苦い？」

「はい」

えー？

そんなはずないよね？

さっき言った通り、紅茶には砂糖を４杯も入れてあるし、ベルゴルの毒は無味無臭のはずだし……。

「今回の魔画は解毒ではなく毒除けと言っていたでしょう？　その所為だと思います。僕も聞いたときはどう毒を避けるのか疑問だったんですが、今のでわかりました」
「――あ、ああ！　そっか！」

ユトに言われて私も気づいた。
つまり、毒除けっていうのは解毒と違って、入って来た毒を中和するわけじゃなく、もとから毒を受け付けないようにするためのものなんだから、身体が毒に反応して排除しようという動きになったわけだ。
もとは無味無臭のベルゴルを舌に苦いと感じさせることで、咽て飲み込むのを防ぐという形で効果が現れたんじゃないだろうか。

「俺の予想ですが、苦いものにベルゴルを混入したなら甘く感じるか、あるいは辛く感じたりするんじゃないですか？　それか刺激を感じたり。もしかしたら悪臭を感じる可能性もありますね。そのあたりは試してみる必要がありそうですが、口に入れるものに合わせて変化するのではないかと」
「なるほど～」

魔画を描いた本人より、描かれた方が効力を把握しているという不思議。
まあ実際体験するのは魔画を施された方だから当たり前といえば当たり前なんだけれど。でも施す側が自分の描いたものの効力をきちんと理解していないのはやっぱりまずいよなあ、と頭の片隅で思う。
チートっぽいからといってあまりホイホイ新しい効果を生み出すのはやめた方がいいかもしれないな。特に、今回みたいに効力の現れ方をきちんと予測できないときは。

「魔画に失敗したわけじゃなくてよかった。ユトに何かあったらどうしようかと思ったよ」
「……大丈夫だと言ったでしょう」
「うん、そうなんだけど……」

命の危険はなかったようだけど文字通り苦い思いをさせてしまったわけだし。
申し訳ない思いは拭いきれず、私は甘党のユトのために今日のおやつを用意するためキッチンへ向かいながら答えた。
いくら冷静で大人っぽいユトとはいえ、まだ１８の少年なのには変わらない。
私がこの世界に来たときもユトくらいの歳だったけど、動揺のあまり大変だった。夜は何も考えていないのに涙が出たり、朝になって混乱がぶり返して物に当たることも何度かあった気がする。
生活に慣れるまでにも時間が掛かって、愛猫のシリンが居なければ今の私はなかったかもしれない。
２０歳を過ぎても親の元にいる子が多い現代の地球で育った私とは違ってユトはもっとずっとしっかりしているけど、でもだからって危険に晒すような行為は大人としては避けなくちゃいけなかったと思う。
今日は少し調子に乗ってしまったかもしれないな……。

そんなことを考えながら林檎のパイと新しい紅茶の準備をしてダイニングに戻ると、ユトがじっとこちらを見据えていたのに驚いて足が止まる。
妙に強い紫水晶の瞳に射抜かれ、思わず目が泳いでしまった。
髪以外は少しきつい印象を受ける美少年の顔で、さらに力強い視線を向けられるのは心臓に悪い。

「……約束ですから、貴女が何と言おうと俺はこれからもここに

来ますよ」
「……」

まいった。
この少年には私の考えることなんてお見通しらしい。先手を打たれて正直返答に困った。
これじゃあ魔画の実験はもう終わりにする、なんて言えないじゃない。
ユトは約束と言ったけど、出会ってから既に2年以上が経つし、私自身もうあのことは気にしてはいないんだけどなあ。
でもユトは真面目だから、まだ自分の中で自分を許せないのかもしれないね。
私は苦笑しつつ、止まっていた足を進めた。

「――ほら、今日はユトの好きな林檎パイだよ！　偶々だったけど、ベルゴル入り紅茶の口直しにはなるんじゃない？」
「……。いただきます」

座って座って、とテーブルの上を片付けながら言うと、私が曖昧に誤魔化したのを感じ取ったのかちょっとだけ眉を寄せたユトは、それでも素直にテーブルについた。
林檎のパイが甘いから紅茶の方の砂糖は控えたけど、今度はベルゴルなんて入れてないから、ちゃんと甘さはあるはずだ。
艶めく林檎パイを見て心なしかユトの周りの空気が華やいだのに内心笑いつつ、私も椅子に座ろうとしたとき、

――ガチャッ

突然居間の扉が開いた。

「――にゃぁん」

林檎パイにも負けないくらいの甘い声を発したのは、漆黒に艶めくベルベットの毛並みをした私の愛猫のシリンだ。こちらの世界に来てからずっと私を支えてくれた愛しい子。

シリンは尻尾をぴんと立てて、開いた扉の前からこちらを窺っていた。

だけど扉を開けたのはシリンじゃないだろう。

ちらりとシリンの脇を見ると、許可無く扉を開けただろう人物の足が見えた。

大きな黒い短靴とそこから続く足。でも膝から上に続くはずの身体は無い。

相変わらず、ホラーだな……。

好物を口に入れようとしていたユトもそれを目にし、彼の放つ空気がピリリと張り詰める。短靴を見据える紫水晶は先ほど私に向けていたものよりもずっと鋭く険を含んでいた。

「――何だ、またそんな小僧を招き入れているのか」

威圧的な声が短靴の方から放たれた。

◆異世界で刺青師？　中編（後書き）

謎の足、登場。
次話で謎の腰も登場予定。

◆異世界で刺青師？　後編

「仔猫は大人しく雛鳥とでも遊んでな。頭の方が重そうなヨタヨタ歩きの坊やが仔鹿を狩るのは不可能だ」

皮肉いっぱいの言葉をはなって二本の黒い膝下がカツンと一歩を踏み出した。

物凄く存在感のある膝下だ。何度見ても膝下しか見えないというのに、獣の王も真っ青な存在感。膝から上が消失しているホラーな見た目もお陰様でおどろおどろしさの欠片も無い。

ところでさっき“仔猫は仔鹿を狩れない”とか言ってたけど、猫は大人になっても仔鹿なんて狩れないよね？　そもそも獲物にする大きさじゃないし。

つまり一生無理って言ってない？

うわあ、なんという嫌味。しかも、もしかしなくても仔鹿って私？　勝手に獲物認定しないで欲しいんだけど。膝下の癖に。

「追い掛け回して跳びかかるだけが狩りだと思い込んでいる頭の足りない獣（けだもの）に言われたところで堪えませんね」

あからさまな挑発にも顔色一つ変えず冷静に皮肉で返すユト。……いや、皮肉を返している時点で冷静とは言えないのかな？　現に素早く椅子から立ち上がって膝下に向き合った様子を見ると対抗する気は満々のようだ。

一方私の口からは抑え切れない溜息が漏れる。

（あー……。とっても嫌な予感がしますよ、と……）

さっきまで林檎パイの甘い匂いと紅茶の香ばしい香りがほのぼのと漂っていたはずなのに、いまや殺伐とした空気が流れるダイニングは大変居心地が悪い。私が遠い目になってしまっても誰も文句は言うまい。腕の中に飛び込んで来たシリンのベルベットのような毛並みが唯一の癒しだ。

それにしても毎度繰り返されるこの遣り取りはどうにかならないものなのか。

鼻を付き合わせれば眉を吊り上げ、視界に入れただけで不快を露わにする二人はまさに犬猿の仲と言える。

どうにか鉢合わせしないように予定を調節していたっていうのに、臨時の訪問とか勘弁して欲しい。

うーん、とりあえず今はテーブルの上の林檎パイと紅茶を避難させるべきか。万が一にも乱闘とかになったら、せっかくの力作も台無しになる。糖分たっぷりのパイが床に落ちたら掃除するのも大変だ。

――あ、そういえば床に落とした解毒剤、片付けるの忘れてた。まあ日本と違って土足上等の家屋なので、二人とも小瓶の欠片を踏んだところで怪我なんてしないだろうから気にしなくてもいいか。

でも他の備品を壊したら一月出入り禁止にしようかな。さっきまで作業をしていたから大事な商売道具もあるし。うん、それがいい。そうしよう。

徒然と考えつつ現実逃避気味にシリンを撫でている間にも膝下が放つ空気は重くなり、ユトの視線の冷ややかさが増していく。

なんだか止めるタイミングを完全に逃した気がする。どうしよう。

迷っていると、短い睨み合いの後、ユトがサッと右手を払うようにして伸ばした。淡い紫の光を一瞬放ち、次の瞬間には何も無かったはずのユトの手には銀のサーベルのようなものが握られていた。

（相変わらず手品みたいだなあ。）

他人事のようにそう思った。

だけど実際は他人事なんかじゃなく、あれも私の作品――魔画（メヘンディ）によるものだったりして。

さっきユトに施していたのは毒除けという補助的な効力のある魔画だった。他にも身体能力を上げたり精神を強化したりすることが出来ると言ったけど、もう一つ仄めかしていた魔画の一番特殊と言える力が、“具現”だ。

対象者の身体に魔画を描くと、描かれた対象者は己の意思に従って描かれたモノを具現化することができるんだ。剣を描けば剣を自由に手にできるし、弓なら弓を、というようにね。

武器以外には楽器くらいしか仕事では描いたことがないけど、生き物以外ならある程度は何でも具現化できる。

ただし、描くときの溶液に工夫が必要なんだけどね。

それに、魔画の維持には描かれた当人の魔力を使うし、具現化にも維持以上の魔力が消費されたりするから、魔力量が少ない人には描けないという欠点がある。

でもこれ、そういう制限や欠点を補って余りあるほどすごく便利なんだ。

だって、見た目にはただの絵だから携帯する際の重みなんて無いし、質量もないから嵩張らない。つまり剣を腰に佩いて弓を担いで、懐には短剣を数本装備して……、なんて必要が全く無くなるのだ。

加えて、弓矢とか投擲武器なんかの消耗品でも、魔力が続く限りは数量制限無く具現化できるという……。

さらに言えば、魔画には魔法を補助する力を持たせることもできるし、その応用として、描いた武器なんかに属性効果を付与させた

りも出来てしまう。

つまり、かなり反則的な能力だったりするわけです。

反則的だからこそ、私はこれを表ではなく裏のお仕事として行なっていて、さらにお客様についても伝手を使ってかなり慎重に素性から性格まで細かく調べ、魔画を施した際に危険が無いか選ばせてもらっている。

ユトは実験台だけど、膝下は正当なお客様だ。

正当なお客様だから、どんなに尊大な態度をとっていても膝下は決して悪い人じゃない。何故かユトを目の仇にしているけど私には概ね優しいし。

「ハッ！　小賢しいこと考えるよりよっぽどマシだ。坊やのやり方は仔猫の皮でも被って寄ってきたところをガブリ、か？　そんな罠は今どきウリ坊でも掛からないだろうよ」

「その台詞は使える頭がある人が言えば格好もつきますが――。俺は自分を偽ったりしませんし、そんな浅慮な罠など張るつもりもありませんね」

――と、意識が飛んでいるうちに目の前の二人はさらに険悪なムードになっていた。

（あれー？　窓から燦々と日光が入り込んでいるはずなのに、室内が寒く感じるんだけどー？）

ユトが牽制するようにサーベルを突き出して、それを目にした膝下が鼻で笑ったのがわかった。

……いや目も鼻も無いけどね。

物凄く馬鹿にしたような笑い方だったにも関わらず眉一つ動かさ

ないユトは流石というかなんというか。
最近の１８歳は落ち着いてるなー、なんて感心している私の内心には気づかず、ユトはさらに硬く冷ややかな声を膝下にぶつける。
「そもそも不当な侵入ですよね。許可されている裏口までならまだしも、こんな奥まで入り込むなど常識を疑います。衛士にでも突き出しましょうか」
「常識ねぇ。――裏口以外も許されてるなら文句は無いのか？」
「……何ですって？」
あ。ユトの周りにゆらりと薄紫の陽炎が……。
一歩踏み込むユトと、まるで身構えるように踵を上げる膝下。
一触即発の雰囲気にいい加減止めるべきかと口を開いたとき、開け放たれたままの扉から甘やかな声が割って入った。
「あらぁ、これって修羅場ってやつぅ？」
「……」
「……」
「……」
あまりにも間延びした声に、見事にユトと膝下の動きが固まった。ついでに私も発しようと思っていた言葉を飲み込む。ごっくん。
開け放したままだった扉の方に視線を投げると、そこには流線を描く何とも悩ましい……“腰”が。
うん、どう見ても腰だ。腰から上が無い。
下半身だけでも妖艶さを放ち、男でなくとも撫で回したくなるような美しい曲線を惜しげも無く晒すタイトなスカート。
世の全ての男を誘惑する魅惑の腰から、甘く耳を震わす艶声が零れる。

「どうでもいいけどぉ、ホノちゃんの大事なお家を壊すようならぁ、うちのイガイガちゃんに叩き出してもらうわよぉ？」

語尾を延ばす独特の喋り方はともすれば苛立ちが募りそうなのに、ほんのりと掠れてハスキーさもある声では甘みが緩和されて後味の悪さがない。不思議だ。

だけど間延びした口調でドスを聞かせるというのはさらに不思議。どうやっているんだろう？

首を傾げつつふといがみ合っていたはずの二人を見ると、ユトはいつのまにかサーベルを仕舞っていたし、膝下は……太腿の半分辺りまで成長していた。

いやうん、成長とはいえないんだけどさ、見た目的には成長だよね。

あ、ちなみにやっと出てきた私の名前は五十鈴（いすず）　仄香（ほのか）です。大体２４歳くらいになった気がします。いや歴が多少地球と違うもので、正確にはわからないんだよね。

……それより、そろそろ傍観しているだけじゃ駄目かな。何せココ、私の家だし。訪問者の態度がでかすぎるけど。

「ディーファさん、いらっしゃい。件のイガルガさんはいらっしゃらないんですか？」

「ん～？　いるわよぉ、――ほら」

魅惑の腰――鳩尾あたりまで成長した――の持ち主、ディーファさんがスッと横に退けると、頭を屈めながら岩かと思うほど大きな男性が一人、扉を潜ってダイニングへと入って来た。彼はきちんと全身がある。お陰で圧迫感がすごいけど、私にはシリンを除いたら一番の癒し系。垂れ目で笑うと目尻にくしゃっと皺が寄るんだよ、

可愛いよね。

「邪魔をする、ホノカ」

「うん、いらっしゃい。とりあえず、みんな席についてゆっくりして」

急激に人口密度が増したダイニングで、どうにか収拾をつけるべく、私は人数分の紅茶と二人分の特殊な薬湯を用意しにキッチンへ向かった。

◆異世界で刺青師？　後編　の続き（前書き）

とりあえず、黒い膝下と魅惑の腰の正体を。

◆異世界で刺青師？　後編　の続き

「何度見ても不思議な光景だな」

岩のような身体を縮めて同じテーブルについているイガルガさんが、薬湯のお陰で急速に術の解け始めた黒い膝下と魅惑の腰の両者を眺めながら呟いた。

「本当ですね。姿が完全に消えているときもそうですが、戻るときは一段と。まるで何もないところに人が描き出されていくようだ……」

ユトもまた、目の前の現象を見つめながら感嘆するように零す。私は苦笑しながら頷いた。

自分が施した術とはいえ、確かに不思議な光景だ。

術が自然と解ける分にはじんわりとした変化なんだけど、薬湯によって強制的に解除された場合は透明だった部分がスルスルと成長していくように見えるというか、まさに宙に描かれていくような感じなんだ。

もしくは、白い紙を何枚か重ねて一番上にだけ文字を書いたとき、その下の何も書かれていない紙にも筆圧で凹凸が出来ていて、鉛筆で優しく擦ると文字が浮かび上がってくる、ってあるじゃない？それにも似ているかも。

とにかくこんな現象は、元の世界では到底現実には有り得ないものだった。

「見ている方も不思議かもしれないけどぉ、本人だって不思議なのよぉ？　あるはずの自分の身体がなぁんにも見えないんだものぉ」

術が完全に解け、口元に指先を添えながらくすくすと上品に笑うディーファさんの華やぐような美貌がお目見えし、思わず見惚れてしまう。

今日のディーファさんは、濃紺のタイトなドレスの上に値段を想像できない上質な毛皮のジャケットを品よく着こなしている。

波打つ髪は薄い金で、その輝きは身につけるいくつもの宝石よりもずっと彼女の魅力を引き出していると思う。

白磁の肌が濃紺のドレスに映え、赤い唇が官能的に弧を描く。垂れ気味の目尻には右だけ黒子が一つ。でもあれは偽黒子だ。セックスアピールを上げるための化粧の一つ。

その目的は大いに発揮され、旦那のイガルガさんはいつも「せめて黒子を描かないでくれ」と懇願しているらしい。“せめて”というのは、身体のラインが露わになる衣装を選びがちなことを見逃す変わりに、という意味なんだけど、今のところディーファさんはどちらも我が道をいっている。つまり、やめる気はないらしい。

……似合ってるからいいんじゃないかな？

私が見惚れている間に、美貌のディーファさんはアップルパイに手を伸ばしていた。一口サイズに切ったパイを一口食べ、ふにゃりと笑う。

「う～ん、やっぱりホノちゃんのパイは口直し以上の味ぃ」

妖艶な姿とは裏腹にパイを口にしたディーファさんの笑顔は子供みたいで可愛い。さりげなく薬湯が不味かったと言われた気もするけど、手作りのパイを褒められたので許しちゃう。薬湯の不味さは仕方ないんだ。うん。諸事情により。

私はディーファさんにお礼を言って、新しく紅茶を入れてあげた。

「ホノカ、俺にもくれ」

ディーファさんの前にカップを置いた途端、横合いから声が飛んできた。すっごい態度がデカイ。

こいつ何様、と思ったところで、先に反応したのはユトだった。

「貴方って人は、それが人にものを頼む態度ですか？　せめて言葉遣いを――」

「黙れ仔猫」

「……」

「もうっ、ソルディス！」

またしても剣呑とした空気が流れかけたのを慌てて止める。パイの甘い香りが漂う中でギスギスした空気を作るのはやめてもらいたい。

寄ると触ると喧嘩になるのはどうしてなの？　年齢は明らかにソルの方が上なんだから、もっとユトに大人な態度をとってくれればいいのに！

「はい、紅茶」

差し出すと、ソルはユトを一瞥して鼻を鳴らしてから紅茶を受け取った。だから無駄に挑発するなっていうのに。

ソルはユトが片眉を跳ね上げたのも気にせず、優雅にカップを持ち上げる。口元で一度止め、香りを楽しんでから静かに透き通る赤を口に含んだ。

その仕種だけ見ていれば、ソルはユトへの不遜な態度が嘘みたいに気品を湛えて見える。一見、どこかの貴族のご子息だと思ってしまっても不思議じゃないかもしれない。

ただ、伏目がちだった視線を上げればその瞳があまりに物騒過ぎて、誰も貴族とは思わないだろうけどね。
いくら社交界に揉まれても、あんな鋭い瞳なんて出来ないと思う。あれは完全に、生死の境を何度となく垣間見た人だけが持ち得る瞳だ。
実際、ソルの通り名は“寡黙で冷厳な傭兵王”だったりする。……寡黙で冷厳？
私が始めてその噂というか二つ名というかを聞いたときは、「は？　誰それ？」と思ったものだ。……いや、思い返せば彼も初めて会ったときは確かに寡黙で厳しい雰囲気を持っていた……かな？
でも早々に口数は増えたしユトには大人気ない態度をとるしで、ソルが纏っていたはずの冷厳な鎧なんて影も形もなくなってしまったんだからこちらも早々に彼への印象は大人気ない男前に書き換えられたというわけだ。
ただ、そう、男前なのは確か。顔も、身体もね。
なんかすごく変な言い方をしたけど、どちらも本当だから仕方が無い。

漆黒と呼ぶに相応しい黒髪は艶やかで、意思の強そうな眉はキリッと眉尻が上がっている。青の瞳は珊瑚の海を思わせるほど鮮やかに透き通り、纏う黒の中で際立った美しさを放つ。
鼻筋だって当然のように通っているし、褐色の肌より少しだけ色づいた唇は薄く男らしくて、どれも完璧な配置で顔を飾っている。
ユトが幼さを残した中性的な美貌だとすれば、ソルは間違いなく男性的な美だ。
背だって１９０ｃｍはあろうかという長身で、職業柄、身体は鍛え抜かれている。贅肉なんてもっての外だし、機動性の問題なのか無駄な筋肉だって一切ない。
魔画を描くために見たソルの身体は惚れ惚れするほど芸術的だった。思わず撫でさすってしまったのは思い出したくない恥かしシー

ンだったなあ。うん。
ソルは傭兵として戦地に立ったり、魔物の討伐に長期間出ることもあるみたいだけど、そういうときの、なんていうか、埃っぽさ？　汗と土ぼこりに塗れた荒れた感じっていうの？　それが付加されると、途端に野性味が増してエロス大放出だから大変だ。主に女性たちが。
一度だけ仕事帰り直後のソルに会ったことがあったけど、正直あれは暴力的なエロさだった。
歩く１８禁？　甘い甘い！　軽く２０禁だったね、あれは！　素で「本当は子供何人いるの？」って聞いちゃったしね、私。即答で「いない！」って怒鳴られたけど、本当の本当はいるんじゃないかと私は今でも疑っているよ。いつか白状しないかなあ……、って話が逸れた！

とにかく、黙っていれば元の端整な顔立ちと洗練された仕種のお陰で魅力的な大人の男に見えるのに、ユトを前にすると途端に俺様不遜大王になるから困ったものだ。

「――それで？　えっと、ディーファさんは新しいご注文かな？」

一通り空気やら何やらが落ち着いたところで、私は切り出した。話を振られたディーファさんは頷き、パイのお皿を端へ押しやって正面のスペースを空けた。

「ええそうなのぉ」

一瞬、商売関係の話をユトやソルも同席しているこの場でするのはどうかと思ったけど、ディーファさんと私との商談に彼らは全く無関係なことと、限りなく信頼のおける人たちであることを考えて隠す必要はないと判断した。たぶんディーファさんも同じで、遠慮

なくテーブルに持参したものを広げていく。

「これが今回のデザイン画よぉ」

◆異世界で刺青師？　後編　の続き（後書き）

続きは未定です。

◇助けた豹に殺されて？　前編　（迷い込み？）（前書き）

【キーワード】

異世界・迷い込み？・召喚？・獣人・黒豹・シリアスダーク

※今回、時間が細かく前後します。読みにくいと思いますが、短く纏めるためなのでご了承くだされば幸いです。

◇助けた豹に殺されて？　前編　（迷い込み？）

気がつけば見知らぬ場所に居ました――などというのは、架空の物語の中だけで起こる現象だろう。

そう仁子（じんこ）は高をくくっていた。

たとえ別の世界があったとしても、自分が関わることは絶対にないだろうとも。

仁子は見知らぬトンネルを揚々（ようよう）と潜るような好奇心など持ち合わせていないし、召喚の対象になるほど何かに優れているわけでもないと自分で理解している。

初めて会った人間に強気を返せるような度胸はなく、奇妙な思考回路だってしていないはずだから誰かに特別興味を持たれるようなことも期待できない。

転生先まで記憶を継続させてもらえるような不幸や徳は積んでいないし、特殊な力を与えられたところで上手く使いこなせる器用さも頭の良さもない。

つまり仁子は、大よそ誰かの意思によって異世界へと飛ばされることなど考えられない種類の人間だった。

（でも、偶然にしては出来すぎてるよね……）

仁子は抱えていた箱と目の前に倒れ伏す獣を交互に見ながら、冷たいものが背を流れていくのを感じた。

◇◇◇

とある日のとある時間。

仁子は気がつくと見知らぬ場所に居た。

緻密な魔方陣が描かれた召喚部屋ではなく、まして深淵なる森の中や冷厳な泉の畔でもない。周囲には魔術師も騎士も王様も存在せず、ただ一人、そこに立っていた。

戦場の真っ只中、なんて恐ろしい事態でもなかったのは幸いだが、ある意味これには近い光景だったかもしれない。

――仁子の目に飛び込んで来たのは、大きな災厄が通り過ぎた後のような光景だった。

偏頭痛持ちの仁子が自宅の薬箱を引っ張り出し、立ち上がったところで痛みが増して。その痛みを誤魔化すために片手の中指と親指でこめかみを揉み解し、あまり効果がないなと溜息をついて手を外したときだ。

今の今まで室内に居たはずなのに、視界をほんの僅か手で遮っていた間に仁子の周囲は一変していた。

頬をささやかな風が撫でていき、青い草の香りと土の香り、それから微かな焦げ臭さも感じたような気がする。

感じるはずのないものを感じて、仁子は怪訝に眉を寄せながら瞬く。

辺りを見回した次の瞬間、視界に広がった見るも無惨な家屋たちに、仁子は息を止めた。

ともすればテレビや教科書で見た戦争の跡地よりも何処か生々しさのある崩れ方をした家々が、三百六十度、仁子の周りに残されている。

まるで吹き飛ばされたと言わんばかりに屋根のないものもあれば、

焼け落ち煤けて惨たらしいものもある。家の原型を残すものもいくつかあったが、それも壁が崩れ、あるいは見たこともない大岩が突き刺さっていたりするのだ。

土砂が流れ込んだなんていう気配はないのに、大岩などというものがどうやって家を襲ったのか。仁子には皆目見当がつかない。

だが、大岩よりも現実的に恐怖を感じたのは矢が無数に突き刺さっている家だった。窓ガラスは跡形も無く枠だけが残っていたから、そこから壁に刺さっているのと同じだけの矢が降り注いだのだろうと思うと、知らず仁子の身体に震えが走った。

それらの光景を見たとき、仁子はこの場所が自分の住んでいた町ではないことを直ぐに理解した。何せ、崩れた家々は完全な木造だったのだ。

外壁は木の色そのままで、崩れた壁の中から断熱材が覗いていることもない。現代の建築技術で建てられたとは思えない家屋たち。

温か味はあるが少し心許無くもある家屋が、見渡す限り破壊しつくされていた。

明らかに襲撃を受けたと思われる廃村のただ中で立ち尽くすしかなかった仁子が暫くしてふらりと足を踏み出したのは、なにも状況を把握しようなどと冷静に思ったからではない。混乱し何も考えられないまま、何かに背中を押されるようにして機械的に足を動かしただけだ。

頼りないスリッパで瓦礫を跨ぎながら、いくつかの家ともつかぬ家を回った。

辛うじて形状を残す家屋の中はしかし、外観よりも酷い有様だった。

見るに耐えない惨状を呆然と見て回り、何件目かで見つけたのが漆黒の大きな獣だった。

仁子の目の前に倒れ伏した獣は、何故が人間のように下半身にズボンを履いていた。

他よりも数段ましな形状を保っていた家の中、生き物の息遣いを耳にした仁子が引き寄せられるようにして見つけた獣は全身を漆黒の毛に覆われ、顔は猫科の猛獣――豹のそれにしか見えない。なのに、身体つきはヒトのものに近く、投げ出された腕の先の手指もまた、全て毛に覆われてはいるがヒトのように五本が揃っている。

明らかに仁子の知るどの動物にも当てはまらない生き物。

仁子の頭には“異世界”だとか“召喚”だとか、“トリップ”、“迷い込み”などという言葉がチカチカと浮かんでは消えていった。

（――っありえない！）

浮かんだ単語の全てを否定してみても、現実は消えてくれない。

「――グルゥ……」

急激に不安が押し寄せ、じり、と仁子が後ずさったとき、まるで呼び止めるように獣が低く喉を鳴らした。

それは小さな呻きだったが、他に生き物の気配を感じない廃墟の中にあっては仁子の意識を引き付けるに十分だった。

逃げ腰ながらよく見れば、獣の下には赤が滲んでいる。漆黒の毛は所々だまになり、口は半開きで苦しそうに短く息をついでいる。口には肉食獣特有の鋭い牙が並んではいるが、あまりに苦しげな呼吸では恐ろしさを覚えることもできなかった。

（……）

仁子は抱えていた薬箱を見た。それはどこの家庭にもあるだろう普通の救急箱だ。
そういえば偏頭痛はなりを潜めている。
仁子は再び息絶え絶えな黒い獣に目を向けた。

（――これで助けろ、ってことっ？）

背をひんやりとした感触が撫でていく。
仁子は獣の荒い呼吸音を聞きながら、自分がこんなおかしな場所に放り出された理由をまざまざと突きつけられたように感じた。
自分と獣しか生き物の気配を感じない廃墟の中、仁子は薬箱を手にしていて、目の前には怪我をした獣がいる。
これをただの偶然と思うほどには、仁子は浅い思考をしていなかった。

（でもこんな救急箱で……）

仁子の母親は心配性――もとい、用心深い人であったため、もしかしたら普通の家庭よりはある程度のものが揃っているかもしれないが、弱りきった獣を回復させるまでには至らないのではないかと思う。
そもそも、人に使う薬を獣に使用していいものか……。

「グ……ゥ……ッ」
「！」

動揺のまま視線を彷徨わせていた仁子は、しかし獣の苦しげな呻き声を再度耳にし、目の前がパチンと弾けたような気がした。

医療の知識はなく、助けられる命を助けずにどうする、などという奇麗なことも言えない。それでも無視して逃げ出したことの罪悪感を抱えて生きていけるほど、仁子は強くもない。それだけだった。

◇◇◇

「グルァア――ッ」
「――ッ！」

獣の動きはほとんど見えなかった。
仁子は声も出せず、何の反応も出来ず、気がつけば黒い獣に押し倒され、首元にずぶりと鋭利な牙が沈むのを感じていた。

（なんで……）

ゆっくりと視線だけを下げる。鼻筋に深い皺を刻んだ凶悪な黒豹の顔が見えた。
威嚇のための恐ろしい形相だというのに、黒豹からどこか戸惑いを感じたのは仁子の願望だろうか。

（助けたのに……）

瀕死のように見えたときから獲物に跳びかかれるまでに回復したことを喜ぶべきだろうか。
医療知識もなく、大した道具もなく、機転も利くとは言えない仁子にしてはよくやったじゃないかと自分を褒めるべきだろうか。
仁子は考え、どちらも相応しくないと思った。
助けた命に自分の命を奪われるという笑えない状況が、なんだか

おかしくて堪らない。
獣の回復によって自分のこの世界での存在価値が失われた。そういう意味だろうかとぼんやりと思った。

ただ、仁子が助けた、そして今仁子を殺そうとしている目の前の獣の瞳は、こんな状況にありながらとても奇麗だと、仁子は何故か感心していた。
治療中ずっと閉じられていた瞳は、夕焼けの赤と宵口の青が入り混じる鮮やかな赤紫で。
ほんの短い間にしか見られない、どこか寂寥感を漂わせる不思議な色合いをしていた。
それを確認した直後、仁子の意識はふっつりと途絶えて夜より深い闇へ沈んでいった。

◇助けた豹に殺されて？　前編　（迷い込み？）（後書き）

以前、拍手で頂いたリクエストを参考に練ってみた作品です。
『刺青師？』ではリクエストに色々私の好きなテイストを加えさせて頂いたんですが、今回はリクエストの要素中心に＾＾
リクエストの内容は“トリップ獣人もの”で“ガチモロ顔が獣”“身体は人っぽく”。
それと、シチュエーションで“最初は嫌われてたり敬遠されてる主人公ｏｒヒーロー”というのも合わせて頂いていたので、合体させてみました＾＾

最初はかなり甘さ控えめですが、最終段階はハッピーエンド予定の作品です。
リクエストくださった方、ありがとう御座います！

◇助けた豹に殺されて？　中編

「傷が癒えたらデルフォスの近くまで連れて行ってやる」

意識が浮上した直後、頭上から無造作に放られるような声が降ってきた。

まだ頭が働かない状態で掛けられた言葉はあまりに唐突で、仁子は何を言われたか理解できず、緩慢に瞬きを繰り返しながら耳に飛び込んできた言葉をなぞる。

（――傷？　デルフォス？　……何？）

そもそもここは何処だっけ。

ぼんやりと考えながら、組まれた木が剥き出しのままの天井を眺めた。

仁子の家の天井は白い壁紙が貼られた平らな天井だ。内側がどうなっているかは見たことがないが、少なくとも見上げたときに見えるのは木材ではない。当然、いま目にしているものは仁子の家の天井ではないとすぐにわかった。

見たことのない組み方をされた木のさらに奥から、幾筋かの光が洩れ差しているのが見える。どうやら穴が開いているらしい。薄暗い室内に差し込む光は奇麗だったが、天井にあれほどたくさん穴があっては雨を凌げないのでは――。

そこまで考えて、仁子はハッとした。

（そうだ、わたし……！）

「――ッ！！」

慌てて身体を起こそうとした瞬間、目の前が真っ赤に染まった。
実際に赤く染められたわけではないが、それほどの衝撃的な痛みが仁子の首筋に走ったのだ。
勢いで僅かに浮かせた体も再び固い床へと倒すことになった。
仁子が十六年間生きてきた中でも経験したことのない強烈なその痛みは、全身に寒気を駆け巡らせ、視界に無数の星を散らせるほどだった。
痛みを堪えるために固く閉じた仁子の瞼裏に、意識を失う直前に見た力強い漆黒と、そして妖しく美しい紫苑が鮮やかに閃く。
仁子は首の痛みの原因を思い出した。

（痛い……けど生きてる！）

指先まで痺れさせるほどの痛みは、しかし確かに仁子は生きているのだと、嫌と言うほど教えてくれていた。

やがて痛みが引き、浅く小さく呼吸が出来るまでになると、仁子はようやく薄っすらと瞼を開いた。
霞む視界の端に黒く大きな影が映っているのに気づき、ゆっくりと視線だけを動かす。痛みは引いても、身体は疲労していて動かせないのだ。
視線が辿り着いた先、捕らえた影の正体を知って、仁子は息を飲んだ。

（く、黒い豹……っ！）

そこには仁子が助け、そしてあろうことかその仁子に向かい襲い掛かってきた黒豹が立っていた。
黒い革のブーツに薄汚れた榛色（はしばみいろ）のズボンを穿き、上半身は裸だが、仁子が苦労して巻いた包帯が豊かな漆黒の毛に埋もれるようにして見えている。太い腕と厚い胸板は、しなやかさを失わないまま屈強さを備えているように思える。
仁子の脇に仁王立ち、眼光鋭く睨み下ろす姿には臥していたときの弱弱しさはなく、漆黒の身体からはゆらりと覇気のような何かが立ち上っているように見えた。
憎憎しげに口元を歪め、剣呑な紫苑の瞳を眇める凶悪な黒豹の顔に仁子は肩を震わせた。
何故これほど敵意をむき出しにされているのかわからない。仁子は黒豹を助けたのであって、恨みを買うようなことは一切していないというのに。

「……――く――、――しい――」

再び噛み付かれるのではないかと恐れ震える仁子を見下ろしながら、黒豹が何かを呟いたのが聞こえた。
何を言ったのか、痛みの余韻でまだ朦朧としていた仁子には、口の中で転がすような小さな音を正確に拾うことはできない。
逃げ出したいのに動かない身体をもどかしく感じながら仁子が怯えていると、黒豹が紫苑の瞳をさらに細めて口を開いた。
今度は仁子にもしっかりと聞き取れるほどの明瞭な、しかしどこまでも平坦な声だった。

「――急所は外した。命に問題は無いが傷は深い。首を無理に動かせば痛むのも当然。声も暫くは出せないだろう」
「……」

機械的に現状を説明する。そこには助けた仁子に対する感謝の念は、一切含まれていない。それどころか黒豹は、仁子をまるで不快なものを見るように睨み下ろしていた。
瞳に宿る敵意に痛みを知る仁子の身体が慄く。
悲鳴を上げずに済んでいるのは、黒豹の声が冷静な響きを持っているのと、何より首の痛みが声を封じていたからだ。
仁子の怯えを感じ取っても、黒豹は一向に睨み下ろす視線の剣呑さを取り去ろうとはしない。紫苑の瞳に仁子への配慮も謝意も一欠けらも浮かんでいないようだった。

「殺そうとしたがやめた。手当ても施した」
「……」

だから何だろう。

仁子は怯えながら黒い豹を見上げる。
不遜なまでの紫苑の瞳はまるで、殺そうとしたことは手当てをしたことで相殺だ、とでも言いたげだった。

「人間であるお前が何を考えて俺を助けたのか知らないし知りたくも無い。礼など言うつもりもない」

断言されてしまった。
同時に、仁子が心の片隅で思っていた“この黒豹は仁子が恩人だと気づいていないのでは？”という甘い考えが打ち砕かれたことを知る。
彼は仁子が自分の手当てをしたことを知っていて、それでも感謝はしないと言っているのだ。
言葉だけでなく、態度にもそれははっきりと表れている。

仁子の傷は黒豹がつけたものだが、彼女は布切れを掻き集めて敷いただけの硬い床の上に無造作に寝かされ、黒豹はしゃがむわけでもなく立ったまま腕組みをして仁子を見下ろしているのだ。ともすれば、そのまま足で踏み潰されそうな気さえする。

手当てをしているときは見返りなど求めていなかったが、ここまで適当に……、というよりも薄っすら殺意さえ見せて対応されると、仁子の内心は複雑だった。

感謝されこそすれ、何故命まで脅かされる事態になっているのか、理解できない。

しかし、首の痛みと黒豹が放つ威圧感の所為で文句の一つも言えなかった。

ひたすら萎縮し混乱しながら仁子が黙っていると、仁子の目を射抜くように睨んでいた紫苑の瞳が僅かにズレて、また直ぐに仁子の目へと戻ってきた。

何の動きだろうと仁子が疑問に思う前に黒豹が再び口を開く。

「どうやって辿り着いたか知らないがこの辺りは人間の生きられるような場所ではない。デルフォスの付近までは連れて行ってやる」

「……」

声を出せない仁子はただ無言で黒豹の言葉を聞きながら、彼の言わんとしていることを必死で考えた。

手当てのお礼云々の話をした直後に、恩着せがましくデルフォスとかいう場所まで連れて行くと言う。

（つまり、助けたお礼は言わないけど、その替わりにヒトの住める街まで送るってこと……？）

そう考えると、目の前の凶悪な黒豹が少し前に流行ったツンデレというやつのように思えたが、ツンデレと言うには紫苑の瞳に映る

剣呑さが本気すぎる。
仁子が戸惑いに視線を彷徨わせていると、その様子を見て黒豹は盛大に鼻を鳴らし、くるりと踵を返して長い尻尾を揺らしながら破壊された扉の奥に消えていった。

◇助けた豹に殺されて？　中編（後書き）

うまく纏まらず、更新が遅れました。
後編では少し和やかなシーンを入れたいと思います。

◇助けた豹に殺されて？　後編（前書き）

……和……やか？　ｏｒｚ

◇助けた豹に殺されて？　後編

仁子が起き上がれない間、黒豹は淡々と世話をしてくれた。
親切だとか丁寧だとかはお世辞にも言えないが、目覚めた直後のようなありありとした敵意を引っ込めてくれたことは精神的に助かった。
少し身体を動かすだけで首の傷が痛んだ数日間、仁子を何よりも苦しめたのは手水へ行くことだ。
まさかその場でしてしまうわけにもいかず、どうしても動かなければならないのに身体は傷に障るため自由に動かせない。必然的に黒豹に移動させてもらうしかないのだが、目的を濁しつつ身振りで伝えるだけでも羞恥を誘う上、用を足したあとを見計らったように現れた黒豹に抱えられるのは最大級に恥ずかしかった。
羞恥に頬を染める仁子を見て温度の無い紫苑の瞳を向ける彼の態度はさらに仁子を打ちのめしはしたが、それもあと少しの間だけのことだと仁子は己を励まして過ごすしかなかった。
途中からはどんなに傷が痛んでも我慢し、なんとか自力で外へ出ることに成功した。初めて一人で手水に行けたとき仁子は心の中で自分を盛大に褒めたのだが、傷の痛みと極度の貧血を乗り越えるほどの仁子の乙女としての意地を、誰も笑うことはできまい。
それからは黒豹が汲んできた水も思う存分飲めるようになったし、傷の所為で固形物を飲みこめないために水分たっぷりの流動食を与えられていたが、それも躊躇無く食べられるようになった。
そんなわけで、これならば傷の治りも早まるかもしれない、と仁子は一人浮かれていたのだ。
ところが、彼女の必死の努力は別のところでも影響があったらしい。

黒豹が廃村からの移動を告げたのである。
投げやりに黒豹が放った言葉によれば、廃村に長く滞在するのは危険、とのことらしい。
何故危険なのかの説明はなく、危険だという事実だけを伝えた黒豹は有無を言わせず仁子を抱えて移動を始めた。
悲鳴も上げられない仁子は心の中でどれほど黒豹を罵ったか知れない。仁子が必死に無理だと手を振っても見ぬ振りを貫いたのは黒豹なのだから、仁子の呪詛も当然と言える。
とにかく、仁子が我慢を重ねて乙女の意地のために身体を動かしたことは、黒豹にとって“動けるほど回復した”という認識となったらしく、いまだ安静が必要な仁子にとっては苦痛な行軍を強いられることとなった。

◇◇◇

もと居た廃村から時間を掛けて移動すること数日、深い森を一つ抜けた先にあった古屋で、二人は一度腰を落ち着けることになった。
そこへ辿り着いたとき、仁子は思わず『また崩れかけだ……』と心の中で呟いてしまった。
この世界へ来てから、まともな建物を見ていない。
初めに黒豹が言っていたデルフォスというところは話の流れからしてヒトの住める場所だと思うのだが、仁子の心にはどうしても不安が過ぎる。
ここがどんな世界なのか、どういう生活水準なのか、どんな人たちが生活しているのか。そうした基本的な情報すら、声が出せない間は黒豹に尋ねることが難しい。こうした抽象的な質問は、身振りで伝えることに難を要するからだ。
ただし、声が出せたとしても黒豹が質問に答えてくれたかどうか

は怪しいものである。何せ、名前を尋ねただけで「名乗る必要などない」と悪し様に拒否されてしまったのだ。
いま仁子が持つこの世界の印象と言えば、人語を操る知性を持ちながら助けた相手に感謝するどころか襲い掛かってくるほど危険な生き物がいて、ヒトが生活していたと思われる村一つが丸ごと容赦なく破壊される可能性のある危険な世界だ、ということだけ。
この世界は、日本に数ある物語の世界のようには仁子に優しくない。
その事実は、一層仁子の心を憂鬱に染めていった。

しかし、古屋へ辿り着いて数日、少しだけ変化したことがある。
仁子の気持ちだ。

初め仁子は黒豹をひたすら恐れていた。
世話はしてくれるが、喉笛を噛み切られそうになった恐怖の記憶は新しく、残る痛みが黒豹への警戒を常に促す。
黒豹の命を助けた恩人である、という事実は全く何の拠り所にもならないということも思い知らされている。
優位に立てる立場のはずが、仁子は非力でいつ殺されてもおかしくない状態だった。
けれど仁子がある程度動けるようになったある日、これまでの黒豹の手間に対する礼として仁子がスープを作ったときのこと。
日本で母の手伝いをしていたときの少ない経験を頼りに、仁子なりに頑張って作ったスープを黒豹は仁子の目の前で、怒りに任せて薙ぎ倒した。
もとから奇麗とは言い難かった古屋の中、盛大に熱いスープが飛び散り、具材の一部は仁子の足に掛かった。
同時に黒豹から掛けられたのは、「貴重な材料を全て使うとは愚かな！」という非難のこもった怒声だった。

続けて「動けるようになって直ぐに食いものを作るとは、それほど俺の飯が嫌だったか」とか「餌付けでもしているつもりか」だとか「獣はヒトの管理の下にあれという意思表示か」だとか……。
仁子には到底理解できない部分で黒豹は激怒しているようだったが、そのほとんどを仁子は聞いていなかった。
雷雨のように降り注ぐ怒声を浴びながら、仁子は薙ぎ倒され無惨に散ったスープを眺めていた。
ぶちまけられ、ぐちゃぐちゃになったのは、スープではなく仁子の心だと思った。
足に掛かった具材の熱さが、じわじわと仁子の足から這い上がり、やがて脳まで到達したとき、仁子の中で何かがふつりと切れる音がした。

大人しい人間ほどキレると怖いという。
仁子もその性質だったらしい。
黒豹が仁子に浴びせた雷雨に暴風を足し、さらに熱を加えたように仁子は暴れた。出せないはずの声を振り絞り、泣き叫び、手近な物を手当たり次第に投げ、そうして朽ち掛けた古屋の中がスープより悲惨な状態に様変わりするほど当り散らした。
黒豹に対しても色々言った気がするが、仁子はそのほとんどを覚えていない。
次に気がついたとき、仁子は古屋の片隅で寝かされていた。
古屋の中を見渡せば、多少荒れた感じは残っていたが、薙ぎ倒されたはずのスープの残骸は奇麗に片付けられていたし、仁子が投げたり叩きつけたりして壊れた椅子の木片なども姿を消していた。
そして、どこかから戻ってきたらしい黒豹は何故か沈黙を守り、今までにない丁寧な手つきで悪化した仁子の喉の傷の手当てをしてくれた。
一体なんの風の吹き回しなのか。

これまでの常に不遜で機嫌の最悪だった黒豹はどこへ行ったのか。
仁子は戸惑い、そして焦った。
さらに、スープで火傷した足も含め、いつのまにか仁子の身体はそこら中傷だらけになっていたのだが、黒豹がそれらの様子も余すことなく診てくれたことには戸惑いを通り越して恐怖すらした。
言葉こそ一言も喋らず、また仁子を無駄に威圧する覇気も完全には消えていなかったが、それでも黒豹の態度は数段軟化しているのは間違いない。
そんな黒豹の様子を見て、初めこそ大暴れした後ろめたさと置いていかれるのではないかという思いで戦々恐々としていた仁子も、二日経ち、三日経つ頃には何かが吹っ切れた。

そもそも、自分は何も悪くない。
助けたのに敵意を向けられる謂われはないし、下手(したて)に出なければいけない理由もない。
スープの具に食材を全て使ってしまったのは悪かったが、料理をしたのは仁子なりの気遣いだ。少しでも打ち解けられはしないかという下心があったのも認める。しかしそれでも非難されるには値しないはず。
首の怪我の原因は黒豹自身にあるにもかかわらず、仁子は世話をしてくれたことへの感謝を示したのだ。恩知らずな獣よりもずっと偉いじゃないか。

そう、仁子は心の内で不満を吐き出し、開き直ったのだ。

大暴れにより再び寝込むことになった仁子だが、再び動けるようになってからはただ怯えるだけの自分を捨てた。黒豹に対する警戒心は完全に解かないものの、必要以上に遠慮することもしないよう決意したのだ。

とはいっても黒豹ほどには不遜になれなかったが、仁子なりに嫌なことは態度に表したし、有り難い、嬉しい、と思う気持ちも素直に表面に出したつもりだ。

それが功を奏したのか、黒豹も次第に表情から険しさが抜けていったように思う。

仁子の傷の状態が良くなり、いよいよデルフォスへ向けて旅を始めて暫く経つと、ほんの少しだけ会話も成り立つようになった。仁子の喉はまだ喋れるほどではなかったため、どうしても身振りは交えねばならなかったし、一番聞きたい基本情報についてはやはり尋ねることはできなかったが、あの鳥はなんだとか、この葉っぱは食べられるのかとか、シンプルなことであれば黒豹は答えてくれた。ものすごく返答が端的で、会話というよりも質疑応答に近かったような気もするが。

途中からは羽の生えた蜥蜴のような生き物に乗って移動した。ドラゴンというには小さく、下半身に比重もない四足歩行なので、本当に蜥蜴にコウモリのような皮膜の羽を取り付けたような生物だ。黒豹いわく、ベイダと言うらしい。

見たことのない生き物の登場に初めはおっかなびっくりだった仁子も、ときが経てば慣れることは簡単だった。爬虫類が苦手というわけでもなかったため、二日目には動じなくなり、三日目には鼻面を撫でられるようにもなった。

珍しいことではあったがまれに夜も行動することがあり、そんなときには眠気に負けてしまって黒豹の胸に凭れるようにして眠ったりもした。

黒豹は暢気に眠る仁子を叩き起こすでもなく侮蔑の視線を向けるでもなく、淡々とベイダを操っていてくれたので、仁子は思う存分、極上のベルベットの感触を味わうことができた。

古屋を出てからの移動は、仁子にとって驚くほど穏やかに時間が過ぎていった。

だが、それもデルフォスへ着くまでの短い間だけの幻だったのかもしれない。

まさかヒトの住むデルフォスで、喉を目掛けて獣が跳びかかってくるよりもずっと恐ろしい思いをするとは、このときの仁子は露ほども思っていなかった。

態度が軟化し、誤解やわだかまりも少しは薄れたと思っていた黒豹に、裏切られることになろうとは。

仁子は、デルフォスの街で地獄を見ることになる――。

◇助けた豹に殺されて？　後編（後書き）

ものすごくアレな終わりですが、導入的な感じで終了です。
果たして仁子はどんな地獄を見たんでしょうか。不憫。

リクエストくださった方、お気に召して頂ければ幸いです。＾＾＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6017s/

異世界のかけら -断片集-

2012年1月5日23時51分発行